

静岡県立農林環境専門職大学
審査意見への対応を記載した書類
(3月)

1. <専門職大学としての設置の趣旨が不明確>

既設の農林大学校、新設予定の専門職短期大学との違いについて説明が抽象的で不明確なものになっているため、養成される人材像や教育課程を含めて具体的に説明し、専門職大学として設置する意義を明確にすること。(是正事項)・・・1

2. <ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーが不明確>

ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの内容が抽象的なものになっているほか、カリキュラム・ポリシーは単に科目区分の説明になっているため、適切に修正した上で、養成する人材像に対応していることを具体的に説明すること。(是正事項)・14

3. <大学名称とディプロマ・ポリシー、教育課程の不整合>

大学名称に「環境」を冠しているが、本学の特色の説明やディプロマ・ポリシーに環境に関する具体的な記載が無く、教育課程としても十分な「環境」に関する学習が行われるか疑義があり、「環境」を用いる趣旨が不明確である。ディプロマ・ポリシー等における「環境」の位置づけや、体系的に「環境」を学ぶ教育課程であることを具体的に説明するか、適切に改めること。(是正事項)・・・20

4. <履修形態が不明確>

履修モデルや卒業要件の記載からは、コース制のように特定の科目群の履修を求める計画を想定しているように見られるが、例えばコース制であれば、学生がいつコースを選択するのか、特定のコースに希望が偏った場合どのように対応するのかなど、具体的な履修の方策が明らかでないため、学生の履修がどのように行われるのか具体的に説明すること。(是正事項)・・・51

5. <科目の実施体制が不明確>

40名を超えて実施する科目について、教育上必要があり、かつ十分な教育効果をあげることができるかについて説明が無い場合、具体的に説明するか、適切に改めること。また、専門職短期大学と合同で実施する科目についてはそれぞれの学校種としての十分な教育水準が担保される授業計画であるか併せて説明すること。(是正事項)・・・55

6. <科目区分が不適切>

シラバスを確認したところ、科目区分が不適切であると考えられる科目があるため適切に改めること。(是正事項)・・・59

(1)「情報処理基礎」、「情報処理応用」は基礎科目に配置することがふさわしいと考えられる。

(2)「経営実習Ⅰ、Ⅱ」は職業専門科目に配置することがふさわしいと考えられる。

7. <教育課程の体系性が不明確>

職業専門科目について、多くの理論系科目の開設はあるものの、本学の卒業要件では一部の科目しか履修が担保されていない。さらに、そのうち必修とされているものも、例えば、畜産分野の「家畜育種繁殖学」「家畜飼養学」のように、より重要と考えられる科目が必修とされていない。それぞれの分野の理論的な科目を十分に学ぶ教育課程となっているか、卒業要件における必修の範囲等も見直しつつ説明すること。

また、授業科目の履修の順序など教育課程の体系性が明らかでないため、履修系統図等を示しつつ具体的に説明すること。その際、生産理論の科目群では3つの分野のいずれかを選択することだが、それらの分野の選択と他の科目群での科目選択が卒業要件において、どのように関連付けて計画されているのかも具体的に説明すること。

(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

8. <教育課程の編成方針が不明確>

213単位の選択科目を配置する計画であるが、卒業要件を踏まえると、多くの科目が未開講となる懸念や、少数の学生で開講された際に教育効果が低減する恐れがある。人材養成像に照らしてどのような考え方で選択科目を配置し、どのように履修させる計画であるのか具体的に説明し、必要に応じて配置科目を見直すこと。(是正事項)・88

9. <教育課程が不明確>

本学設置の意義として掲げるAIやIoTなどの先端技術の農林業分野への導入を実現するために学ぶ科目が十分に配置されているか疑義がある。先端技術への対応力を担保するための資質・能力を教育課程においてどのように育成するのか、対応する授業科目を示しつつ具体的に説明するか、必要に応じて修正すること。(是正事項)・・・109

10. <職業専門科目の配置が不十分>

専攻する職業分野における労働安全について理解を深める科目が十分に配置されているか疑義があるため、必要に応じて修正し、具体的に対応を説明すること。(是正事項)

・・119

11. <展開科目の設定が不明確>

展開科目は、「専攻する特定の職業分野に関連する他分野の応用的な能力であって、当該職業の分野において創造的な役割を果たすために必要なものを育成する」ことを目的としているが、「環境保全型農業論」、「野生鳥獣管理・利用論」等、職業専門科目に位置づけるべき内容と考えられる科目が含まれている。展開科目を通じて育成する人材像を明確にし、必要な能力を修得するための科目を展開科目に配置するよう修正すること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124

12. <卒業要件の記載が不適切>
専門職大学制度において、実習等にかかる授業科目を40単位以上修得する必要があるが、学則や教育課程の概要の卒業要件において明確な指定がなく、必要な実習に関する単位数を修得することが担保されていないため、適切に改めること。(是正事項)
..... 128
13. <臨地実務実習の具体的計画が不明確>
臨地実務実習について、具体的な説明が不足しているため、以下の点も踏まえて具体的な計画を示し、大学教育としてふさわしい実習水準が確保されていることを説明すること。その際、計画している実習要綱等を添付すること。(是正事項)..... 131
(1) 実習の内容や学生にどのような能力を獲得させるのか、ディプロマ・ポリシーも踏まえて具体的に説明すること。また、習得させようとする知識・技能及びその修得状況の評価方法・評価基準を計画している実習評価表を示し、具体的に説明すること。
(2) 臨地実務実習施設の選定の基準や選定理由について明らかにするとともに、科目の目的を実現するために必要な実習先が確保されているかを明確に説明すること。
(3) 実習先の指導者に求める要件について具体的に説明すること。また、指導者の教育の質をどのように確保するのか、取組や方策についても説明すること。
14. <実習の実施体制が不明確>
専任教員の巡回指導計画について、科目に対する専任教員の配置状況を具体的に説明すること。その際、講義と実習を同時期に担当する場合は、教員ごとの科目等担当時間割等を資料として添付するなどして、教員の負担等の観点から無理のない計画であることについても説明すること。(是正事項)..... 146
15. <入学者選抜方法が不明確>
入学者の選抜方法として、「一般選抜」「推薦型選抜」「特別選抜」の3つの方法を計画しているが、「特別選抜」の募集定員が若干名となっており、入学定員の総数に対して適切な募集定員を設定しているか疑義がある。入学定員に対して具体的な募集定員に改めるか、選抜方法を修正すること。(是正事項)..... 157
16. <専任教員に対する実験研究室の整備状況が不明確>
教員が教育研究を行う環境が整っているか疑義がある。研究室や研究機材を設置する部屋のレイアウト図などを示した上で、教育研究及び学生指導を行うための十分なスペースが確保されているか、具体的に説明すること。(是正事項)..... 159

17. <図書等の整備計画が不明確>

図書等の整備計画について、完成年度までの整備冊数等について説明はあるものの、新設予定の専門職短期大学にも同様の記載があり、どの時点で整備が完了するのか不明であるほか、毎年度の整備の計画も明らかでない。図書の目録や年度ごとの整備計画等を示しつつ、どのような考え方で図書等を整備する計画であるか説明すること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168

18. <附属施設の整備計画が不明確>

本学は農業、畜産、林業の各分野の専門職業人を養成する計画であるため、教育研究に必要な施設として「農場」「飼育場または牧場」「演習林」を配置する必要があるが、既存の農林大学校の実習ほ場、県有施設である農林技術研究所や畜産技術研究所を利用するとの説明はあるものの、当該施設の内容や、どのように本学の教育研究に使用が可能なのかも説明が無く、教育研究上支障なく整備される計画であるか確認できない。附属施設の内容や利用計画等を具体的に説明し、中長期的に教育研究上支障がないことを明確にすること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171

19. <技術職員の配置計画が不明確>

技術職員を15名配置する計画であるが、同時期に設置予定の専門職短期大学と兼務する計画となっており、十分な実施体制となっているか疑義がある。本学における技術職員の役割を具体的に示しつつ教育研究上支障ない実施体制であることを説明すること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

20. <書類不備>

申請書類に誤記や言葉の不一致が散見されるので、適切に修正すること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187

1. <専門職大学としての設置の趣旨が不明確>

既設の農林大学校、新設予定の専門職短期大学との違いについて説明が抽象的で不明確なものになっているため、養成される人材像や教育課程を含めて具体的に説明し、専門職大学として設置する意義を明確にすること。

(対応)

本学を専門職大学として設置する意義及び既設の農林大学校や新設予定の専門職短期大学との違いについての養成する人材像や教育課程を含めた具体的な説明を「設置の趣旨等を記載した書類」に追記する。

また、教育課程の比較の参考とするため、既設の農林大学校及び新設予定の専門職短期大学のカリキュラムマップを資料に追加する。

(詳細説明)

本学を設置する目的は、農林業に応用可能な技術革新の進展に伴う生産技術の高度化など近年の農林業を取り巻く環境の変化や、農林業の基盤である農山村地域における高齢化・人口減少に伴う活力低下などを踏まえ、こうした農林業を取り巻く環境変化に対応できるとともに農山村の地域社会を支える人材を養成することにより、農林業及び農山村地域の持続的な発展に貢献することである。

農林業を取り巻く環境変化の主なものとしては、生産技術の高度化、経営体の大規模化や経営の多角化、消費者ニーズの多様化があり、今後、農林業の持続的な発展に向けては、これらの環境変化に対応できる能力を身に付けた農林業者を養成していく必要がある。

また、農山村地域を構成する豊かな自然環境や美しい景観、固有の伝統・文化などは、農林業の営みを通じて長い年月をかけて形成されてきたものであり、農林業者には、これからそれらを守り育みながら、農山村の地域社会を支えていくことが期待されている。

本学は農林業経営者を養成するための教育機関であり、既設の農林大学校の研究部においても、「農林業経営体の中核を担う人材」の養成を目指して教育を行っているが、教育課程や教員の資格・能力が農林業を取り巻く環境変化に対応できるレベルに達していないことから、現状としては、経営体の大規模化等に対応するための十分な能力を有する人材を養成できていない。また、既設の農林大学校においては、農山村の地域社会を支えていく人材を養成するための教育を行っていない。

このような既設の農林大学校における人材養成の課題を解決するため、専門職大学への移行により、教育課程の拡充や教員のレベルアップなど人材養成機能の充実を図り、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来

のリーダーとして、それらを守り育てていくことができる人材」を養成するための新たな高等教育機関として本学を設置するものである。

本学は、「農林業経営体の中核を担う人材」を養成する既設の農林大学校研究部とは、4年間を通じて経営の大規模化等に対応できる経営管理能力を身に付ける教育課程としている点や、生産技術の高度化、消費者ニーズの多様化に対応した教育課程としている点、さらに、農山村の地域社会をリーダーとして支えていく人材を養成するための教育課程を有している点で異なっている。（本学と既設の農林大学校研究部との違いについての、養成する人材像と教育課程を含めた具体的な説明は、別紙2のとおりである。）

また、「農林業生産現場におけるリーダーであるとともに農山村の地域社会を農林業者として支えていく人材」を養成する新設予定の専門職短期大学とは、農林業経営者を養成する教育機関である点や、農山村の地域社会をリーダーとして支えていくための教育課程としている点などで異なっている。（本学と新設予定の専門職短期大学との違いについての、養成する人材像と教育課程を含めた具体的な説明は、別紙3のとおりである。）

参考資料として、本学のカリキュラムマップ（新旧）を別添資料1-1、既設の農林大学校のカリキュラムマップを別添資料1-2、農林環境専門職大学短期大学部のカリキュラムマップを別添資料1-3に示す。

【別紙1】農林環境専門職大学・同短期大学部を設置する意義

1 設置の目的

農林業を取り巻く環境変化に対応できる人材の養成

○生産技術の高度化への対応力

生産理論の体系的な理解、先端技術に関する知識、高度な実践力

○経営体の大規模化や経営の多角化への対応力

経営管理能力、加工・流通・販売の知識

○消費者ニーズの多様化への対応力

生産物の高付加価値化や、経営において新たな事業展開を生み出すための創造力

農山村の地域社会を支える人材の養成

農林業経営や生産のプロフェッショナルであるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会を支える人材として、それらを守り育てていくことができる人材を養成し、高齢化や人口減少が進む農山村地域の維持・活性化に貢献

農林業及び
農山村地域
の持続的な
発展

2 農林大学校から専門職大学・専門職短期大学への移行イメージと養成する人材像

農林大学校

【研究部（2年課程）】

経営体の中核を担う経営者

（現状）

- ・経営体の大規模化等に対応できる人材を養成できていない
- ・農山村の地域社会を支える人材を養成する教育を行っていない

【養成部（2年課程）】

生産現場のリーダー

（現状）

- ・生産技術の高度化等に対応できる人材を養成できていない
- ・農山村の地域社会を支える人材を養成する教育を行っていない

教育課程の拡充・教員のレベルアップ

農林環境専門職大学

【4年制】

経営体の中核を担う人材かつ農山村の地域社会のリーダー

（求められる資質・能力）

- ①専門分野内外の幅広い知識やコミュニケーション能力等
- ②経営体の大規模化や多角化等に対応していくための経営管理能力、経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識
- ③生産現場の状況を的確に把握するための生産に関する基礎的な知識・技術や生産に活用される先端技術に関する知識
- ④農山村の地域社会における将来のリーダーとして必要な農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承等に関する知識
- ⑤農山村の地域資源を活用することにより経営における新たな事業展開を生み出す手法の理解
- ⑥経営の課題解決に向けた情報収集等の能力

農林環境専門職大学短期大学部

【2年制】

生産現場のリーダーかつ農山村の地域社会を支える農林業者

（求められる資質・能力）

- ①社会人として必要な知識やコミュニケーション能力等
- ②生産現場の生産性向上等を図るための生産に関する専門的な知識・技術や先端技術を生産現場に導入する能力
- ③農山村の地域社会を支える農林業者として必要な農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承等に関する知識
- ④農山村の地域資源の活用や加工・流通・販売などに関する知識を活用し、生産物の付加価値向上を図る手法の理解
- ⑤生産現場の課題解決に向けた情報収集等の能力

【別紙2】農林大学校と本学の養成する人材像と教育課程の違い

区分	農林大学校（養成部＋研究部）	本学
養成する人材像	<p>経営体の中核を担う人材</p> <p>※現状は、経営体の大規模化等に対応できる人材を養成できていない。また、農山村の地域社会を支える人材を養成する教育を行っていない。</p>	<p>経営体の中核を担う人材かつ農山村の地域社会のリーダー</p>
教育課程	生産技術の高度化への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経営者として生産現場の状況を的確に把握するための、生産に関する基礎的な知識・技術や先端技術に関する幅広い知識を身に付ける教育課程としており、生産理論の講義と生産技術を学ぶ実習等を科目として区分し、4年間を通じて生産理論を体系的に学ぶ教育課程としている。 ・ 生産に関する実習については、生産技術に加え、生産マネジメント能力を養成する教育課程としている。 ・ 臨地実務実習は、教員が実習先と連携し、実習状況について情報を共有するとともに、教員が統一的な基準に基づいて評価を行うなど実践力の養成を重視した教育課程としている。
	経営体の大規模化や経営の多角化への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ 企業的经营管理や加工・流通・販売、マーケティングなどを研究部の2年課程のみで学ぶこととしており、経営体の大規模化等に対応できる能力を身に付ける教育課程となっていない。 ・ 経営に関する臨地実務実習が必修科目になく、経営の実践力の養成を重視した教育課程となっていない。
	消費者ニーズの多様化への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ 農山村の伝統・文化の継承などについて学び、それらの地域資源を活用して農林業経営における新たな事業展開を生み出すための創造力を身に付ける教育課程としている。
	農山村の地域社会を支える人材の養成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 農林業の営みを通じて形成される農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育ていく人材を養成する教育課程としている。

【別紙3】農林環境専門職大学短期大学部と本学の養成する人材像と教育課程の違い

区分		農林環境専門職大学短期大学部	本学
養成する人材像		<u>生産現場のリーダーかつ農山村の地域社会を支える農林業者</u>	<u>経営体の中核を担う人材かつ農山村の地域社会のリーダー</u>
教育課程	生産技術の高度化への対応	<ul style="list-style-type: none"> 生産現場のリーダーとして生産現場の生産性向上等を図るための、生産に関する専門的な知識・技術や先端技術を生産現場に導入する能力を身に付ける教育課程としており、生産理論の講義と生産技術を学ぶ実習等を科目として区分し、2年間を通じて生産理論を体系的に学ぶ教育課程としている。 生産に関する実習については、作目に応じた専門的な生産技術を養成する教育課程としている。 臨地実務実習は、教員が実習先と連携し、実習状況について情報を共有するとともに、教員が統一的な基準に基づいて評価を行うなど実践力の養成を重視した教育課程としている。 	<ul style="list-style-type: none"> 経営者として生産現場の状況を的確に把握するための、生産に関する基礎的な知識・技術や先端技術に関する幅広い知識を身に付ける教育課程としており、生産理論の講義と生産技術を学ぶ実習等を科目として区分し、4年間を通じて生産理論を体系的に学ぶ教育課程としている。 生産に関する実習については、生産技術に加え、生産マネジメント能力を養成する教育課程としている。 臨地実務実習は、教員が実習先と連携し、実習状況について情報を共有するとともに、教員が統一的な基準に基づいて評価を行うなど実践力の養成を重視した教育課程としている。
	経営体の大規模化や経営の多角化への対応	—	<ul style="list-style-type: none"> 企業の経営管理に加え、経営管理に活用される先端技術や、加工・流通・販売、マーケティングなどについて、4年間を通じて体系的に学び、経営体の大規模化等に対応できる能力を身に付ける教育課程としている。 経営体への臨地実務実習を必修とし、経営についての実践力の養成を重視した教育課程としている。
	消費者ニーズの多様化への対応	<ul style="list-style-type: none"> 農山村の地域資源である伝統・文化の継承や、加工・流通・販売などについて学び、それらの知識を活用して生産物の付加価値を向上させるための創造力を身に付ける教育課程としている。 	<ul style="list-style-type: none"> 農山村の伝統・文化の継承などについて学び、それらの地域資源を活用して農林業経営における新たな事業展開を生み出すための創造力を身に付ける教育課程としている。
	農山村の地域社会を支える人材の養成	<ul style="list-style-type: none"> 農林業の営みを通じて形成される農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会を支える農林業者として、それらを守り育ていく人材を養成する教育課程としている。 	<ul style="list-style-type: none"> 農林業の営みを通じて形成される農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育ていく人材を養成する教育課程としている。

この比較を踏まえた上で、既存大学や新設予定の専門職短期大学との違いについて具体的に説明するため、設置の趣旨を修正・追記する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (6 ページ)

新	旧
<p style="text-align: center;">(略)</p> <p>(4) 本学設置の意義</p> <p><u>本学を設置する目的は、農林業に応用可能な技術革新の進展に伴う生産技術の高度化など近年の農林業を取り巻く環境の変化や、農林業の基盤である農山村地域における高齢化・人口減少に伴う活力低下などを踏まえ、こうした農林業を取り巻く環境変化に対応できるとともに農山村の地域社会を支える人材を養成することにより、農林業及び農山村地域の持続的な発展に貢献することである。</u></p> <p><u>農林業を取り巻く環境変化の主なものとしては、生産技術の高度化、経営体の大規模化や経営の多角化、消費者ニーズの多様化があり、今後、農林業の持続的な発展に向けては、これらの環境変化に対応できる能力を身に付けた農林業者を養成していく必要がある。</u></p> <p><u>また、農山村地域を構成する豊かな自然環境や美しい景観、固有の伝統・文化などは、農林業の営みを通じて長い年月をかけて形成されてきたものであり、農林業者には、これからもそれらを守り育みながら、農山村の地域社会を支えていくことが期待されている。</u></p> <p><u>本学は農林業経営者を養成するための教育機関であり、既設の農林大学校の研究部においても、「農林業経営体の中核を担う人材」の養成を目指して教育を行っているが、教育課程や教員の資格・能力が農林業を取り巻く環境変化に対応できるレベルに達していないことから、現状としては、経営体の大規模</u></p>	<p style="text-align: center;">(略)</p> <p>(4) 本学設置の意義</p> <p><u>県内農林業法人や高校生に対するアンケート調査の結果や、「静岡県専門職大学基本構想策定委員会」での議論を踏まえた上で、専門職大学の設置の意義として、以下の4点を挙げる。</u></p> <p><u>①個々の農林業経営体の規模が拡大し、農林業に応用可能な技術革新が進展してきたことから、農林業現場では基礎的な生産能力に加えて、加工・流通・販売の知識や経営管理能力、健康を志向した品質の向上やコストの低減など生産性を高める先端技術への対応能力を持ち、経営改革を主導できる人材が求められており、生産技術の習得に向けた教育に加え、経営能力や管理能力、先端技術の理解力など、農林業現場で必要となる能力を高める実践的な教育を効果的に行うことで、将来の農林業現場を支える専門職業人を養成する。</u></p> <p><u>②景観の形成や自然環境の保全、水源の涵養など、農山村の多面的機能が注目される一方で、農山村地域では近年、高齢化や人口減少に伴い活力が低下していることから、農林業者が経営を行う上で、自然と共生しながら農山村の景観や環境を保全していくとともに、地域の文化や伝統を守り育み、地域社会を支えていく農林業者を養成する。</u></p> <p><u>③県内の子弟のみならず、年齢や国籍、性別を問わず農林業を志す有為な人材に対し、質の高い実践的な高等教育を提供す</u></p>

新	旧
<p>化等に対応するための十分な能力を有する人材を養成できていない。また、既設の農林大学校においては、農山村の地域社会を支えていく人材を養成するための教育を行っていない。</p> <p><u>このような既設の農林大学校における人材養成の課題を解決するため、専門職大学への移行により、教育課程の拡充や教員のレベルアップなど人材養成機能の充実を図り、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てることができる人材」を養成するための新たな高等教育機関として本学を設置するものである。</u></p> <p>(略)</p>	<p>ることにより、本県農林業の発展とともに、国際社会に貢献する人材を数多く養成する。</p> <p>④多様な人々が大学に集い、交流することで、近年人口の流出が続く本県において、地域振興や賑いの創出が期待される。さらに、他地域出身者が卒業後に定住する可能性や、対外的な「静岡県」の宣伝効果などにより、地域の活性化にも寄与することができる。</p> <p>(略)</p>

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (9ページ)

新	旧
<p>(6) 本学の基本理念</p> <p>これまで静岡県立農林大学校では、校訓である「耕土耕心」、すなわち「大地を耕すことは自らの心を耕すことである」という理念の下、本県農林業の発展に貢献する、現場で活躍する農林業者を数多く輩出してきた。</p> <p>本学においても、引き続きこの「耕土耕心」の理念を尊重した上で、年齢や国籍、性別を問わず、<u>農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てることができる人材を養成することを基本理念とする。</u></p>	<p>(6) 本学の基本理念</p> <p>これまで静岡県立農林大学校では、校訓である「耕土耕心」、すなわち「大地を耕すことは自らの心を耕すことである」という理念の下、本県農林業の発展に貢献する、現場で活躍する農林業者を数多く輩出してきた。</p> <p>本学においても、引き続きこの「耕土耕心」の理念を尊重した上で、年齢や国籍、性別を問わず、<u>将来の農林業の経営環境の変化に対応し、先端技術などを活用して経営革新を推し進めるとともに、農山村の景観・環境・文化の継承者として、地域社会を中心となって支えていく人材を養成することを基本理念とする。</u></p>

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (10 ページ)

新	旧
<p>(8) 静岡県立農林大学校との違い</p> <p><u>本学は、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに農山村の地域社会をリーダーとして支えていく人材」を養成する専門職大学であり、「農林業経営体の中核を担う人材」を養成する既設の農林大学校研究部とは、4年間を通じて経営の大規模化等に対応できる経営管理能力を身に付ける教育課程としている点や、生産技術の高度化、消費者ニーズの多様化に対応した教育課程としている点、さらに、農山村の地域社会をリーダーとして支えていく人材を養成するための教育課程を有している点で異なっている。</u></p> <p><u>「生産技術の高度化への対応」、「経営体の大規模化や経営の多角化への対応」、「消費者ニーズの多様化への対応」、「地域社会を支える人材の養成」の4つの観点から比較した具体的な相違点は以下のとおりである。</u></p> <p><u>なお、比較のための参考資料として、本学のカリキュラムマップを資料 21-1、農林大学校のカリキュラムマップを資料 21-2 に示す。</u></p> <p><u>○生産技術の高度化への対応</u></p> <p><u>生産技術の高度化に対応していくためには、技術の裏付けとなる生産理論の体系的な理解や先端技術に関する知識、高度な実践力などを身に付ける必要がある。</u></p> <p><u>農林大学校においては、養成部では、生産理論の講義と生産技術を学ぶ実習が科目として区分されておらず、特定分野の理論だけを研究部の講義で学ぶこととしており、4年間を通じて生産理論を体系的に学ぶ教育課程となっていない。また、先端技術を学ぶための教育課程はない。</u></p> <p><u>生産に関する実習については、作目に応じ</u></p>	<p>(8) 静岡県立農林大学校との違い</p> <p><u>生産環境経営学部生産環境経営学科は静岡県立農林大学校の養成部及び研究部を発展的に継承するものである。静岡県立農林大学校では、養成部2年で生産技術を学び、さらに研究部2年で農業経営などを学ぶ課程であったが、生産環境経営学部では4年一貫教育により、基礎的生産技術と農林業経営等を並行して体系的に学ぶことができることに違いがある。静岡県立農林大学校養成部及び研究部との違いについては、後述する「学部学科の特色」の中でさらに説明する。</u></p>

新	旧
<p><u>た専門的な生産技術を養成する教育課程としているが、臨地実務実習の評価が統一的な基準に基づいて行われていないなど、実践力の養成を重視した教育課程となっていない。</u></p> <p><u>これに対し本学では、経営者として生産現場の状況を的確に把握するための、生産に関する基礎的な知識・技術や先端技術に関する幅広い知識を身に付ける教育課程としており、生産理論の講義と生産技術を学ぶ実習等を科目として区分し、4年間を通じて生産理論を体系的に学ぶ教育課程としている。</u></p> <p><u>また、生産に関する実習については、生産技術に加え、生産マネジメント能力を養成する教育課程としている。</u></p> <p><u>さらに、臨地実務実習は、教員が実習先と連携し、実習状況について情報を共有するとともに、教員が統一的な基準に基づいて評価を行うなど実践力の養成を重視した教育課程としている。</u></p> <p><u>○経営体の大規模化や経営の多角化への対応</u></p> <p><u>農林大学校では、企業的経営管理や加工・流通・販売、マーケティングなどを研究部の2年課程のみで学ぶこととしており、経営体の大規模化等に対応できる能力を身に付ける教育課程となっていない。</u></p> <p><u>また、経営に関する臨地実務実習が必修科目になく、経営の実践力の養成を重視した教育課程となっていない。</u></p> <p><u>これに対し本学では、企業的経営管理に加え、農林業経営に活用される先端技術や、加工・流通・販売、マーケティングなどについて、4年間を通じて体系的に学び、経営体の大規模化等に対応できる能力を身に付ける教育課程としている。</u></p> <p><u>また、経営に関する臨地実務実習を必修とし、経営の実践力の養成を重視した教育課程</u></p>	

新	旧
<p><u>としている。</u></p> <p><u>○消費者ニーズの多様化への対応</u> 農林大学校では、<u>養成部・研究部を通じて加工・流通・販売、マーケティングなどの科目が少なく、消費者ニーズの多様化に十分に</u><u>対応できる教育課程となっていない。</u></p> <p><u>これに対し本学では、農山村の伝統・文化の継承などについて学び、それらの地域資源を活用して農林業経営における新たな事業展開を生み出すための創造力を身に付ける教育課程としている。</u></p> <p><u>○農山村の地域社会を支える人材の養成</u> 農林大学校には、<u>養成部・研究部を通じて農山村の地域社会を支える人材を養成するための教育課程はない。</u></p> <p><u>これに対し本学では、農林業の営みを通じて形成される農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てていく人材を養成する教育課程としている。</u></p> <p>(9) <u>新設予定の専門職短期大学との違い</u> 本学は、<u>「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに農山村の地域社会をリーダーとして支えていく人材」を養成する専門職大学であり、「農林業生産現場におけるリーダーであるとともに農山村の地域社会を農林業者として支えていく人材」を養成する新設予定の専門職短期大学とは、農林業経営者を養成する教育機関である点や、農山村の地域社会をリーダーとして支えていくための教育課程としている点などで異なっている。</u></p> <p><u>「生産技術の高度化への対応」、「経営体の大規模化や経営の多角化への対応」、「消費者ニーズの多様化への対応」、「地域社会を支え</u></p>	<p></p> <p>(9) <u>併設する短期大学部との違い</u> 本学には「<u>農林環境専門職大学短期大学部</u>」を併設する。<u>短期大学部においては、農林業生産に関する技術・知識を身に付けることを目的とした教育課程により、生産現場におけるプロフェッショナルを養成することを目的としている。このため、農林業生産と経営、さらに地域振興や環境保全について学修し、農林業経営や地域社会におけるリーダーとなりうる人材を養成することを目的とする本学とは、養成人材像及び教育課程が異なっている。</u></p>

新	旧
<p><u>る人材の養成」の4つの観点から比較した具体的な相違点は以下のとおりである。</u></p> <p><u>なお、比較のための参考資料として、新設予定の専門職短期大学のカリキュラムマップを資料21-3に示す。</u></p> <p><u>○生産技術の高度化への対応</u></p> <p><u>新設予定の専門職短期大学では、生産現場のリーダーとして生産現場の生産性向上等を図るための、生産に関する専門的な知識・技術や先端技術を生産現場に導入する能力を身に付ける教育課程としており、生産理論の講義と生産技術を学ぶ実習等を科目として区分し、2年間を通じて生産理論を体系的に学ぶ教育課程としている。</u></p> <p><u>また、生産に関する実習については、作目に応じた専門的な生産技術を養成する教育課程としている。</u></p> <p><u>さらに臨地実務実習は、教員が実習先と連携し、実習状況について情報を共有するとともに、教員が統一的な基準に基づいて評価を行うなど実践力の養成を重視した教育課程としている。</u></p> <p><u>これに対し本学では、経営者として生産現場の状況を的確に把握するための、生産に関する基礎的な知識・技術や先端技術に関する幅広い知識を身に付ける教育課程としており、生産理論の講義と生産技術を学ぶ実習等を科目として区分し、4年間を通じて生産理論を体系的に学ぶ教育課程としている。</u></p> <p><u>また、生産に関する実習については、生産技術に加え、生産マネジメント能力を養成する教育課程としている。</u></p> <p><u>臨地実務実習については、新設予定の専門職短期大学と同様に、教員が実習先と連携し、実習状況について情報を共有するとともに、教員が統一的な基準に基づいて評価を行うなど実践力の養成を重視した教育課程と</u></p>	

新	旧
<p><u>している。</u></p> <p>○<u>経営体の大規模化や経営の多角化への対応</u></p> <p><u>新設予定の専門職短期大学は、農林業生産者を養成する教育機関であるため、経営体の大規模化等に対応するための教育課程はない。</u></p> <p><u>これに対し本学では、企業的経営管理に加え、経営管理に活用される先端技術や、加工・流通・販売、マーケティングなどについて、4年間を通じて体系的に学び、経営体の大規模化等に対応できる能力を身に付ける教育課程としている。</u></p> <p><u>また、経営体への臨地実務実習を必修とし、経営についての実践力の養成を重視した教育課程としている。</u></p> <p>○<u>消費者ニーズの多様化への対応</u></p> <p><u>新設予定の専門職短期大学では、農山村の地域資源である伝統・文化の継承や、加工・流通・販売などについて学び、それらの知識を活用して生産物の付加価値を向上させるための創造力を身に付ける教育課程としている。</u></p> <p><u>これに対し本学では、農山村の伝統・文化の継承などについて学び、それらの地域資源を活用して農林業経営における新たな事業展開を生み出すための創造力を身に付ける教育課程としている。</u></p> <p>○<u>農山村の地域社会を支える人材の養成</u></p> <p><u>新設予定の専門職短期大学では、農林業の営みを通じて形成される農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会を支える農林業者として、それらを守り育ていく人材を養成する教育課程としている。</u></p>	

新	旧
<u>これに対し本学では、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てていく人材を養成する教育課程として</u> <u>いる。</u>	

2. <ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーが不明確>

ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの内容が抽象的なものになっているほか、カリキュラム・ポリシーは単に科目区分の説明になっているため、適切に修正した上で、養成する人材像に対応していることを具体的に説明すること。

(対応)

本学において養成する人材像は、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てていくことができる人材」であり、この人材像について当初申請から変更はなく、今回はこの人材像に対応したものであることが明確となるようディプロマ・ポリシーの内容を具体的なものに修正する。

カリキュラム・ポリシーについても、ディプロマ・ポリシーの修正を踏まえて、これに対応したものとなるよう修正する。また、養成する人材像とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの対応関係を具体的に別紙に示す。

修正後のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーは以下のとおりであり、「設置の趣旨等を記載した書類」の該当箇所を修正する。

<ディプロマ・ポリシー>

農林業経営者に求められる次に掲げる資質・能力を身に付け、所定の単位を修得した者に学位を授与する。

- (1) 専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。
- (2) 農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。
- (3) 農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。
- (4) 農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。
- (5) 農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。
- (6) 修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探求し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。

<カリキュラム・ポリシー>

ディプロマ・ポリシーを実現するためのカリキュラム・ポリシーを、以下のとおり定める。

- (1) 一般教養やコミュニケーション・スキルなどを学ぶ教育課程を編成する。
- (2) 企業的な経営管理や経営戦略、加工・販売の手法や流通の仕組みなどを学ぶ教育課程を編成する。
- (3) 農林業に関する基礎的な知識及び農林業生産に関する基礎的な理論や技術を学ぶ教育課程を編成する。
- (4) 農林業の経営や生産に活用される先端技術を学ぶ教育課程を編成する。
- (5) 農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産を学ぶ教育課程を編成する。
- (6) 農山村の伝統・文化の継承や地域社会について学ぶとともに、農山村の地域資源を農林業経営に活用する手法を学ぶ教育課程を編成する。
- (7) 農林業経営における課題の解決に向けた研究の手法などを学ぶ教育課程を編成する。

(別紙)

養成する人材像とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの対応関係

養成する人材像	
農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てていくことができる人材	
ディプロマ・ポリシー	カリキュラム・ポリシー
(1) 専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。	(1) 一般教養やコミュニケーション・スキルなどを学ぶ教育課程を編成する。
(2) 農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。	(2) 企業的な経営管理や経営戦略、加工・販売の手法や流通の仕組みなどを学ぶ教育課程を編成する。
(3) 農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。	(3) 農林業に関する基礎的な知識及び農林業生産に関する基礎的な理論や技術を学ぶ教育課程を編成する。
(4) 農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。	(4) 農林業の経営や生産に活用される先端技術を学ぶ教育課程を編成する。
(5) 農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。	(5) 農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産を学ぶ教育課程を編成する。
(6) 修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探求し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。	(6) 農山村の伝統・文化の継承や地域社会について学ぶとともに、農山村の地域資源を農林業経営に活用する手法を学ぶ教育課程を編成する。
	(7) 農林業経営における課題の解決に向けた研究の手法などを学ぶ教育課程を編成する。

新	旧
<p>(4) ディプロマ・ポリシー</p> <p>本学科は、(3) の教育目標を実現するために設けた所定の基礎科目・職業専門科目・展開科目・総合科目を履修することにより、<u>農林業経営者に求められる次に掲げる資質・能力を身に付け、所定の単位を修得し、プロジェクト研究を経て卒業論文を提出した者に学位を授与する。</u></p> <p>①<u>専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。</u></p> <p>②<u>農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。</u></p> <p>③<u>農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。</u></p> <p>④<u>農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。</u></p> <p>⑤<u>農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。</u></p> <p>⑥<u>修得した専門知識と技術を駆使して農林業経営における課題を探求し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。</u></p>	<p>(4) ディプロマ・ポリシー</p> <p>本学科は、(3) の教育目標を実現するために設けた所定の基礎科目・職業専門科目・展開科目・総合科目を履修することにより、次に掲げる資質・能力を身に付け、所定の単位を修得し、プロジェクト研究を経て卒業論文を提出した者に学位を授与する。</p> <p>① <u>専門分野のみにとらわれない幅広い知識を備え、価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養</u></p> <p>2-1 <u>農林業生産を行うための基礎的な知識・技術と、それを活用するための能力、先端技術への対応力</u></p> <p>2-2 <u>農林業経営を行うための加工・流通・販売の知識や経営管理能力</u></p> <p>2-3 <u>農林業生産及び経営の実験・実習・演習を通じて身に付け、自主的・継続的に学習を進める能力、他者と協調し事業を推進できる能力</u></p> <p>3 <u>専門職業人としての役割と社会的責任を理解した上での、農林業・農山村が有する多面的機能と、その資源を保全する手法の理解</u></p> <p>4-1 <u>修得した専門知識と技術を駆使して課題を探求し、解決に必要な情報を収集・分析・整理する能力</u></p> <p>4-2 <u>分析・整理した結果を表現する論理的な記述力、口頭発表力、コミュニケーション能力</u></p>

新	旧
<p>なお、本学は1学部1学科のため、この<u>ディプロマ・ポリシーは本学全体のディプロマ・ポリシーとする。</u></p>	

(新旧対照表) 設置の趣旨を記載した書類 (18 ページ)

新	旧
<p>4 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>(1) <u>教育課程編成の基本方針(カリキュラム・ポリシー)</u></p> <p>前述の本学部の「<u>基本理念</u>」に掲げる<u>養成人材像</u>並びに「<u>ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)</u>」を実現するためのカリキュラム・ポリシー(教育課程編成方針)を、以下のとおり定める。</p> <p>カリキュラム・ポリシー</p> <p>①<u>一般教養やコミュニケーション・スキルなどを学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>②<u>企業的な経営管理や経営戦略、加工・販売の手法や流通の仕組みなどを学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>③<u>農林業に関する基礎的な知識及び農林業生産に関する基礎的な理論や技術を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>④<u>農林業の経営や生産に活用される先端技術を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>⑤<u>農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>⑥<u>農山村の伝統・文化の継承や地域社会などについて学ぶとともに、農山村の地域資源を農林業経営に活用する手法を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>⑦<u>農林業経営における課題の解決に向けた研究の手法などを学ぶ教育課程を編成する。</u></p>	<p>4 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>(1) <u>教育課程編成の基本方針とカリキュラム・ポリシー</u></p> <p>前述の本学部の「<u>目的</u>」及び「<u>人材育成方針</u>」並びに「<u>ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)</u>」を実現するためのカリキュラム・ポリシー(教育課程編成方針)を、以下のとおり定める。</p> <p>カリキュラム・ポリシー</p> <p>①<u>基礎科目</u></p> <p><u>幅広い知識や多面的な物事の考え方などを身に付けるため、人文科学や社会科学、コミュニケーションスキルなどを学ぶ科目を配当する。</u></p> <p>②<u>職業専門科目</u></p> <p><u>農林業生産及び経営に必要な知識・技術と先端技術への対応力を身に付けるため、農林業基礎、生産理論、経営管理などを学ぶ科目を配当するとともに、実習・演習科目を重点的に配当する。</u></p> <p>③<u>展開科目</u></p> <p><u>農林業や農山村が有する多面的機能と、その資源を保全する手法を理解するため、環境保全や農山村振興などについて学ぶ科目を配当する。</u></p> <p>④<u>総合科目</u></p> <p><u>農林業経営における課題を探究し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、その成果を取りまとめる科目を配当する。</u></p>

新	旧
<p>各CP（カリキュラム・ポリシー、以下同）は各DP（ディプロマ・ポリシー、以下同）に対応しており、各DPを達成するために構成されている。具体的には、<u>DP①はCP①、DP②はCP②と④、DP③はCP③と④、DP④はCP⑤と⑥、DP⑤はCP⑥、DP⑥はCP⑦</u>に対応しており、カリキュラム・ポリシーに基づき配当された科目を履修することで、ディプロマ・ポリシーに掲げる能力・素養を身に付けることができる。<u>CPと教育課程とDPの対応</u>について表にまとめた「カリキュラム・マップ」を資料 <u>21-1</u> に示す。</p> <p>なお、<u>本学は1学部1学科のため、このカリキュラム・ポリシーは本学全体のカリキュラム・ポリシーとする。</u></p>	<p>各CP（カリキュラム・ポリシー、以下同）は各DP（ディプロマ・ポリシー、以下同）に対応しており、各DPを達成するために構成されている。具体的には、<u>CP1はDP1に、CP2はDP2-1から2-3に、CP3はDP3に、CP4はDP4-1及び4-2</u>に対応しており、カリキュラム・ポリシーに基づき配当された科目を履修することで、ディプロマ・ポリシーに掲げる能力・素養を身に付けることができる。<u>DPとCPの対応</u>について表にまとめた「カリキュラム・マップ」を資料 <u>21</u> に示す。</p>

3. <大学名称とディプロマ・ポリシー、教育課程の不整合>

大学名称に「環境」を冠しているが、本学の特色の説明やディプロマ・ポリシーに環境に関する具体的な記載がなく、教育課程としても十分な「環境」に関する学習が行われるか疑義があり、「環境」を用いる趣旨が不明確である。ディプロマ・ポリシー等における「環境」の位置付けや、体系的に「環境」を学ぶ教育課程であることを具体的に説明するか、適切に改めること。

(対応)

ディプロマ・ポリシー等における「環境」の位置付けと、「環境」を学ぶ教育課程についての説明を「設置の趣旨等を記載した書類」に追記するとともに、「授業科目の概要」の関連箇所を修正する。

(詳細説明)

1 ディプロマ・ポリシー等における「環境」の位置付け

(1) 本学の特色における位置付け

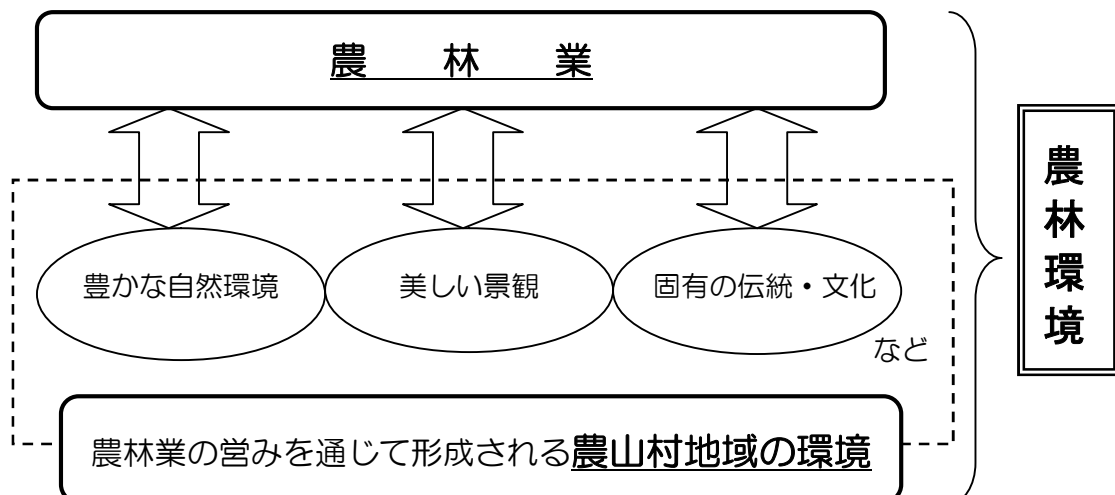
農山村は農林業の持続的な発展の基盤であるが、近年は、人口減少や高齢化の進行に伴う農山村地域の活力低下が農林業振興における大きな課題となっている。

一方で、農山村が有する豊かな自然環境や美しい景観、固有の伝統・文化などは、その地域の農林業の営みを通じて育まれてきたものであり、農林業者には、これらの価値を理解し、守り育みながら、農山村の地域社会を支えていくことが期待されている。

このことから、本学においては、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育ていくことができる人材」を養成し、農林業及び農山村地域の持続的な発展に貢献することを目指すこととしている。

大学名称に冠している「環境」は、「農林業の営みを通じて形成される農山村地域の自然環境、景観、伝統・文化などの総体としての環境」を意味しており、そのような農山村地域の環境を守り育ていくことができる人材を養成するという本学の特色を表すものである。

～ 本学の名称に冠する「農林環境」の考え方 ～



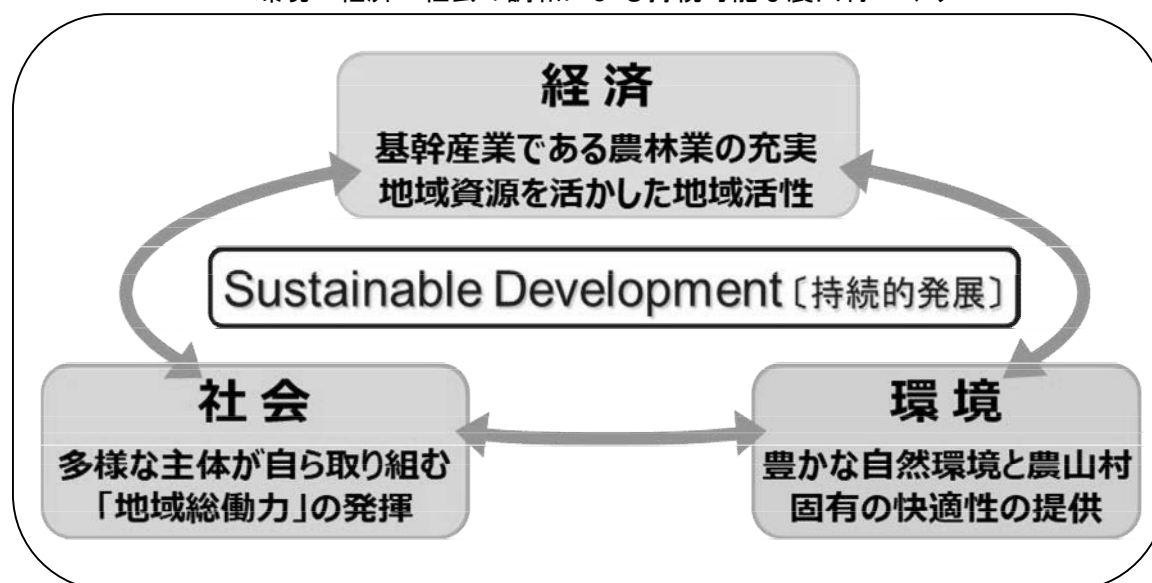
なお、このような本学の人材養成の理念は、「農業については、その有する食料供給機能と多面的機能の重要性にかんがみ、必要な農業資源及び農業の担い手が確保され、地域の特性に応じてこれらが効率的に組み合わせられた望ましい農業構造が確立されるとともに、農業の自然循環機能が維持増進されることにより、その持続的な発展が図られなければならない」、そして「農村については、農業の持続的な発展の基盤たる役割を果たしていることにかんがみ、農業の有する食料供給機能及び多面的機能が適切かつ十分に発揮されるよう、その振興が図られなければならない」という「食料・農業・農村基本法」の基本理念に通じるものであり、大学名称に冠している「環境」には、そのような本学の人材育成の理念が込められている。

(別添資料 3-1 「食料・農業・農村基本法の骨子」抜粋)

また、本県総合計画の分野別計画である「静岡県経済産業ビジョン」の実行計画として位置付けられている「“ふじのくに”の農山村づくり（静岡県農業農村整備みらいプラン 2018-2021）」においては、本県の農山村づくりの理念を「美しく品格のある農山村の創造」とし、「景観の美しさにとどまらず、その源となる農業に勤しむ生産者と、地域の資源を保全し次世代へ継承しようとする様々な人々の共同体意識に至る外形と内面の『農山村の美』を実現していくことが重要である」としている。そして、「美しく品格のある農山村の創造」に向けて、農山村の根幹であり、多様な主体の協働力により構築された「社会(コミュニティ)」、人と自然との共生関係によって創造・継承されてきた特色のある農山村の「環境」、地域の基幹産業として成長を続ける農山村の「経済」が、地域特性に応じてバランスよく調和することで持続性が確保されるよう、農業・農村施策を総合的に展開していくこととしており、本学の人材養成の理念は、このような本県の農山村づくりの理念にも通じるものである。

(別添資料 3-2 「“ふじのくに”の農山村づくり（静岡県農業農村整備みらいプラン 2018-2021）」抜粋)

～環境・経済・社会の調和による持続可能な農山村づくり～



(2) ディプロマ・ポリシーにおける位置付け

農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくことができる農林業経営者を養成することについて、当初申請のディプロマ・ポリシーにおいては「3 専門職業人としての役割と社会的責任を理解した上での、農林業・農山村が有する多面的機能と、その資源を保全する手法の理解」と記載していたが、抽象的な表現となっていたため、以下のとおり、ディプロマ・ポリシーを具体的な表現に改める。

【修正後のディプロマ・ポリシー（抜粋）】

農林業経営者に求められる次に掲げる資質・能力を身に付け、所定の単位を修得した者に学位を授与する。

(4) 農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。

2 「農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境」を学ぶ教育課程

農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていく上で、農林業経営者に求められる知識を身に付けるため、以下の教育課程を履修することとする。

(別添資料3-3 農山村地域の環境について学ぶ科目の概要)

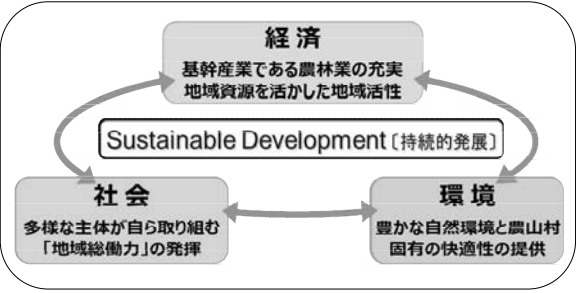
「農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境」について学ぶ科目

(●：必修、○：選択必修、◎：コース必修、無印：選択)

区分	1年	2年	3年		
農山村の自然環境や景観の保全	共通	(自然環境) ●農学概論 ●環境と農林業		●技術者倫理	職業 専門 科目
	栽培	○栽培学	作物学 園芸学 ◎植物病理学 ◎応用昆虫学 ◎肥料・植物栄養学 野菜園芸学 果樹園芸学 花き園芸学 土壌学	◎環境保全型農業論	
	林業	○樹木・組織学	◎森林計画・政策論 ◎造林学 ◎森林土木学	◎森林マネジメント	
	畜産	○畜産概論		◎畜産環境学	
	共通	(景観) ●環境と農林業（再掲）			
	林業		◎造林学（再掲） ◎森林土木学（再掲）		
農山村の伝統・文化の継承等	共通	(伝統・文化) ●農山村田園地域公共学	●食文化論 ●農と食の哲学	●農村景域論 ●在来作物学	展 開 科 目
		(地域社会)	●農村社会論 ●医福食農連携論	●農山村デザイン演習 ●グリーン・ツーリズム論 ●コミュニティビジネス論	

新	旧
<p>(7) 本学の特色</p> <p>(6) で掲げる理念の実現に資するよう、本学は次のような特色を有するものである。</p> <p><u>①農林業経営体の中核を担う人材であるとともに農山村の地域社会を支える人材の育成</u></p> <p><u>農山村は農林業の持続的な発展の基盤であるが、近年は、人口減少や高齢化の進行に伴う農山村地域の活力低下が農林業振興における大きな課題となっている。</u></p> <p><u>一方で、農山村が有する豊かな自然環境や美しい景観、固有の伝統・文化などは、その地域の農林業の営みを通じて育まれてきたものであり、農林業者には、これらの価値を理解し、守り育みながら、農山村の地域社会を支えていくことが期待されている。</u></p> <p><u>このことから、本学においては、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育ていくことができる人材」を養成し、農林業及び農山村地域の持続的な発展に貢献することを目指すこととしている。</u></p> <p><u>大学名称に冠している「環境」は、「農林業の営みを通じて形成される農山村地域の自然環境、景観、伝統・文化などの総体としての環境」を意味しており、そのような農山村地域の環境を守り育ていくことができる人材を養成するという本学の特色を表すものである。</u></p>	<p>(7) 本学の特色</p> <p>(6) で掲げる理念の実現に資するよう、本学は次のような特色を有するものである。</p> <p><u>①農林業生産・経営・農山村の多面的機能を学ぶ科目の配置</u></p> <p><u>将来農林業経営の中核となって農林業の発展に貢献するとともに、地域社会のリーダーとして活躍していくことができる人材を養成するため、これからの農林業経営に必要な知識・技術と、地域振興に繋がる農山村の多面的機能を学ぶ科目をバランスよく編成する。</u></p>

新	旧
<p data-bbox="220 226 775 309">～ 本学の名称に冠する「農林環境」の考え方 ～</p>  <p data-bbox="220 656 775 1503"> <u>なお、このような本学の人材養成の理念は、「農業については、その有する食料供給機能と多面的機能の重要性にかんがみ、必要な農業資源及び農業の担い手が確保され、地域の特性に応じてこれらが効率的に組み合わせられた望ましい農業構造が確立されとともに、農業の自然循環機能が維持増進されることにより、その持続的な発展が図られなければならない」、そして「農村については、農業の持続的な発展の基盤たる役割を果たしていることにかんがみ、農業の有する食料供給機能及び多面的機能が適切かつ十分に発揮されるよう、その振興が図られなければならない」という「食料・農業・農村基本法」（資料 19-2）の基本理念に通じるものであり、大学名称に冠している「環境」には、そのような本学の人材育成の理念が込められている。</u> </p> <p data-bbox="220 1518 775 2029"> <u>また、本県総合計画の分野別計画である「静岡県経済産業ビジョン」の実行計画として位置付けられている「“ふじのくに”の農山村づくり（静岡県農業農村整備みらいプラン 2018-2021）」（資料 6-2）においては、本県の農山村づくりの理念を「美しく品格のある農山村の創造」とし、「景観の美しさにとどまらず、その源となる農業に勤しむ生産者と、地域の資源を保全し次世代へ継承しようとする様々な人々の共同体意識に至る外形と内面の『農山村の美』を実現していくこ</u> </p>	

新	旧
<p>とが重要である」としている。そして、「美しく品格のある農山村の創造」に向けて、農山村の根幹であり、多様な主体の協働力により構築された「社会（コミュニティ）」、人と自然との共生関係によって創造・継承されてきた特色のある農山村の「環境」、地域の基幹産業として成長を続ける農山村の「経済」が、地域特性に応じてバランスよく調和することで持続性が確保されるよう、農業・農村施策を総合的に展開していくこととしており、本学の人材養成の理念は、このような本県の農山村づくりの理念にも通じるものである。</p> <p>～環境・経済・社会の調和による持続可能な農山村づくり～</p>  <p>②少人数授業 (略)</p>	<p>②少人数授業 (略)</p>

(新旧対照表) 設置の趣旨を記載した書類 (15 ページ)

新	旧
<p>(4) ディプロマ・ポリシー</p> <p>本学科は、(3)の教育目標を実現するために設けた所定の基礎科目・職業専門科目・展開科目・総合科目を履修することにより、<u>農林業経営者に求められる次に掲げる資質・能力を身に付け、所定の単位を修得し、プロジェクト研究を経て卒業論文を提出した者に学位を授与する。</u></p> <p>①専門分野のみにとられない幅広い知識</p>	<p>(4) ディプロマ・ポリシー</p> <p>本学科は、(3)の教育目標を実現するために設けた所定の基礎科目・職業専門科目・展開科目・総合科目を履修することにより、次に掲げる資質・能力を身に付け、所定の単位を修得し、プロジェクト研究を経て卒業論文を提出した者に学位を授与する。</p> <p>① 専門分野のみにとられない幅広い</p>

新	旧
<p><u>やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を有している。</u></p> <p>②<u>農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を有している。</u></p> <p>③<u>農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識を有している。</u></p> <p>④<u>農山村の地域社会における将来のリーダーとして、農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境を守り育てていくための農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などに関する知識を有している。</u></p> <p>⑤<u>農山村の地域資源を活用することにより、農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手法を理解している。</u></p> <p>⑥<u>修得した専門知識と技術を駆使して農林業生産現場における課題を探求し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、分析・整理した結果を表現できる能力を有している。</u></p>	<p>知識を備え、価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養</p> <p>2-1 <u>農林業生産を行うための基礎的な知識・技術と、それを活用するための能力、先端技術への対応力</u></p> <p>2-2 <u>農林業経営を行うための加工・流通・販売の知識や経営管理能力</u></p> <p>2-3 <u>農林業生産及び経営の実験・実習・演習を通じて身に付く、自主的・継続的に学習を進める能力、他者と協調し事業を推進できる能力</u></p> <p>3 <u>専門職業人としての役割と社会的責任を理解した上での、農林業・農山村が有する多面的機能と、その資源を保全する手法の理解</u></p> <p>4-1 <u>修得した専門知識と技術を駆使して課題を探求し、解決に必要な情報を収集・分析・整理する能力</u></p> <p>4-2 <u>分析・整理した結果を表現する論理的な記述力、口頭発表力、コミュニケーション能力</u></p>

(新旧対照表) 設置の趣旨を記載した書類 (17 ページ)

新	旧
<p>3 大学、学部及び学科の名称並びに学位の名称</p> <p>(1) 大学の名称 本学の名称を「静岡県立農林環境専門職大学」とし、国際表記を「Shizuoka Professional University of Agriculture」とする。「農林」で、農林業生産及び経営に</p>	<p>3 大学、学部及び学科の名称並びに学位の名称</p> <p>(1) 大学の名称 本学の名称を「静岡県立農林環境専門職大学」とし、国際表記を「Shizuoka Professional University of Agriculture」とする。「農林」で、農林業生産及び経営に</p>

新	旧
<p>関する実践的知識・技術について学ぶことを示し、「環境」で、<u>農林業の営みを通じて形成される農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育んでいくことができる人材を養成するという本学の特色を示す。</u></p> <p>(2) 学部及び学科の名称</p> <p>「生産環境経営学部 生産環境経営学科」 農林業の基礎となる「生産」の知識や技術と、<u>農林業経営に必須となる「経営」の理論を学ぶことにより、農林業を成長産業として発展させ、さらに本学において「環境」で表現する「農林業の営みを通じて形成される農山村地域の環境」について学ぶことで、農山村の地域社会を支えていくことができる人材の養成を行うことから、名称を「生産環境経営学部」とし、国際表記を「Faculty of Agricultural Production and Management」とする。また、1学部1学科の構成であるため、学科の名称は、「生産環境経営学科」とし、国際表記を「Department of Agricultural Production and Management」とする。</u></p>	<p>関する実践的知識・技術について学ぶことを示し、「環境」で<u>地域を支える人材に必要な景観形成や環境保全の手法、農山村文化や歴史について学ぶ大学であることを表現するものである。</u></p> <p>(2) 学部及び学科の名称</p> <p>「生産環境経営学部 生産環境経営学科」 農林業の基礎となる「生産」の知識や技術と、「<u>経営</u>」について学ぶことにより、農林業を成長産業として発展させ、さらに「<u>環境</u>」に代表される農山村の多面的機能について学ぶことで、<u>農林業を通じて地域社会を支える人材の養成を行うことから</u>、「生産環境経営学部」とし、国際表記を「Faculty of Agricultural Production and Management」とする。また、1学部1学科の構成であるため、学科の名称は、「生産環境経営学科」とし、国際表記を「Department of Agricultural Production and Management」とする。</p>

(新旧対照表) 設置の趣旨を記載した書類 (18 ページ)

新	旧
<p>4 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>(1) 教育課程編成の基本方針〔カリキュラム・ポリシー〕</p> <p>前述の本学部の「<u>基本理念</u>」に掲げる<u>養成人材像</u>並びに「<u>ディプロマ・ポリシー (学位授与方針)</u>」を実現するためのカリキュラム・ポリシー (教育課程編成方針) を、以下のとおり定める。</p>	<p>4 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>(1) 教育課程編成の基本方針とカリキュラム・ポリシー</p> <p>前述の本学部の「<u>目的</u>」及び「<u>人材育成方針</u>」並びに「<u>ディプロマ・ポリシー (学位授与方針)</u>」を実現するためのカリキュラム・ポリシー (教育課程編成方針) を、以下のとおり定める。</p>

新	旧
<p>カリキュラム・ポリシー</p> <p>①<u>一般教養やコミュニケーション・スキルなどを学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>②<u>企業的な経営管理や経営戦略、加工・販売の手法や流通の仕組みなどを学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>③<u>農林業に関する基礎的な知識及び農林業生産に関する基礎的な理論や技術を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>④<u>農林業の経営や生産に活用される先端技術を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>⑤<u>農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>⑥<u>農山村の伝統・文化の継承や地域社会について学ぶとともに、農山村の地域資源を農林業経営に活用する手法を学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>⑦<u>農林業経営における課題の解決に向けた研究の手法などを学ぶ教育課程を編成する。</u></p> <p>各CP（カリキュラム・ポリシー、以下同）は各DP（ディプロマ・ポリシー、以下同）に対応しており、各DPを達成するために構成されている。具体的には、<u>DP①はCP①、DP②はCP②と④、DP③はCP③と④、DP④はCP⑤と⑥、DP⑤はCP⑥、DP⑥はCP⑦</u>に対応しており、カリキュラム・ポリシーに基づき配当された科目を履修することで、ディプロマ・ポリシーに掲げる能力・素養を身に付けることができる。<u>CPと教育課程とDPの対応について表にまとめた「カリキュラム・マップ」を資料 21-1 に示す。</u></p>	<p>カリキュラム・ポリシー</p> <p>①<u>基礎科目</u> 幅広い知識や多面的な物事の考え方などを身に付けるため、人文科学や社会科学、コミュニケーションスキルなどを学ぶ科目を配当する。</p> <p>②<u>職業専門科目</u> 農林業生産及び経営に必要な知識・技術と先端技術への対応力を身に付けるため、農林業基礎、生産理論、経営管理などを学ぶ科目を配当するとともに、<u>実習・演習科目を重点的に配当する。</u></p> <p>③<u>展開科目</u> 農林業や農山村が有する多面的機能と、その資源を保全する手法を理解するため、<u>環境保全や農山村振興などについて学ぶ科目を配当する。</u></p> <p>④<u>総合科目</u> 農林業経営における課題を探究し、解決に必要な情報を収集・分析・整理するとともに、<u>その成果を取りまとめる科目を配当する。</u></p> <p>各CP（カリキュラム・ポリシー、以下同）は各DP（ディプロマ・ポリシー、以下同）に対応しており、各DPを達成するために構成されている。具体的には、<u>CP 1はDP 1に、CP 2はDP 2-1から2-3に、CP 3はDP 3に、CP 4はDP 4-1及び4-2</u>に対応しており、カリキュラム・ポリシーに基づき配当された科目を履修することで、ディプロマ・ポリシーに掲げる能力・素養を身に付けることができる。<u>DPとCPの対応について表にまとめた「カリキュラム・マップ」を資料 21 に示す。</u></p>

(新旧対照表) 設置の趣旨を記載した書類 (18 ページ)

新	旧
<p>(2) 基礎科目 (略)</p> <p>(3) 職業専門科目 <u>農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識や、農林業経営体の大規模化や経営の多角化等に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を習得するための授業科目を配置する。農林業に関する基礎的知識を学ぶ科目を農林業基礎の科目群へ、企業的な経営管理や経営戦略について学ぶ科目を経営管理の科目群に配置する。また、農林業生産に関する基礎的な理論や技術を学ぶ科目を生産理論及び生産技術の科目群へ、加工・販売の手法や流通の仕組みなどを学ぶ科目を加工・流通・販売の科目群に配置する。職業専門科目では、農林業基礎及び経営管理の科目群は、全学生が共通で学ぶが、生産理論、生産技術、加工・流通・販売の科目群は、栽培コース、林業コース、畜産コースの3コースに分かれて学ぶ。</u></p>	<p>(2) 基礎科目 (略)</p> <p>(3) 職業専門科目 農林業において必要とされる理論的かつ実践的な能力及び農林業全般にわたり必要な能力を育成するための授業科目を配置する。農林業生産を行うための基礎的な知識・技術を学ぶための能力、先端技術への対応力を学ぶ「農林業基礎」科目群及び「生産理論」科目群、農林業経営を行うための加工・流通・販売の知識や経営管理能力を学ぶ「経営管理」科目群及び「加工・流通・販売」科目群、農林業生産及び経営の実験・実習・演習を通じて身につく、自主的・継続的に学習を進める能力、他者と協調し事業を推進できる能力を養う「実習・演習」科目群の5つの科目群を配置する。</p>

新	旧
<p>①農林業基礎の科目群</p> <p>農林業基礎の科目群は、<u>農林業に関する基礎的な知識、農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産を学ぶ科目群</u>であり、<u>17科目を配置する。</u></p> <p>日本の農林業の現状を把握し持続的な社会を構築するために現代の農学は何ができるかを考える「農学概論」、<u>農林業が環境保全へ果たしてきた役割や森林のもつ景観形成の機能、農林業が引き起こす環境問題と対策、森林が持つ景観形成機能について学ぶ「環境と農林業」、農林業の発展や倫理的な課題について考える「技術者倫理」を必修科目として配置する。</u>これらの3科目では、<u>自然環境の保全について取り上げる。</u></p> <p>また、<u>農林業の歴史の変遷を学ぶ「農林業史」、農業・食料関連政策や森林・林業政策について学ぶ「農林業政策」、県内や県外、海外の農林業経営体等の現状を学ぶ「県内農林業事情」、「県外農林業事情」、「海外農林業事情」、生命現象を分子レベルで考察するために必要な知識を修得する「分子生物学」、農林業における気象災害とその対策について学ぶ「農業気象学」、生命科学の基本を学ぶ「生命科学」、野生鳥獣対策の現状と課題などについて学ぶ「野生鳥獣管理・利用論」を選択科目として配置する。</u>さらに、農林業についての学びを深めるにあたっては理数科目の基礎知識が不可欠であるため、「<u>農林業のための基礎数学</u>」、「<u>農林業のための生物学</u>」、「<u>農林業のための化学</u>」、「<u>農林業のための物理学</u>」、「<u>農林業のための地学</u>」を自由科目として配置する。</p>	<p>①農林業基礎の科目群</p> <p>農林業基礎の科目群は、農林業に関する基礎的な知識の修得を目的とする科目群である。</p> <p>日本の農林業の現状を把握し持続的な社会を構築するために現代の農学は何ができるかを考える「農学概論」、農業・食料関連政策や森林・林業政策について学ぶ「農林業政策」、農林業の発展や倫理的な課題について考える「技術者倫理」、生命現象を分子レベルで考察するために必要な知識を修得する「分子生物学」、現代における情報処理能力を身につける「情報処理基礎」及び「情報処理応用」を必修科目として配置する。また、農林業の歴史の変遷を学ぶ「農林業史」、県内や県外、海外の農林業経営体等の現状を学ぶ「<u>県内農林業事情</u>」、「<u>県外農林業事情</u>」、「<u>海外農林業事情</u>」、さらに、農林業についての学びを深めるにあたっては理数科目の基礎知識が不可欠であるため、「<u>農林業のための基礎数学</u>」、「<u>農林業のための生物学</u>」、「<u>農林業のための化学</u>」、「<u>農林業のための物理学</u>」、「<u>農林業のための統計学</u>」、「<u>農林業のための地学</u>」、「<u>農業気象学</u>」、「<u>生命科学</u>」を選択科目として配置する。</p>

新	旧
<p>②生産理論の科目群</p> <p><u>生産理論の科目群は、農林業生産に関する基礎的な理論、農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産、農林業生産に活用される先端技術を学ぶ科目群である。生産技術の裏づけとなる生産理論について、体系的に学ぶ科目配置生産技術の科目群との関連を意識した構成とした。</u></p> <p><u>生産理論の科目群は、共通科目とコース別の科目に分かれている。コースは、栽培コース、林業コース、畜産コースの3コースを設け、このうち1コースを選択し、各コースそれぞれの農林業分野での実践力を修得させるために深く関係する科目をコース必修とする。</u></p> <p><u>ア 共通</u></p> <p><u>コース選択の参考とする導入的な科目として、「栽培学」、「植物生理生態学」、「樹木・組織学」、「畜産概論」を選択科目として配置する。なお、「栽培学」、「樹木・組織学」、「畜産概論」の授業の中で、自然環境の保全について取り上げる。また、農林業の生産や経営に関連する先端技術について学ぶ「農林業のための先端技術」を必修科目として配置する。</u></p> <p><u>イ 栽培コース</u></p> <p><u>栽培コースの生産理論科目群として、11科目を配置する。栽培技術を学ぶ上で、植物栄養や病害虫、栽培体系、環境保全型農業の知識は不可欠である。このため、植物の特性や植物生産の代謝、養分機能、栄養特性と肥料について学ぶ「肥料・植物栄養学」、病害虫の種類や特長について学ぶ「植物病理学」及び「応用昆虫学」、環境に配慮した農業を学ぶ「環境保全型農業論」をコース必修として配置する。また、栽培体</u></p>	<p>②生産理論の科目群</p> <p>生産理論の科目群は29科目を配置し、農林業の先端技術について学ぶ「農林業のための先端技術」を必修とし、その他の科目を選択科目とする。生産技術の裏づけとなる生産理論について、体系的に学ぶ科目配置とし、実習との関連を意識した構成とした。</p> <p>生産理論の科目群では、それぞれの農林業分野での実践力を修得させるため、栽培分野、林業分野、畜産分野の3つの分野を設け、いずれかの分野を1つ選択し、各分野に深く関係する科目を選択必修とする。</p> <p>栽培分野は10科目を配置し、「肥料・植物栄養学」と「土壌学」を選択必修とする。</p> <p>林業分野は6科目配置し、「木質科学概論」、「木材生産システム論」を選択必修とする。</p> <p>また、栽培分野と林業分野の共通科目として、「植物遺伝育種学概論」及び「土壌学」の2科目を配置する。</p> <p>畜産分野は10科目を配置し、「人工授精論」、「家畜衛生学」を選択必修とする。</p>

新	旧
<p>系及び先端技術を学ぶ科目として、<u>水稻や茶の栽培体系や精密農業について学ぶ「作物学」、野菜や花き、果樹の栽培体系や栽培施設の環境制御について総合的に学ぶ「園芸学」を配置し、いずれかを選択する。</u></p> <p><u>これらの2科目は栽培に関する先端技術を学ぶ科目である。さらに知識を深める科目として、土壌診断や土づくりについて学ぶ「土壌学」、野菜栽培の基礎知識を学ぶ「野菜園芸学」、果樹栽培の基礎知識を学ぶ「果樹園芸学」、花き栽培の基礎知識を学ぶ「花き園芸学」を選択科目として配置する。なお、これらの10科目の授業の中で、自然環境の保全について取り上げる。</u></p> <p><u>また、植物の遺伝の仕組みや育種技術について学ぶ「植物遺伝育種学概論」を選択科目として配置する。</u></p> <p><u>ウ 林業コース</u></p> <p><u>林業コースの生産理論科目群として6科目を配置する。林業技術を学ぶ上で、森林調査や造林、治山、収穫技術の知識が不可欠である。このため、森林政策の歴史や関連法、森林調査の基礎、森林情報システムについて学ぶ「森林計画・政策論」、林業機械を用いた木材生産や作業システムについて学ぶ「木材生産システム」をコース必修として配置する。これら2科目は、林業における先端技術について学ぶ科目である。</u></p> <p><u>また、森林づくりの目的・方法、施工技術、森林景観について学ぶ「造林学」、治山・砂防や林業土木、森林・植生がもつ環境保全や景観形成の機能について学ぶ「森林土木学」、木質バイオマスについて学ぶ「木質科学概論」森林計画制度や森林保護の視点を備えた持続的的林業経営や森林認証制度について学ぶ「森林マネ</u></p>	

新	旧
<p><u>ジメント」をコース必修として配置する。</u> <u>なお、「森林計画・政策論」、「造林学」、</u> <u>「森林マネジメント」では、授業のなか</u> <u>で自然環境保全について取り上げる。さら</u> <u>に、「造林学」及び「森林土木学」で</u> <u>は森林景観の保全について取り上げる。</u></p> <p>エ 畜産コース</p> <p><u>畜産コースの生産理論科目群として</u> <u>10 科目を配置する。飼育技術を学ぶ上</u> <u>で、家畜の生理・生態、栄養と飼料、育</u> <u>種や繁殖の知識、また、家畜ふん尿と環</u> <u>境問題の知識は不可欠である。このため、</u> <u>家畜栄養と飼料、飼料配合設計の基礎理</u> <u>論を学ぶ「飼料総論」、飼料消化性の違い</u> <u>や環境要因による変化やその対策、I C</u> <u>Tを利用した家畜の管理法について学ぶ</u> <u>「家畜飼養学」、家畜の体の仕組みや各臓</u> <u>器の生理機能を学ぶ「家畜生理解剖学」、</u> <u>育種の基礎知識や繁殖に関わる知識を学</u> <u>ぶ「家畜育種繁殖学」、家畜衛生の一連の</u> <u>知識を学ぶ「家畜衛生学」、環境に配慮し</u> <u>た畜産について学ぶ「畜産環境学」をコ</u> <u>ース必修として配置する。なお、「家畜飼</u> <u>養学」の授業の中で畜産分野での先端技</u> <u>術を、「畜産環境学」の中で自然環境の保</u> <u>全について取り上げる。</u></p> <p><u>また、畜産分野では家畜人工授精師が</u> <u>重要な資格となっているため、本資格を</u> <u>取得するために必要となる「畜産法規」</u> <u>や「人工授精論」を選択科目として配置</u> <u>する。更に、草地の特徴や管理方法につ</u> <u>いて学ぶ「自給飼料」や、アニマルウェ</u> <u>ルフェアに配慮した飼養管理が求められる</u> <u>ようになってきているため、「家畜福祉</u> <u>学」を選択科目として配置する。</u></p> <p>③経営管理の科目群</p>	<p>③経営管理の科目群</p>

新 (略)	旧 (略)
<p data-bbox="220 322 587 353">④加工・流通・販売の科目群 (略)</p> <p data-bbox="220 465 475 497">⑤生産技術の科目群</p> <p data-bbox="247 512 775 786">生産技術の科目群は、農林業生産に関する基礎的な技術や先端技術、農山村の自然環境の保全に配慮した生産を学ぶ科目群であり、15科目を配置し、共通科目と生産理論と同様の3コースに分かれて学ぶ科目からなる。</p> <p data-bbox="263 848 379 880">ア 共通</p> <p data-bbox="263 896 775 1357">共通科目として4科目を配置する。農林業生産の全般的な技術や先端技術を広く学ぶ「総合実習」、食品安全や環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理など農業の生産工程管理について学ぶ「GAP演習」、トラクター等の大型機械の操作方法や安全使用について学ぶ「大型機械実習Ⅰ」、農林業経営体で生産技術を学修する「企業実習」を必修科目として配置する。</p> <p data-bbox="263 1422 464 1453">イ 栽培コース</p> <p data-bbox="247 1469 775 1789">基礎的な栽培技術を学ぶ「圃場実習(栽培)」、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)」、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)」をコース必修として配置する。なお、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ(栽培)」では、先端技術の導入について学ぶ。</p> <p data-bbox="263 1805 775 1933">また、大型機械の知識や技能を学修する「大型機械実習Ⅱ」を選択科目として配置する。</p> <p data-bbox="263 1998 464 2029">ウ 林業コース</p>	<p data-bbox="828 322 1195 353">④加工・流通・販売の科目群 (略)</p> <p data-bbox="828 465 1114 497">⑤実習・演習の科目群</p> <p data-bbox="855 512 1383 689">実習・演習の科目群では、20科目を配置し、生産理論科目群と関連した栽培分野、林業分野、畜産分野、及び加工・販売分野の4つの分野を設定する。</p> <p data-bbox="855 705 1383 882">「総合実習」は、本科目群の導入科目とし、水稻や野菜、花き、茶、果樹の栽培や畜産、林業について総合的に学ぶ実習とし、必修科目とする。</p> <p data-bbox="855 898 1383 1547">栽培分野に対応する実習科目として、「圃場実習(栽培)」、「生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)」、「生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)」とする。林業分野に対応する実習科目として、「演習林実習」、「生産マネジメント実習Ⅰ(林業)」、「生産マネジメント実習Ⅱ(林業)」、「森林施業プラン演習」、「森林認証演習」、「林業機械実習」とした。畜産分野に対応する実習科目として「圃場実習(畜産)」、「生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)」、「生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)」とする。いずれの分野も生産技術と、生産現場のマネジメントについて学べる構成とする。</p> <p data-bbox="855 1563 1383 1883">共通として、農林業で扱う大型機械について学ぶ「大型機械実習Ⅰ」及び「大型機械実習Ⅱ」、GAPの理論や実践について学ぶ「GAP演習」、実際の農林業経営体でインターンシップを行う臨地実務実習である「企業実習」を配置し、より実践的な技術を学べる構成とする。</p> <p data-bbox="855 1899 1383 2027">加工・販売分野では、食品や木材の加工について学ぶ「食品加工実習」及び「木材加工実習」、実践的な販売方法について学</p>

新	旧
<p><u>基礎的な栽培技術を学ぶ「演習林実習」、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ（林業）」、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ（林業）」をコース必修として配置する。なお、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ（林業）」では、先端技術の導入について学ぶ。また、林業機械の操作法や高性能林業機械について学ぶ「林業機械実習」をコース必修として配置する。</u></p> <p><u>エ 畜産コース</u></p> <p><u>基礎的な飼養管理技術を学ぶ「圃場実習（畜産）」、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ（畜産）」、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ（畜産）」をコース必修として配置する。なお、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ（畜産）」では、先端技術の導入について学ぶ。また、大型機械の知識や技能を学修する「大型機械実習Ⅱ」を選択科目として配置する。</u></p> <p>（４）展開科目</p> <p><u>農山村の地域社会における将来のリーダーに求められる農山村の伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会に関する知識を身に付けるとともに、農山村の伝統・文化などの地域資源を活用することにより、農林業経営に新たな事業展開を生み出すための創造力を備えた農林業経営者を養成するための科目を配置する。</u></p> <p><u>①農山村の伝統・文化の継承の科目群</u></p> <p><u>農山村の歴史や文化、多面的機能などについて学ぶ「農山村田園地域公共学」、日本や世界の食文化について学ぶ「食文</u></p>	<p>ぶ「販売実習」を配置する。</p> <p>（４）展開科目</p> <p>農林業の新たな展開につながる応用的能力や、創造的役割を果たすために必要な能力を育成するため、農林業や農山村が持つ多面的機能を学ぶ科目を配置する。</p> <p>多面的機能の総論について学ぶ「農山村田園地域公共学」を必修科目として配置し、選択科目については環境保全科目群と農山村振興科目群の２つの科目群を配置する。</p> <p>①環境保全の科目群</p> <p>環境保全科目群は５科目を配置する。農林業と環境の総論を学ぶ「環境と農林業」、農村の景観について学ぶ「農村景域</p>

新	旧
<p><u>化論</u>、<u>農と食の営みの本質について考える「農と食の哲学」</u>、<u>農村に暮らす人々の生業と歴史文化との関係から農村景域について学ぶ「農村景域論</u>、<u>生きた文化財とも呼ばれる在来作物の過去・現在・未来について考える「在来作物学」を必修科目として配置する。</u></p> <p>②農山村の地域社会の科目群</p> <p><u>農山村の生活や地域社会の特徴について学ぶ「農村社会論</u>、<u>農山村において地域住民と交流し、地域や地域住民が抱える課題を発見し、その解決策を考える「農山村デザイン演習</u>、<u>グリーン・ツーリズムの現状・課題・展開について考える「グリーン・ツーリズム論</u>、<u>農と医、農と福の連携について学ぶ「医福食農連携論</u>、<u>地域が抱える課題を地域資源を活かしながらビジネス的な手法により解決する手法などについて学ぶ「コミュニティビジネス論」を必修科目として配置する。</u></p> <p>(5) 総合科目 (略)</p>	<p>論」、<u>環境に配慮した農林業について学ぶ「環境保全型農業論</u>、<u>「森林マネジメント論</u>、<u>「畜産環境学」を配置する。</u></p> <p>②農山村振興の科目群</p> <p>農村と健康・福祉について学ぶ「農村社会論」、<u>「農山村デザイン演習</u>、<u>「農と食の哲学</u>、<u>「農と食の健康論</u>、<u>「医福食農連携論</u>、<u>農山村地域の資源とビジネスについて学ぶ「グリーン・ツーリズム論</u>、<u>「食文化論</u>、<u>「野生鳥獣管理・利用論</u>、<u>「在来作物学</u>、<u>「コミュニティビジネス論</u>、<u>「在来作物学</u>、<u>「野生鳥獣管理・利用論」を配置する。</u></p> <p>(5) 総合科目 (略)</p>

(新旧対象表) 授業科目の概要

<p>新</p>	<p>(5 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="336 271 624 689"> <p>環境と農林業</p> </td> <td data-bbox="624 271 1337 689"> <p>(概要) 農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬による化学物質汚染や肥料の過剰利用による富栄養化などの様々な環境問題を引き起こしてきた。本科目では、農林業が環境保全へ果たしている役割や森林のもつ景観形成機能を学ぶとともに、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) ([4] 逢坂興宏/3回) 森林の環境保全機能と景観形成機能、山地の地形変化と土地利用、土砂災害とその対策の歴史 ([17] 大石竜/2回) 肥料や堆肥をめぐる諸問題 ([21] 外側正之/10回) 農林業と環境保全、農薬をめぐる諸問題</p> </td> </tr> </table>	<p>環境と農林業</p>	<p>(概要) 農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬による化学物質汚染や肥料の過剰利用による富栄養化などの様々な環境問題を引き起こしてきた。本科目では、農林業が環境保全へ果たしている役割や森林のもつ景観形成機能を学ぶとともに、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) ([4] 逢坂興宏/3回) 森林の環境保全機能と景観形成機能、山地の地形変化と土地利用、土砂災害とその対策の歴史 ([17] 大石竜/2回) 肥料や堆肥をめぐる諸問題 ([21] 外側正之/10回) 農林業と環境保全、農薬をめぐる諸問題</p>
<p>環境と農林業</p>	<p>(概要) 農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬による化学物質汚染や肥料の過剰利用による富栄養化などの様々な環境問題を引き起こしてきた。本科目では、農林業が環境保全へ果たしている役割や森林のもつ景観形成機能を学ぶとともに、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) ([4] 逢坂興宏/3回) 森林の環境保全機能と景観形成機能、山地の地形変化と土地利用、土砂災害とその対策の歴史 ([17] 大石竜/2回) 肥料や堆肥をめぐる諸問題 ([21] 外側正之/10回) 農林業と環境保全、農薬をめぐる諸問題</p>		

| 旧 | (21 ページ) | | | |---------------|---| | <p>環境と農林業</p> | <p>(概要)
 農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬による化学物質汚染や肥料の過剰利用による富栄養化などの様々な環境問題を引き起こしてきた。本科目では、農林業が環境保全へ果たしている役割を学ぶとともに、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。</p> <p>(オムニバス/全15回)
 (4 逢坂興宏/3回) 森林の環境保全機能、山地の地形変化と土地利用、土砂災害とその対策の歴史
 (17 大石竜/2回) 肥料や堆肥をめぐる諸問題
 (21 外側正之/10回) 農林業と環境保全、農薬をめぐる諸問題</p> | |---------------|---| |

<p>新</p>	<p>(8 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="336 1279 624 1653"> <p>植物病理学</p> </td> <td data-bbox="624 1279 1337 1653"> <p>植物の病害は、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛になると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法等について学ぶ。なお、現在は、単に防除効果があるだけでは受け入れられない社会情勢になっており、環境にも十分に配慮した防除方法が求められている。このことから、IPMの実践や化学農薬以外の防除方法についても積極的に紹介する。</p> </td> </tr> </table>	<p>植物病理学</p>	<p>植物の病害は、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛になると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法等について学ぶ。なお、現在は、単に防除効果があるだけでは受け入れられない社会情勢になっており、環境にも十分に配慮した防除方法が求められている。このことから、IPMの実践や化学農薬以外の防除方法についても積極的に紹介する。</p>
<p>植物病理学</p>	<p>植物の病害は、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛になると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法等について学ぶ。なお、現在は、単に防除効果があるだけでは受け入れられない社会情勢になっており、環境にも十分に配慮した防除方法が求められている。このことから、IPMの実践や化学農薬以外の防除方法についても積極的に紹介する。</p>		
<p>旧</p>	<p>(8 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="336 1727 624 2018"> <p>植物病理学</p> </td> <td data-bbox="624 1727 1337 2018"> <p>植物の病害には、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛になると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法、防除方法について学ぶ。</p> </td> </tr> </table>	<p>植物病理学</p>	<p>植物の病害には、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛になると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法、防除方法について学ぶ。</p>
<p>植物病理学</p>	<p>植物の病害には、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛になると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法、防除方法について学ぶ。</p>		

新	(9 ページ)	果樹園芸学	果樹栽培の対象とする果実は水分や栄養分の摂取と嗜好品として利用されてきたが、近年は健康増進と疾病予防としての機能が注目されるようになってきている。果樹は他の作物とは異なってほとんどが樹木作物（永年作物）である。そのため、1年生作物とは異なる生理・生態的な特性を有することも多い。 <u>特に、果樹は環境条件への依存が高く、リンゴやミカン等、各果樹に適した環境下で栽培されるため、近年の気象変動は果樹栽培に大きな影響を与える。</u> また、一口に果樹と言っても、その果実は子房壁が肥大したものから、花床が肥大して果実となったものまで様々である。本科目では、果樹栽培の基本的知識を得ることを目的とし、果樹の種類・品種の選択方法、環境条件からみた適地の選定、苗木の繁殖・育成、植栽、栽培管理、生理・生態的特徴、収穫、さらに流通・貯蔵まで果実が消費者にとどくまでの内容について、 <u>環境に配慮した果樹栽培という視点で体系的に学ぶ。</u>
	(8 ページ)	果樹園芸学	果樹栽培の対象とする果実は水分や栄養分の摂取と嗜好品として利用されてきたが、近年は健康増進と疾病予防としての機能が注目されるようになってきている。果樹は他の作物とは異なってほとんどが樹木作物（永年作物）である。そのため、1年生作物とは異なる生理・生態的な特性を有することも多い。また、一口に果樹と言っても、その果実は子房壁が肥大したものから、花床が肥大して果実となったものまで様々である。本科目では、果樹栽培の基本的知識を得ることを目的とし、果樹の種類・品種の選択方法、適地の選定、苗木の繁殖・育成、植栽、栽培管理、生理・生態的特徴、収穫、さらに流通・貯蔵まで果実が消費者にとどくまでの内容について体系的に学ぶ。
新	(10 ページ)	造林学	木材供給、水土保全、保健休養、CO2吸収等の森林が私たちにもたらす恩恵である多くの生態系サービスを将来にわたって享受するためには、森林を健全に保全すると共に、その持続的な循環利用（伐採、植栽、育成・保全）を図る必要がある。本科目では、造林学の基礎となる森林づくりの原理・原則、並びに森林づくりのために行われる各種作業（地拵、植栽、下刈、除伐、間伐等）の目的や方法を学ぶ。また、広葉樹林、針広混交林、複層林等、多様な森林づくりの目的とそれに対応した施業技術について学ぶ。さらに森林景観を科学する森林風致学を概説する。
	(9 ページ)	造林学	木材供給、水土保全、保健休養、CO2吸収等の森林が私たちにもたらす恩恵である多くの生態系サービスを将来にわたって享受するためには、森林を健全に保全すると共に、その持続的な循環利用（伐採、植栽、育成・保全）を図る必要がある。本科目では、造林学の基礎となる森林づくりの原理・原則、並びに森林づくりのために行われる各種作業（地拵、植栽、下刈、除伐、間伐等）の目的や方法を学ぶ。また、広葉樹林、針広混交林、複層林等、多様な森林づくりの目的とそれに対応した施業技術について学ぶ。

新	(11 ページ)	森林土木学	森林土木学は治山・砂防分野と林業土木分野からなる。治山・砂防分野では、森林山地斜面で発生する土砂移動現象（表面侵食、斜面崩壊、地すべり、土石流等）の発生メカニズムとその対策、および森林植生の有する表面侵食防止、表層崩壊防止の機能とその限界、 <u>荒廃地の復元技術および森林・植生がもつ環境保全機能と景観形成機能についての知識と最新の技術を学ぶ。</u> 林業土木分野では、木材生産システムの集材工程に大きくかかわる林内路網整備に関する知識(林道、森林作業道開設の目的、役割、構造等)、設計手順、現地踏査についての知識と最新の技術を学ぶ。
	(9 ページ)	森林土木学	森林土木学は治山・砂防分野と林業土木分野からなる。治山・砂防分野では、森林山地斜面で発生する土砂移動現象（表面侵食、斜面崩壊、地すべり、土石流等）の発生メカニズムとその対策、および森林植生の有する表面侵食防止、表層崩壊防止の機能とその限界について学ぶ。林業土木分野では、木材生産システムの集材工程に大きくかかわる林内路網整備に関する知識(林道、森林作業道開設の目的、役割、構造等)、設計手順、現地踏査について学ぶ。また、共通する分野として土質力学と水理学の基礎を学ぶ。

新	(11 ページ)	畜産概論	人間の生活に貢献するべく動物の生命活動を応用する学問的追究が畜産学であり、従来は食料自給を課題とした生産において柱となる遺伝育種、繁殖、飼養などの専門領域での課題解決とそれに必要な技術開発が中心となって進展してきた。これらの領域には国際的な視野で捕らえなければならない課題も含まれるようになっており、さらには従来の生産効率一辺倒な対応だけでなく、労働者や飼育される動物の労働・生活環境におけるリスクを回避することも求められる。本科目では、畜産業の歴史と近況の情報を学び、家畜生産における課題を内容に応じて整理し、その解決に向けた対策の解説を通じて現状の理解を深める。 <u>そのなかでも畜産業の持続的な発展にむけて解決が不可欠である排せつ物の処理について具体的な解説を行い、今後新たに課題となる内容とその対策に対する指針が策定できることを目標とする。</u>
	(10 ページ)	畜産概論	人間の生活に貢献するべく動物の生命活動を応用する学問的追究が畜産学であり、従来は食料自給を課題とした生産において柱となる遺伝育種、繁殖、飼養などの専門領域での課題解決とそれに必要な技術開発が中心となって進展してきた。これらの領域には国際的な視野で捕らえなければならない課題も含まれるようになっており、さらには従来の生産効率一辺倒な対応だけでなく、労働者や飼育される動物の労働・生活環境におけるリスクを回避することも求められる。本科目では、畜産業の歴史と近況の情報を学び、家畜生産における課題を内容に応じて整理し、その解決に向けた対策の解説を通じて現状の理解を深め、今後新たに課題となる内容とその対策に対する指針が策定できることを目標とする。

(新旧対象表) シラバス

(新) 7 ページ

授業名 環境と農林業 Environment and Agriculture		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	1年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	逢坂興宏、外側正之、大石竜
授業時間	金曜日 5時限	教室	講義室3
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬による化学物質汚染や肥料の過剰利用による富栄養化などの様々な環境問題を引き起こしてきた。そこで、農林業が環境保全へ果たしている役割や森林がもつ景観形成機能について学ぶとともに、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。		
授業目的・目標	①農業の環境保全機能を理解し、説明できる。 ②森林が持つ景観形成機能を理解し、説明できる。 ③農林業生産が引き起こす環境問題とその対策について理解し、説明できる。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	病害虫防除の歴史（化学農薬以前の防除技術）（外側正之）	
	2	化学農薬の歴史（外側正之）	
	3	農薬取締法と諸問題（外側正之）	
	4	IPMの思想と環境問題（外側正之）	
	5	化学農薬以外による防除技術が環境に与える影響（1）（外側正之）	
	6	化学農薬以外による防除技術が環境に与える影響（2）（外側正之）	
	7	平成15年における農薬取締法の大幅改正について（外側正之）	
	8	有機農業・有機栽培・JAS基準・特定農薬と農薬問題（外側正之）	
	9	GAP、JGAPが求める環境保全とその対策（外側正之）	
	10	農薬の安全使用に関係する各種組織・文献・資格について（外側正之）	
	11	肥料や堆肥をめぐる諸問題（大石竜）	
	12	環境に配慮した施肥・堆肥利用（大石竜）	
	13	森林・林業の環境保全機能と景観形成機能（逢坂興宏）	
	14	山地の地形形成と土地利用（逢坂興宏）	
15	土砂災害とその対策の歴史（逢坂興宏）		
キーワード	農薬、農薬取締法、IPM、有機農業、特定農薬、GAP・JGAP、生物多様性、硝酸態窒素、臭気、景観形成		
教科書・参考書	教科書：指定無し（参考書の中から随時抜粋した資料を講義の都度に配布する） 参考書：「植物防疫講座－農薬・行政編－」日本植物防疫協会、「農作物病害虫防除基準」静岡県植物防疫協会編、「農薬と食：安全と安心」ソフトサイエンス社、「農薬残留のここが知りたい」日本食品衛生協会、「農薬を知ろう」文芸社、「ちょっと気になる農薬の話」消費者のための農薬読本、「農薬に対する誤解と偏見」今月の農業編集室、「なるほど！なっとく！農薬Q&A」農薬工業会、「沈黙の春」レーチェル・カーソン著、「保全砂防学入門」電気書院		
評価方法・評価基準	試験（40％）、小テスト（40％）、レポート（20％）		
関連科目	農学概論、植物病理学、環境保全型農業論		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 環境と農林業 Environment and Agriculture		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	外側正之、大石竜
授業時間	火曜日 3時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬や肥料などの様々な環境問題を引き起こしてきた。こうした状況の中で今後どのようにして農薬・肥料を安全に利活用していくべきかを考える。		
授業目的・目標	農林業が環境保全へ果たしている役割と、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	病害虫防除の歴史（化学農薬以前の防除技術）	
	2	化学農薬の歴史	
	3	農薬取締法と諸問題	
	4	IPMの思想と環境問題	
	5	化学農薬以外による防除技術が環境に与える影響（1）	
	6	化学農薬以外による防除技術が環境に与える影響（2）	
	7	平成15年における農薬取締法の大幅改正について	
	8	有機農業・有機栽培・JAS基準・特定農薬と農薬問題	
	9	GAP、JGAPが求める環境保全とその対策	
	10	農薬の安全使用に関する各種組織・文献・資格について	
	11	肥料や堆肥をめぐる諸問題	
	12	環境に配慮した施肥・堆肥利用	
	13	森林の環境保全機能	
	14	山地の地形形成と土地利用	
15	土砂災害とその対策の歴史		
キーワード	農薬、農薬取締法、IPM、有機農業、特定農薬、GAP・JGAP、生物多様性、硝酸態窒素、臭気		
教科書・参考書	教科書：指定無し（参考書の中から随時抜粋した資料を講義の都度に配布する）、参考書：「植物防疫講座－農薬・行政編－」日本植物防疫協会、「農作物病害虫防除基準」静岡県植物防疫協会編、「農薬と食：安全と安心」ソフトサイエンス社、「農薬残留のここが知りたい」日本食品衛生協会、「農薬を知ろう」文芸社、「ちょっと気になる農薬の話」消費者のための農薬読本、「農薬に対する誤解と偏見」今月の農業編集室、「なるほど！なっとく！農薬Q&A」農薬工業会、「沈黙の春」レーチェル・カーソン著、「保全砂防学入門」電気書院		
評価方法・評価基準	試験（40%）、小テスト（40%）、レポート（20%）		
関連科目	農学概論、植物病理学、環境保全型農業論、植物保護		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 植物病理学 Plant Pathology		単位数 2 単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	外側正之
授業時間	水曜日 2 時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	植物の病害には、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛んになると、その移動にともなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、病原体の種類について学んだ後、防除方法について学んでいくが、特に防除方法に関しては、環境に対する配慮がなされながらも十分に効果のある防除方法について説明する。		
授業目的・目標	主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法及び環境負荷の低い防除方法について学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	オリエンテーション (ルーペの選び方・使い方、レポートの作成方法、文献の検索・引用方法などを含む)	
	2	病気とは何か? 植物病理学とは何か? 生理障害とは違うのか?	
	3	微生物とは何か?	
	4	植物の病気の実例 (1)	
	5	植物病害の防除技術 (1) 環境に配慮した化学農薬の使用法	
	6	植物病害の防除技術 (2) 環境に配慮した化学農薬以外の防除方法	
	7	各種土壌消毒技術とそのメリット・デメリットと環境への影響	
	8	無農薬や有機栽培は本当に安全なのか? 環境への影響を広い視野で考える	
	9	植物の病気の実例 (2)	
	10	IPMとは何か? IPMとは無農薬栽培の事なのか? 有機栽培の事なのか?	
	11	病害虫発生予察事業・植物検疫事業 (防除所とは? 検疫所とは?)	
	12	植物の病気の実例 (3)	
	13	植物病害の診断方法	
	14	静岡県版「病害虫防除基準」「診断ガイドブック」について	
15	樹木医制度・保護士制度など植物病理学と関連した資格について		
キーワード	病気、微生物、化学農薬、土壌消毒、IPM、発生予察、GAP、生物多様性条約		
教科書・参考書	教科書: 「病害虫・雑草防除の基礎」大串龍一著、農文協、参考書: 「農作物病害虫防除基準」「病害虫診断ガイドブック」いずれも静岡県植物防疫協会編、「植物防疫講座-農薬・行政編-」日本植物防疫協会編		
評価方法・評価基準	試験 (40%)、小テスト (40%)、レポート (20%)		
関連科目	「環境と農林業」「農学概論」「植物保護」「環境保全型農業論」		
履修要件	ルーペの購入 (2,000円以内のもので充分である) を必須とする。ルーペの種類や購入方法は1回目の講義で説明する。		
備考	特になし		

授業名 植物病理学	単位数 2単位		授業の方法 講義
	履修年次		2年 前期
受講対象	環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	外側正之
授業時間	金曜日 2時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	植物の病害には、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛んになると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法、防除方法について学ぶ。		
授業目的・目標	主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法、防除方法について学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	オリエンテーション（ルーペの選び方・使い方、レポートの作成方法、文献の検索・引用方法などを含む）	
	2	病気とは何か？植物病理学とは何か？生理障害とは違うのか？	
	3	微生物とは何か？	
	4	植物の病気の実際（1）	
	5	植物病害の防除技術（1）化学農薬による方法	
	6	植物病害の防除技術（2）化学農薬以外の方法	
	7	各種土壌消毒技術とそのメリット・デメリット	
	8	無農薬や有機栽培は本当に安全なのか？	
	9	植物の病気の実際（2）	
	10	IPMとは何か？IPMとは無農薬栽培の事なのか？有機栽培の事なのか？	
	11	病害虫発生予察事業・植物検疫事業（防除所とは？検疫所とは？）	
	12	植物の病気の実際（3）	
	13	植物病害の診断方法	
	14	静岡県版「病害虫防除基準」「診断ガイドブック」について	
15	樹木医制度・保護士制度など植物病理学と関連した資格について		
キーワード	病気、微生物、化学農薬、土壌消毒、IPM、発生予察、GAP、生物多様性条約		
教科書・参考書	教科書：「病害虫・雑草防除の基礎」大串龍一著、農文協、参考書：「農作物病害虫防除基準」「病害虫診断ガイドブック」いずれも静岡県植物防疫協会編、「植物防疫講座－農薬・行政編－」日本植物防疫協会編		
評価方法・評価基準	試験（40％）、小テスト（40％）、レポート（20％）		
関連科目	「環境と農林業」「農学概論」「植物保護」「環境保全型農業論」		
履修要件	ルーペの購入（2,000円以内のもので充分である）を必須とする。ルーペの種類や購入方法は1回目の講義で説明する。		
備考	特になし		

果樹園芸学 Pomology		単位数 2 単位	授業の方法 講義
		履修年次	2 年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	森口卓哉
授業時間	月曜日 4 時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	果樹栽培の対象とする果実は水分や栄養分の摂取と嗜好品として利用されてきたが、近年は健康増進と疾病予防としての機能が注目されるようになっている。果樹は他の作物とは異なってほとんどが樹木作物（永年作物）である。そのため、1 年生作物とは異なる生理・生態的な特性を有することも多い。特に、果樹は環境条件への依存が高く、リンゴやミカン等、各果樹に適した環境下で栽培されるため、近年の気象変動は果樹栽培に大きな影響を与える。また、一口に果樹と言っても、その果実は子房壁が肥大したものから、花床が肥大して果実となったものまで様々である。本科目では、果樹栽培の基本的知識を得ることを目的とし、果樹の種類・品種の選択方法、環境条件からみた適地の選定、苗木の繁殖・育成、植栽、栽培管理、生理・生態的特徴、収穫、さらに流通・貯蔵まで果実が消費者にとどくまでの内容について、環境に配慮した果樹栽培という視点で体系的に学ぶ。		
授業目的・目標	果樹栽培の基本的知識を得る。果樹が消費者にとどくまでの内容について体系的に学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	果樹園芸とは（環境条件からみた適地適作 果樹園芸の問題点と現状）	
	2	果樹の種類と品種I	
	3	果樹の種類と品種II	
	4	栄養成長・生殖成長、花芽分化	
	5	開花と結実生理（自家受粉、他家受粉、単為結果、生理落花（果））	
	6	果実の発育・成熟	
	7	果実の発育・成熟	
	8	果実の生理障害、病害虫	
	9	果実の貯蔵と流通	
	10	整枝・せん定（樹形、せん定時期と方法）	
	11	休眠と問題点（気象変動の視点にも配慮）	
	12	貯蔵、流通利用	
	13	果樹の育種・繁殖方法	
	14	果樹の育種・繁殖方法	
15	まとめ		
キーワード	果樹園芸、環境条件、栽培管理、栽培生理、		
教科書・参考書	参考書：果樹園芸学（米森敬三編集 朝倉書店）、果樹園芸大要（小林章著 養賢堂）、果樹園芸学の基礎（伴野潔・山田寿・平智著 農文協）、果樹園芸学（金浜耕基編 文永堂）		
評価方法・評価基準	試験（50%） レポート（50%）		
関連科目	植物生理生態学、収穫後生理学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 果樹園芸学 (英名) Pomology		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	3年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	森口卓哉
授業時間	木曜日 5時限	教室	講義室14
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	果樹栽培の対象とする果実は水分や栄養分の摂取と嗜好品として利用されてきたが、近年は健康増進と疾病予防としての機能が注目されるようになっていく。果樹は他の作物とは異なってほとんどが樹木作物（永年作物）である。そのため、1年生作物とは異なる生理・生態的な特性を有することも多い。また、一口に果樹と言っても、その果実は子房壁が肥大したものから、花床が肥大して果実となったものまで様々である。本科目では、果樹栽培の基本的知識を得ることを目的とし、果樹の種類・品種の選択方法、適地の選定、苗木の繁殖・育成、植栽、栽培管理、生理・生態的特徴、収穫、さらに流通・貯蔵まで果実が消費者にとどくまでの内容について体系的に学ぶ。		
授業目的・目標	果樹栽培の基本的知識を得る。果樹が消費者にとどくまでの内容について体系的に学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	果樹園芸とは（適地適作 果樹園芸の問題点と現状）	
	2	果樹の種類と品種I	
	3	果樹の種類と品種II	
	4	栄養成長・生殖成長、花芽分化	
	5	開花と結実生理（自家受粉、他家受粉、単為結果、生理落花（果））	
	6	果実の発育・成熟	
	7	果実の発育・成熟	
	8	果実の生理障害、病害虫	
	9	果実の貯蔵と流通	
	10	整枝・せん定（樹形、せん定時期と方法）	
	11	休眠と問題点	
	12	貯蔵、流通利用	
	13	果樹の育種・繁殖方法	
	14	果樹の育種・繁殖方法	
15	まとめ		
キーワード	果樹園芸、栽培管理、栽培生理、		
教科書・参考書	参考書：果樹園芸学（米森敬三編集 朝倉書店）、果樹園芸大要（小林章著 養賢堂）、果樹園芸学の基礎（伴野潔・山田寿・平智著 農文協）、果樹園芸学（金浜耕基編 文永堂）		
評価方法・評価基準	試験（50％）レポート（50％）		
関連科目	植物生理生態学、収穫後生理学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 森林土木学 Civil Engineering for Forest and Forestry		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	逢坂興宏
授業時間	木曜日 3時限	教室	講義室 5
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	森林土木学は治山・砂防分野と林業土木分野からなる。治山・砂防分野では、森林山地斜面で発生する土砂移動現象(表面侵食、斜面崩壊、地すべり、土石流等)の発生メカニズムとその対策、および森林植生の有する表面侵食防止、表層崩壊防止の機能とその限界、荒廃地の復元技術および森林・植生がもつ環境保全機能と景観形成機能についての知識と最新の技術を学ぶ。林業土木分野では、木材生産システムの集材工程に大きくかわる林内路網整備に関する知識(林道、森林作業道開設の目的、役割、構造等)、設計手順、現地踏査についての知識と最新の技術を学ぶ。また、共通する分野として土質力学と水理学の基礎を学ぶ。		
授業目的・目標	斜面崩壊・土石流・地すべり等の山地災害の発生機構と森林の防災機能、土砂災害対策、林道の計画・設計・施工についての知識と技術を学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	ガイダンス、森林土木学とは	
	2	森林山地における土砂移動現象	
	3	表面侵食と植生による斜面の保全	
	4	森林と山崩れ	
	5	荒廃地の復元技術	
	6	緑化の環境保全機能と景観形成機能	
	7	土石流	
	8	地すべり、深層崩壊	
	9	火山活動に伴う土砂移動現象、雪崩	
	10	林道の計画と構造	
	11	林道の設計	
	12	林道の施工	
	13	架線集材	
	14	土質力学の基礎	
15	水理学の基礎		
キーワード	治山、砂防、緑化、林業土木、林道		
教科書・参考書	参考書：「保全砂防学入門」電気書院、「森林土木学」朝倉書店、		
評価方法・評価基準	試験(50%)、課題(50%)		
関連科目	農林業のための地学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 森林土木学 (英名) Civil Engineering for Forest and Forestry		単位数 2 単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	逢坂興宏
授業時間	金曜日 3 時限	教室	講義室 7
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	森林の多面的機能には、土砂災害防止機能・土壌保全機能がある。本科目では、斜面崩壊・土石流・地すべり等の山地災害の発生機構と森林の防災機能、土砂災害を引き起こす気象、山地防災対策についての知識と最新の技術を学ぶ。また、木材生産システムの集材工程に大きくかかわる林内路網整備に関する知識(林道、森林作業道開設の目的、役割、構造等)、設計手順、現地踏査についての知識と最新の技術を学ぶ。		
授業目的・目標	斜面崩壊・土石流・地すべり等の山地災害の発生機構と森林の防災機能、土砂災害対策、林道の計画・設計・施工についての知識と技術を学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	ガイダンス, 森林土木学とは	
	2	森林山地における土砂移動現象	
	3	表面侵食と植生による斜面の保全	
	4	森林と山崩れ	
	5	山腹緑化工	
	6	のり面緑化工	
	7	土石流	
	8	地すべり、深層崩壊	
	9	火山活動に伴う土砂移動現象、雪崩	
	10	林道の計画と構造	
	11	林道の設計	
	12	林道の施工	
	13	架線集材	
	14	土質力学の基礎	
15	水理学の基礎		
キーワード	治山、砂防、緑化、林業土木, 林道		
教科書・参考書	参考書: 「保全砂防学入門」電気書院、「森林土木学」朝倉書店、		
評価方法・評価基準	試験 (50%)、課題 (50%)		
関連科目	農林業のための地学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 畜産概論 Animal Husbandry Introduction		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	1年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	祐森 誠司
授業時間	木曜日2時限	教室	講義室3
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	人間の生活に貢献するべく動物の生命活動を応用する学問的追究が畜産学であり、従来は食料自給を課題とした生産において柱となる遺伝育種、繁殖、飼養などの専門領域での課題解決とそれに必要な技術開発が中心となって進展してきた。これらの課題には国際的な視野で捕らえなければならない課題も含まれるようになっており、さらには従来の生産効率一辺倒な対応だけでなく、労働者や飼育される動物の労働・生活環境におけるリスク、特に環境負荷物質を制御するための排せつ物の処理については技術的な改善が取り組まれており、畜産業の歴史と近況の情報を教授する。		
授業目的・目標	家畜生産における課題を内容に応じて整理し、その解決に向けた対策の解説を通じて現状の理解を深め、今後新たに課題となる内容とその対策に対する指針が策定できるようにする。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	家畜と人との関係、畜産学の歴史	
	2	家畜生産の目的	
	3	家畜の特徴と能力開発	
	4	家畜の増殖技術	
	5	乳生産の機能	
	6	乳製品の特徴と製造	
	7	肉生産の機能	
	8	肉製品の特徴と加工	
	9	卵生産の機能	
	10	卵製品と加工	
	11	産業としての畜産(経営)	
	12	六次産業の取り組み	
	13	畜産物の流通	
	14	環境に配慮した持続的な畜産の発展	
15	まとめ		
キーワード	畜産、畜産物、育種、繁殖、六次産業		
教科書・参考書	畜産学入門、唐澤 豊他編、文永堂出版(株)		
評価方法・評価基準	試験(70%)、課題(30%)		
関連科目	家畜飼養学、家畜衛生学など、動物生産に関わる科目および、飼料作物関連の科目		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 畜産概論 Animal Husbandry Introduction		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	1年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	祐森 誠司
授業時間	月曜日1時限	教室	大講義室
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	人間の生活に貢献するべく動物の生命活動を応用する学問的追究が畜産学であり、従来は食料自給を課題とした生産において柱となる遺伝育種、繁殖、飼養などの専門領域での課題解決とそれに必要な技術開発が中心となって進展してきた。これらの課題には国際的な視野で捕らえなければならない課題も含まれるようになっており、さらには従来の生産効率一辺倒な対応だけでなく、労働者や飼育される動物の労働・生活環境におけるリスクを回避することも求められており、畜産業の歴史と近況の情報を教授する。		
授業目的・目標	家畜生産における課題を内容に応じて整理し、その解決に向けた対策の解説を通じて現状の理解を深め、今後新たに課題となる内容とその対策に対する指針が策定できるようにする。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	家畜と人との関係、畜産学の歴史	
	2	家畜生産の目的	
	3	家畜の特徴と能力開発	
	4	家畜の増殖技術	
	5	乳生産の機能	
	6	乳製品の特徴と製造	
	7	肉生産の機能	
	8	肉製品の特徴と加工	
	9	卵生産の機能	
	10	卵製品と加工	
	11	産業としての畜産(経営)	
	12	六次産業の取り組み	
	13	畜産物の流通	
	14	持続的な畜産の発展	
15	まとめ		
キーワード	畜産、畜産物、育種、繁殖、六次産業		
教科書・参考書	畜産学入門、唐澤 豊他編、文永堂出版(株)		
評価方法・評価基準	試験(70%)、課題(30%)		
関連科目	家畜飼養学、家畜衛生学など、動物生産に関わる科目および、飼料作物関連の科目		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

4. <履修形態が不明確>

履修モデルや卒業要件の記載からは、コース制のように特定の科目群の履修を求める計画を想定しているように見られるが、例えばコース制であれば、学生がいつコースを選択するのか、特定のコースに希望が偏った場合どのように対応するのかなど、具体的な履修の方策が明らかでないため、学生の履修がどのように行われるのか具体的に説明すること。

(対応)

本学では、生産理論や生産技術、加工・流通・販売は、栽培、林業、畜産の3分野に分かれて学ぶ計画である。当初申請時は、「分野」や「領域」などの言葉を用いて説明していたが、説明が不十分で明確でなかったため、履修形態としてコース制とすることを明確に説明する。また、学生がコース選択する時期や、それぞれのコースの受入人数の目安、希望が偏った場合の対応等について不明確となっていたため、具体的に説明する。

(詳細説明)

本学では、生産理論や生産技術は、栽培、林業、畜産の3分野に分かれて学ぶ計画である。当初申請時の基本計画書や設置の趣旨等を記載した書類のなかで、「分野」や「領域」を用いて説明していたが、説明が不十分で不明確であった。このため、生産理論の科目群と生産技術の科目群、加工・流通・販売の科目群は、栽培、林業、畜産の各分野に分かれて学ぶことを明確にするため、コース制とし、「栽培コース」、「林業コース」、「畜産コース」の3コースを置く。なお、基礎科目や職業専門科目のうち農林業基礎及び経営管理、展開科目、総合科目は共通して学ぶ。各コースにおける体系的な教育課程については、審査意見7への回答で詳細に説明する(61ページ)。

コースごとの受入人数の目安は、栽培コース18人程度、林業コースは3人程度、畜産コース3人程度とする。これは、現在の農林大学校養成部の定員が、栽培系の園芸学科、茶業学科、果樹学科が合わせて80人、畜産学科が10人、林業学科が10人であることや、学生確保の見直し等を記載した書類の資料7「静岡県立農林環境専門職大学(仮称)及び静岡県立農林環境専門職大学短期大学部(仮称)への入学意向に関するアンケート調査報告」の「(4)興味のある分野について」(P7)で、概ねの割合が、栽培(野菜、花き、果樹、お茶、水田農業)80%、林業10%、畜産10%となっていることから、上記の人数を目安とするものである。

希望者数に極端な偏りがあった場合は、1年次のGPA、学生の志望理由、面接結果を総合的に勘案して選考し、教務委員会の中に設ける選考会に諮った上で決定し、人数を調整する。

コース制については、大学パンフレット、ホームページ、入試説明会で丁寧に説明するなど、入試前から入学希望の学生に周知を行っていく。コース選択は、入学時の4月及び後期が始まる10月(合計2回)に、コースの決定時期、希望申込時期、選抜時期、選抜方法について、コースごとの特色と進路等を説明した上で、1年後期開講の導入科目(栽培学、植物生理生態学、樹木・組織学、畜産概論)の履修誘導を行う(別添資料1-1 カリキュラム・マップ、別添資料4履修

モデル)。

コース決定の方法については、1年次の12月に志望理由等を記載した希望調査票を提出させ、1月に面接を行い、3月に選考会を実施の上、コースの決定を行う。

以上のコース制や選択方法について、「設置の趣旨等を記載した書類」に追記し、履修モデルを変更する。

<選考スケジュール>

時期	内容
入試説明会 (大学入学前)	大学パンフレット、ホームページ、入試説明会等におけるコース制の説明
<1年次> 4月及び10月	コース選択に向けた説明と指導 (コース決定時期、希望申込時期、選抜時期、選抜方法)
12月	希望調査(希望調査票の提出)
1月	面接
3月	選考会(教務委員会)
	コースの決定

(新旧対象表) 設置の趣旨を記載した書類 (25 ページ)

新	旧
<p>6 教育方法、履修指導方法及び卒業要件</p> <p>(1) 教育方法 (略)</p> <p>(2) 履修指導方法等</p> <p>①履修ガイダンスの実施</p> <p>入学時のガイダンスにおいて、履修ガイドブック、シラバス、卒業後の進路希望に即した履修モデルを提示し、学生の目指す専門分野別に、教育課程の考え方・特色や入学時から卒業時までの履修方法について説明するものとする。また、入学直後に、全学生を対象に「新入生アンケート調査」を実施し、志望分野や志望理由、卒業後の志望進路等を把握する。</p> <p>また、生産技術は、栽培、林業、畜産のそれぞれの分野を専門的に学ぶため、コース制とし、「栽培コース」、「林業コース」、「畜産コース」</p>	<p>6 教育方法、履修指導方法及び卒業要件</p> <p>(1) 教育方法 (略)</p> <p>(2) 履修指導方法等</p> <p>①履修ガイダンスの実施</p> <p>入学時のガイダンスにおいて、履修ガイドブック、シラバス、卒業後の進路希望に即した履修モデルを提示し、学生の目指す専門分野別に、教育課程の考え方・特色や入学時から卒業時までの履修方法について説明するものとする。また、入学直後に、全学生を対象に「新入生アンケート調査」を実施し、志望分野や志望理由、卒業後の志望進路等を把握する。</p> <p>また、1年次の後期の開始時に、履修等のガイダンスと指導を行うものとする。2年次には前期の開始時に領域の選択を行うとともに、同様に履修</p>

新	旧
<p><u>の3コースを置く。なお、基礎科目や職業専門科目のうち農林業基礎及び経営管理、展開科目、総合科目は共通して学ぶ。</u></p> <p><u>2年次からコースに分かれて、生産理論および生産技術を学ぶ。コース選択に関する説明は、入学時の4月及び後期が始まる10月(合計2回)に行い、コースの決定時期、希望申込時期、選抜時期、選抜方法について、学生に対する説明と、1年後期開講の導入科目(栽培学、植物生理生態学、樹木・組織学、畜産概論)の履修誘導を行う。コース決定の方法については、1年次の12月に志望理由等を記載した希望調査票を提出させ、1月に面接を行い、3月に選考会を実施の上、コースの決定を行う。</u></p> <p>②個別履修指導等の実施 (略)</p> <p>④履修モデル</p> <p>履修モデルを提示し、卒業後の進路希望に即した履修指導を行う。設定した履修モデルは、次のとおりである(資料23)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>履修モデル：農業経営・水稲(経営体後継者・幹部・起業者)</u> ・<u>履修モデル：農業経営・茶(経営体後継者・幹部・起業者)</u> ・<u>履修モデル：農業経営・施設野菜(経営体後継者・幹部・起業者)</u> ・<u>農業経営・露地野菜(経営体後継者・幹部・起業者)</u> ・<u>農業経営・花き(経営体後継者・幹部・</u> 	<p>等のガイダンスと指導を行う。3年次以降にも前期の開始時に履修等のガイダンスと指導を行うものとする。</p> <p>②個別履修指導等の実施 (略)</p> <p>④履修モデル</p> <p>履修モデルを提示し、卒業後の進路希望に即した履修指導を行う。設定した履修モデルは、次のとおりである(資料23)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>履修モデル(農業経営)</u> ・<u>履修モデル(林業経営)</u> ・<u>履修モデル(畜産経営)</u> ・<u>履修モデル(農林業指導者)</u>

新	旧
<p><u>起業者)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>履修モデル：農業経営・果樹（経営体後継者・幹部・起業者）</u> ・<u>履修モデル：林業経営（経営体後継者・幹部・起業者、森林組合職員）</u> ・<u>履修モデル：畜産経営（経営体後継者・幹部・起業者）</u> ・<u>履修モデル：農業指導者（公務員、農業協同組合職員）</u> ・<u>履修モデル：林業指導者（公務員）</u> ・<u>履修モデル：畜産指導者（公務員、農業協同組合職員）</u> 	

(新旧対照表) 履修モデル

新	旧
<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修モデル（別添資料 4（新）） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修モデル（別添別添資料 4（旧））

5. <科目の実施体制が不明確>

40名を超えて実施する科目について、教育上必要があり、かつ十分な教育効果をあげることができるかについて説明が無いため、具体的に説明するか、適切に改めること。また、専門職短期大学と合同で実施する科目についてはそれぞれの学校種としての十分な教育水準が担保される授業計画であるか併せて説明すること。

(対応)

40名を超えて実施する科目である「静岡学」について、教育上必要があり、かつ十分な教育効果をあげることができることを具体的に説明する。また、本科目は併設する静岡県立農林環境専門職大学短期大学部と合同で実施するが、それぞれ学校種として十分な教育水準が担保されることを説明する。

なお、短期大学との達成目標等の違いを明確にするため、講義等の内容を改める。

(詳細説明)

40名を超えて実施する科目として「静岡学」があるが、本科目は併設する静岡県立農林環境専門職大学短期大学部と合同で行う科目である。

本科目は、他産業との競合のなかで農林業を営まなければならない静岡県の状況に鑑み、今後の静岡県の産業のあり方や発展に向けた解決策を経営の視点から考える科目である。

授業の実施方法について、講話は大学と短期大学の学生と一緒に聴講するが、グループ・ワークは大学と短期大学で分けて行い、発表は合同で行う方法をとる。

静岡県にゆかりのある各界のトップランナーの講話を聴講し、県内の様々な産業の状況を学ぶとともに他産業の職業人の経験や考え方に触れることにより、農林業者としての職業観の醸成を図ることが出来ることから、本科目は専門職業人を養成する本学の教育上、必要があると考えられる。

また、大学と短期大学で別々に分かれたグループにおいて、講話についてのグループ・ワークを行い、他の学生と意見交換を行うことに加え、大学と短期大学の合同で発表を行い、多様な意見に触れることにより、十分な教育効果をあげることができる。さらに、グループ・ワークを大学と短期大学で別々に実施し、大学と短期大学のそれぞれの教員が、それぞれの評価基準によりレポートの評価を行うことから、それぞれの学校種としての十分な教育水準が担保されると考えられる。

(新旧対照表) 授業科目等の概要 (1ページ)

新	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	静岡学	<p>静岡県はものづくり県であり、産業界を牽引する数多くの業種の企業が存在し、ヒト、モノ、カネの経営資源の奪い合いが起こっている。このような中で農林業経営を行うには、農林業の枠内にとどまらず、他産業の情勢、動向を理解する必要がある。本科目では、静岡県の農業、林業などの一次産業、製造業などの二次産業、卸売業・小売業・サービス業などの三次産業の各界のトップランナーを招聘し、講話を聴講する。その上で、グループ・ワークと発表を通じ、今後の静岡県の農林業のあり方や発展に向けた解決策を経営の視点から考える。</p>	<p>短期大学との合同授業 同時に行う学生数：124人 ・各界のトップランナーの講話を聴講する貴重な機会であり、教育上必要である。 ・グループ・ワークは大学と短期大学のそれぞれのグループで行うが、同じ会場で発表を行うため、多様な意見に触れることが出来て、かつ、交流も進むため、教育効果が高い。 ・大学と短大でそれぞれ教員を配置しており、達成目標も異なっているため、教育水準は担保される。</p>
旧	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	静岡学	<p>静岡県はものづくり県であり、産業界を牽引する数多くの企業が存在している。このため、静岡県ではヒト、モノ、カネが激しく動いており、経営資源の奪い合いが起こっている環境下で農林業経営を行わなくてはならない。本科目では、静岡県の農林業、製造業、卸売業、小売業、サービス業などの各産業界のトップランナーを招聘し、その講和を聞きだけでなく、外部講和者と学生との活発なディスカッションを通じ、今後の農林業のあり方や発展に向けた解決策を様々な視点から考えるための知識を得る。</p>	<p>短期大学と合同授業 同時に行う学生数：124人 講演会形式で講義を行うため、40人講義と同様の効果が得られると考えている。</p>

(新旧対照表) シラバス

(新) 1 ページ

授業名 静岡学 Study of Shizuoka		単位数 2 単位	授業の方法 講義
		履修年次	1 年 通年
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	多々良明夫
授業時間	火曜日 5 時限	教室	視聴覚室
オフィスアワー	随時受付ける。ただし、事前にメールで連絡すること。		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	静岡県はものづくり県であり、産業界を牽引する数多くの業種の企業が存在し、ヒト、モノ、カネの経営資源の奪い合いが起こっている。このような中で農林業経営を行うには、農林業の枠内にとどまらず、他産業の情勢、動向を理解する必要があるため、 <u>農業、林業などの一次産業、製造業などの第二次産業、卸売業・小売業・サービス業などの第三次産業の各界のトップランナーを招聘し、講話を聴講する。その上で、グループ・ワークと発表を通じ、今後の静岡県の農林業のあり方や発展に向けた解決策を経営の視点から考える。</u>		
授業目的・目標	<u>講話をもとに行うグループ・ワークと発表を通じ、今後の静岡県の農林業のあり方や発展に向けた解決策を経営の視点から考える。</u>		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	ガイダンス	
	2	静岡県の農業	
	3	静岡県の林業	
	4	静岡県の漁業	
	5	静岡県の環境と環境保全	
	6	静岡県の食品産業	
	7	グループ・ワーク① ～農と食、環境をめぐる課題～	
	8	発表①	
	9	静岡県の製造業	
	10	静岡県の商業	
	11	静岡県の卸売業	
	12	静岡県の飲食業	
	13	静岡県の金融業	
	14	グループ・ワーク② ～静岡県の発展に向けて～	
15	発表②		
キーワード	静岡県、農業、林業、漁業、環境、製造業、商業、卸売業、飲食業、金融業		
教科書・参考書	各講義毎に資料を配布する。 参考書：静岡県の産業データブック（静岡県HP）		
評価方法・評価基準	レポート（70%）、プレゼンテーション（15%）、受講態度（15%）		
関連科目	特になし		
履修要件	特になし		
備考	書籍やインターネットを通じて、静岡県の産業について積極的に情報収集してください。		

静岡学 Study of Shizuoka		単位数 2 単位	授業の方法 講義
		履修年次	1 年 通年
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	多々良明夫
授業時間	5 時限目	教室	視聴覚室
オフィスアワー	随時受付ける。ただし、事前にメールで連絡すること。		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	静岡県はものづくり県であり、産業界を牽引する数多くの業種の企業が存在し、ヒト、モノ、カネの経営資源の奪い合いが起こっている。このような中で農業経営を行うには、農林業の枠内にとどまらず、他産業の情勢、動向を理解する必要があるため、各産業界のトップランナーを招聘し、その講話を聴講する。		
授業目的・目標	講和や講和をもとに行うディスカッションを通じ、今後の静岡県の産業のあり方や発展に向けた解決策を様々な視点から考える。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	ガイダンス(学長講和)	
	2	静岡県の農業	
	3	静岡県の林業	
	4	静岡県の漁業	
	5	静岡県の製造業(食品)	
	6	静岡県の製造業(家具)	
	7	グループ・ワーク①	
	8	静岡県の製造業(自動車、バイク関係)	
	9	静岡県の製造業(楽器関係)	
	10	静岡県の商業	
	11	静岡県の卸売業	
	12	静岡県の飲食業	
	13	静岡県の金融業	
	14	静岡県の環境と環境保全	
15	グループ・ワーク②		
キーワード	静岡県の産業		
教科書・参考書	各講義毎に資料を配布する。 参考書：静岡県の産業データブック（静岡県HP）		
評価方法・評価基準	レポート（80%）、プレゼンテーション（20%）		
関連科目	特になし		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

6. <科目区分が不適切>

シラバスを確認したところ、科目区分が不適切であると考えられる科目があるため適切に改めること。

(1)「情報処理基礎」、「情報処理応用」は基礎科目に配置することがふさわしいと考えられる。

(2)「経営実習Ⅰ、Ⅱ」は職業専門科目に配置することがふさわしいと考えられる。

(対応)

「情報処理基礎」及び「情報処理応用」の内容を踏まえて、改めて科目の配置について検討したところ、自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るための科目と考えられるため、基礎科目に配置する。

また、「経営実習Ⅰ、Ⅱ」の内容を踏まえて、改めて科目の配置について検討したところ、専門分野である農林業経営について学ぶ科目であると考えられるため、職業専門科目に配置する。以上を踏まえ、「教育課程等の概要」(別添資料6)を改める。

(新旧対照表) 教育課程の概要

新		旧	
(1 ページ)		(1 ページ)	
科目区分	授業科目の名称	科目区分	授業科目の名称
①基礎科目	静岡学 歴史学概論 文明論 文学概論 茶道 華道 経済学概論 法学概論 社会学概論 政治学概論 統計学 情報処理基礎 情報処理応用	①基礎科目	静岡学 歴史学概論 文明論 文学概論 茶道 華道 経済学概論 法学概論 社会学概論 政治学概論

新		旧	
② 職業専門科目	農林業基礎 農学概論 環境と農林業 農林業史 農林業政策 技術者倫理 県内農林業事情 県外農林業事情 海外農林業事情 農林業のための基礎数学 農林業のための生物学 農林業のための化学 農林業のための物理学 農林業のための地学 分子生物学 農業気象学 生命科学 野生鳥獣管理・利用論	② 職業専門科目	農林業基礎 農学概論 農林業史 農林業政策 技術者倫理 県内農林業事情 県外農林業事情 海外農林業事情 農林業のための基礎数学 農林業のための生物学 農林業のための化学 農林業のための物理学 農林業のための統計学 農林業のための地学 分子生物学 農業気象学 生命科学 情報処理基礎 情報処理応用
(2 ページ)		(2 ページ)	
② 職業専門科目	経営管理 簿記基礎 簿記応用 フードシステム論 法と農業経営 経営管理論 農林業経営学 経営戦略 マーケティング論 財務会計 管理会計 農林業の経営組織論 労務管理 人材マネジメント 知的財産権 農と食の起業論 経営実習Ⅰ 経営実習Ⅱ	② 職業専門科目	経営管理 簿記基礎 簿記応用 農と食の経済学 法と農業経営 経営管理論 農林業経営学 経営戦略Ⅰ 経営戦略Ⅱ マーケティング論 財務会計 管理会計 経営組織論 労務管理 人材マネジメント 協同組合論 知的財産権 農と食の起業論
(3 ページ)		(3 ページ)	
④ 総合科目	経営分析演習Ⅰ 経営分析演習Ⅱ プロジェクト研究 小計(3科目)	④ 総合科目	経営実習Ⅰ 経営実習Ⅱ 経営分析演習Ⅰ 経営分析演習Ⅱ プロジェクト研究Ⅰ プロジェクト研究Ⅱ 小計(6科目)

7. <教育課程の体系性が不明確>

職業専門科目について、多くの理論系科目の開設はあるものの、本学の卒業要件では一部の科目しか履修が担保されていない。さらに、そのうち必修とされているものも、例えば、畜産分野の「家畜育種繁殖学」「家畜飼養学」のように、より重要と考えられる科目が必修とされていない。それぞれの分野の理論的な科目を十分に学ぶ教育課程となっているか、卒業要件における必修の範囲等も見直しつつ説明すること。

また、授業科目の履修の順序など教育課程の体系性が明らかでないため、履修系統図等を示しつつ具体的に説明すること。その際、生産理論の科目群では3つの分野のいずれかを選択するとのことだが、それらの分野の選択と他の科目群での科目選択が卒業要件において、どのように関連付けて計画されているのかも具体的に説明すること。

(対応)

本学科では、生産理論や生産技術、加工・流通・販売は、栽培、林業、畜産の3分野に分かれて学ぶ計画である。当初申請時は、「分野」や「領域」などの言葉を用いて説明していたが、説明が不十分で明確でなかったため、コース制とすることを明確に説明する。その上で、それぞれのコースにおける体系的な科目履修方法を示すとともに、コース必修科目の設定と卒業要件の見直し、「生産理論」と「生産技術」、「経営管理」、「加工・流通・販売」の科目群との関連付けについて具体的に説明する。なお、「家畜育種繁殖学」「家畜飼養学」について検討したところ、これらの科目は、飼育技術を学ぶために不可欠な科目であるため、畜産コース必修として配置することとした。

(詳細説明)

本学科では、生産理論や生産技術、加工・流通・販売は、栽培、林業、畜産の3分野に分かれて学ぶ計画である。当初申請の「基本計画書」や「設置の趣旨等を記載した書類」の中で、「分野」や「領域」を用いて説明していたが、説明が不十分で不明確であった。このため、生産理論と生産技術、加工・流通・販売は分かれて学ぶことを明確にするため、コース制とし、「栽培コース」、「林業コース」、「畜産コース」の3コースを置く。また、体系的な学びとなるように科目の配当年次と卒業単位数の見直しを行い、卒業単位数を124単位から129単位に変更した。

各コースの卒業要件と、生産理論と他科目群との関連は次の通りである。(資料7 各コースにおける履修方法、資料1-1 カリキュラム・マップ)

① 共通科目

職業専門科目のうち、経営管理科目群は農林業経営者に必要な経営の知識などを共通して学ぶ科目群である。経営者に不可欠な経営管理の知識や経営戦略、マーケティング、会計、労務

について学ぶ「農林業経営学」（1年後期）、「経営戦略」（2年前期）、「マーケティング論」（2年後期）、「財務会計」（2年前期）、「管理会計」（3年前期）、「労務管理」（2年後期）を必修科目として配置する。また、フードシステムの観点から現代の食料をめぐる実態と変動について学ぶ「フードシステム論」（1年後期）、一般的な経営管理の理論を学ぶ「経営管理論」（2年前期）、人的資源管理について学ぶ「人材マネジメント」（3年前期）、経営組織の理論と課題や協同組合組織について学ぶ「農林業の経営組織論」（3年前期）、農林業経営に必要な関連法について学ぶ「法と農業経営」（2年前期）、特許権や実用新案等の知的財産権について学ぶ「知的財産権」（3年後期）、農業や食料に関わるビジネスの起業について学ぶ「農と食の起業論」（3年後期）を選択科目として配置する。また、農林業経営体において経営を学ぶ臨地実務実習である「経営実習Ⅰ」（4年前期）、「経営実習Ⅱ」（4年後期）を必修科目として配置する。なお、「簿記基礎」（1年前期）及び「簿記応用」（1年後期）は、経営を学ぶための基礎的な科目であるため、選択科目から自由科目へ変更する。

共通の生産理論科目群として、コース選択の参考とする導入的な生産理論の科目として、「栽培学」（1年後期）、「植物生理生態学」（1年後期）、「樹木・組織学」（1年後期）、「畜産概論」（1年後期）を選択科目として配置する。2年前期よりコースに分かれて学ぶが、3年前期に農林業分野の先端技術を総合的に学ぶ「農林業のための先端技術」を必修科目として配置する。

生産技術科目群の共通科目として、農林業生産技術を広く学ぶ「総合実習」（1年通年）、農林業の生産工程管理について学ぶ「GAP演習」（2年前期）、トラクター等の大型機械の操作方法や安全使用について学ぶ「大型機械実習Ⅰ」（2年前期）、農林業経営体で生産技術を学修する「企業実習」（3年後期）を必修科目として配置する。

展開科目は、農山村の地域資源である伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会について学ぶ科目であり、「農山村田園地域公共学」（1年後期）、「農村社会論」（2年前期）、「農と食の哲学」（2年前期）、「食文化論」（2年後期）、「医福食農連携論」（2年後期）、「農村景域論」（3年前期）、「グリーン・ツーリズム論」（3年前期）、「農山村デザイン演習」（3年前期）、「在来作物学」（3年前期）、「コミュニティビジネス論」（3年後期）を必修科目として配置する。

総合科目は、農林業経営における課題の解決に向けた研究の手法などを学ぶ「経営分析演習Ⅰ」（4年前期）、「経営分析演習Ⅱ」（4年後期）、「プロジェクト研究」（4年通年）を必修科目として配置する。

② 栽培コース

栽培コースを選択する学生には、1年後期に、「栽培学」もしくは「植物生理生態学」を選択するよう履修誘導を行う。その上で、栽培技術を学ぶにあたり、植物栄養や病害虫、栽培体系、環境保全型農業の知識は不可欠である。このため、生産理論（栽培）の科目群に、植物の特性や植物生産の代謝、養分機能、栄養特性と肥料について学ぶ「肥料・植物栄養学」（2年前期）、病害虫の種類や特長について学ぶ「植物病理学」（2年前期）及び「応用昆虫学」（2年後期）、環境に配慮した農業を学ぶ「環境保全型農業論」（3年前期）をコース必修として配置する。また、栽培体系を学ぶ科目として、水稻や茶の栽培体系について学ぶ「作物学」（2年前期）、野菜や花き、果樹の栽培体系を総合的に学ぶ「園芸学」（2年前期）のどちらかを選

択する。さらに知識を深める科目として、植物の遺伝の仕組みや育種技術について学ぶ「植物遺伝育種学概論」（2年後期）、土壌診断や土づくりについて学ぶ「土壌学」（2年後期）、野菜栽培の基礎知識を学ぶ「野菜園芸学」（2年後期）、果樹栽培の基礎知識を学ぶ「果樹園芸学」（2年後期）、花き栽培の基礎知識を学ぶ「花き園芸学」（2年後期）を選択科目として配置する。

これらの理論に対応する生産技術科目群に、基礎的な栽培技術を学ぶ「圃場実習（栽培）」（2年前期）、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ（栽培）」（2年後期）、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ（栽培）」（3年通年）をコース必修として配置する。また、大型機械の知識や技能を学修する「大型機械実習Ⅱ」（3年前期）を選択科目として配置する。

加工・流通・販売科目群に、販売管理の基礎理論を学ぶ「販売管理論」（3年前期）と、販売技術を身につける「販売実習」（3年後期）をコース必修として配置する。また、食品成分や化学変化・貯蔵・衛生管理について学ぶ「食品科学」（2年前期）、農畜産物の栄養特性や嗜好性、保存性を向上させる加工技術を学ぶ「食品加工学」（2年後期）、豆類や野菜、果樹、乳製品、畜肉類などの加工を学ぶ「食品加工実習」（3年前期）、消費者に安全・安心な食品を安定的に届けるための流通システムについて学ぶ「食品流通論」（3年前期）、食品の機能性や健康について学ぶ「農と食の健康論」（2年後期）、園芸作物の品質保持技術・貯蔵方法・加工に関わる知識を学ぶ「収穫後生理学」（3年前期）、6次産業化の方向性や可能性について学ぶ「6次産業化実践論」（3年後期）を選択科目として配置する。

③ 林業コース

林業コースを希望する学生には、1年後期に「樹木・組織学」を選択するよう履修誘導を行う。その上で、林業技術を学ぶにあたり、森林調査や造林、治山、収穫技術の知識が不可欠である。このため、生産理論（林業）の科目群として、森林政策の歴史や関連法、森林調査の基礎を学ぶ「森林計画・政策論」（2年前期）、造林について学ぶ「造林学」（2年前期）、治山・砂防や林業土木について学ぶ「森林土木学」（2年前期）、木質バイオマスについて学ぶ「木質科学概論」（2年後期）、木材生産や作業システムについて学ぶ「木材生産システム」（2年後期）、森林計画制度や森林保護の視点を備えた持続的林業経営や森林認証制度について学ぶ「森林マネジメント」（3年前期）をコース必修として配置する。

これらの理論に対応する生産技術科目群に、基礎的な栽培技術を学ぶ「演習林実習」（2年前期）、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ（林業）」（2年後期）、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ（林業）」（3年通年）、林業機械の操作法や高性能林業機械について学ぶ「林業機械実習」（3年前期）をコース必修として配置する。

加工・流通・販売科目群に、木材の様々な利用方法や流通・原木市場について学ぶ「木材利用・流通論」（2年前期）、木材加工の基礎理論を学ぶ「木材加工学」（2年後期）、木工作品の製作を行う「木材加工実習」（3年前期）をコース必修として配置する。

④ 畜産コース

畜産コースを希望する学生には、1年後期に「畜産概論」を選択するよう、履修誘導を行う。

その上で、飼育技術を学ぶにあたり、家畜の生理・生態、栄養と飼料、育種や繁殖の知識、また、家畜ふん尿と環境問題の知識は不可欠である。このため、生産理論（畜産）の科目群に、家畜栄養と飼料、飼料配合設計の基礎理論を学ぶ「飼料総論」（2年前期）、飼料消化性の違いや環境要因による変化やその対策について学ぶ「家畜飼養学」（2年前期）、家畜の体の仕組みや各臓器の生理機能を学ぶ「家畜生理解剖学」（2年前期）、育種の基礎知識や繁殖に関わる知識を学ぶ「家畜育種繁殖学」（2年後期）、家畜衛生の一連の知識を学ぶ「家畜衛生学」（2年後期）、環境に配慮した畜産について学ぶ「畜産環境学」（3年前期）をコース必修として配置する。また、畜産の関連法規について学ぶ「畜産法規」（2年前期）や「人工授精論」（2年前期）、草地の特徴や管理方法について学ぶ「自給飼料」（2年後期）、アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理について学ぶ「家畜福祉学」（2年後期）を選択科目として配置する。

これらの理論に対応する生産技術科目群として、基礎的な栽培技術を学ぶ「圃場実習（畜産）」（2年前期）、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ（畜産）」（2年後期）、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ（畜産）」（3年通年）をコース必修として配置する。また、大型機械の知識や技能を学修する「大型機械実習Ⅱ」（3年前期）を選択科目として配置する。

加工・流通・販売科目群に、販売管理の基礎理論を学ぶ「販売管理論」（3年前期）と、販売技術を身につける「販売実習」（3年後期）をコース必修として配置する。また、食品成分や化学変化・貯蔵・衛生管理について学ぶ「食品科学」（2年前期）、農畜産物の栄養特性や嗜好性、保存性を向上させる加工技術を学ぶ「食品加工学」（2年後期）、豆類や野菜、果樹、乳製品、畜肉類などの加工を学ぶ「食品加工実習」（3年前期）、消費者に安全・安心な食品を安定的に届けるための流通システムについて学ぶ「食品流通論」（3年前期）、食品の機能性や健康について学ぶ「農と食の健康論」（2年後期）、6次産業化の方向性や可能性について学ぶ「6次産業化実践論」（3年後期）を選択科目として配置する。

	卒業に必要となる単位数					
	生産理論		生産技術		加工・流通・販売	
	卒業要件	うち コース必修	卒業要件	うち コース必修	卒業要件	うち コース必修
栽培コース	16 単位	8 単位	26 単位	10 単位	8 単位	4 単位
林業コース	16 単位	12 単位	28 単位	10 単位	6 単位	6 単位
畜産コース	16 単位	12 単位	26 単位	10 単位	8 単位	4 単位

以上の見直しを踏まえ、「教育課程等の概要」の記載を修正する。

(新旧対照表) 教育課程等の概要

新			旧		
(1 ページ)			(1 ページ)		
② 職業専門科目	農林業基礎	農学概論 1前 環境と農林業 1後 農林業史 1後 農林業政策 2前 技術者倫理 3前 県内農林業事情 1前 県外農林業事情 2前 海外農林業事情 3前 農林業のための基礎数学 1前 農林業のための生物学 1前 農林業のための化学 1前 農林業のための物理学 1後 農林業のための地学 1後 分子生物学 1後 農業気象学 2後 生命科学 2後 野生鳥獣管理・利用論 3前	② 職業専門科目	農林業基礎	農学概論 1前 農林業史 1前 農林業政策 2前 技術者倫理 3前 県内農林業事情 1後 県外農林業事情 2前 海外農林業事情 3前 農林業のための基礎数学 1前 農林業のための生物学 1前 農林業のための化学 1前 農林業のための物理学 1後 農林業のための統計学 1後 農林業のための地学 2前 分子生物学 1後 農業気象学 2前 生命科学 3前 情報処理基礎 1前 情報処理応用 2後
	生産理論(栽培)	栽培学 1後 植物生理生態学 1後 作物学 2前 園芸学 2前 植物病理学 2前 応用昆虫学 2後 肥料・植物栄養学 2前 野菜園芸学 2後 果樹園芸学 2後 花き園芸学 2後 植物遺伝育種学概論 2後 土壌学 2後 環境保全型農業論 3前		生産理論(栽培)	栽培学 1前 植物生理生態学 1前 作物学 1後 園芸学 1後 植物病理学 2前 応用昆虫学 2前 肥料・植物栄養学 2後 野菜園芸学 3前 果樹園芸学 3前 花き園芸学 3前

新			旧										
(2 ページ)			(2 ページ)										
科目区分	授業科目の名称	配当年次	科目区分	授業科目の名称	配当年次								
② 職業専門科目	生産理論 (林業)	森林計画・政策論	2前	生産理論 (林業)	森林計画・政策論	1前							
		造林学	2前		造林学	1前							
		樹木・組織学	1後		樹木・組織学	1後							
		森林土木学	2前		森林土木学	2前							
		木質科学概論	2後		木質科学概論	2前							
		木材生産システム	2後		木材生産システム論	2後							
	生産理論 (畜産)	森林マネジメント	3前	共通 抜付 林業 通業	植物遺伝育種学概論	1後							
		畜産概論	1後		土壌学	2後							
		飼料総論	2前	生産理論 (畜産)	畜産概論	1前							
		家畜生理解剖学	2前		飼料総論	1前							
		家畜育種繁殖学	2後		家畜生理解剖学	1後							
		家畜飼養学	2前		家畜育種繁殖学	1後							
		畜産法規	2前		家畜飼養学	1後							
	人工授精論	2前	畜産法規		2前								
	自給飼料	2後	人工授精論	2前									
家畜衛生学	2後	自給飼料	2後										
家畜福祉学	2後	家畜衛生学	2後										
畜産環境学	3前	家畜福祉学	2後										
生産理論 [共通]	農林業のための先端技術	3前	共通	農林業のための先端技術	3前								
経営管理	簿記基礎 簿記応用 フードシステム論 法と農業経営 経営管理論 農林業経営学 経営戦略 マーケティング論 財務会計 管理会計 農林業の経営組織論 労務管理 人材マネジメント 知的財産権 農と食の起業論 経営実習Ⅰ 経営実習Ⅱ	1前 1後 1後 2前 2前 1後 2前 2後 2前 3前 3前 2後 3前 3後 3後 4前 4後	② 職業専門科目	簿記基礎 簿記応用 農と食の経済学 法と農業経営 経営管理論 農林業経営学 経営戦略Ⅰ 経営戦略Ⅱ マーケティング論 財務会計 管理会計 経営組織論 労務管理 人材マネジメント 協同組合論 知的財産権 農と食の起業論	1前 1後 1前 1後 1後 2前 2後 3前 2前 2後 3前 2前 3前 3後 3後 3前 3前 3後 3後								
		加工・流通・販売			食品科学 食品加工学 収穫後生理学 木材利用・流通論 木材加工学 食品流通論 販売管理論 農と食の健康論 6次産業化実践論 食品加工実習 木材加工実習 販売実習	2前 2後 3前 2前 2後 3前 3前 2後 3後 3前 3前 3後	加工・流通・販売	食品化学 食品衛生学 食品加工学 収穫後生理学 アグリフードシステム論 木材利用論 木材加工学 食品流通論 木材流通論 販売管理論 6次産業化実践論	2前 2前 2後 3後 2後 2前 2後 3前 3前 3前 3後				
						生産技術			総合実習 圃場実習(栽培) 圃場実習(畜産) 演習林実習 生産マネジメント実習Ⅰ(栽培) 生産マネジメント実習Ⅰ(畜産) 生産マネジメント実習Ⅰ(林業) 生産マネジメント実習Ⅱ(栽培) 生産マネジメント実習Ⅱ(畜産) 生産マネジメント実習Ⅱ(林業)	1通 2前 2前 2前 2後 2後 2後 3通 3通 3通	実習・演習	総合実習 圃場実習(栽培) 圃場実習(畜産) 演習林実習 生産マネジメント実習Ⅰ(栽培) 生産マネジメント実習Ⅰ(畜産) 生産マネジメント実習Ⅰ(林業) 生産マネジメント実習Ⅱ(栽培) 生産マネジメント実習Ⅱ(畜産) 生産マネジメント実習Ⅱ(林業)	1前 1後 1後 1後 2通 2通 2通 3通 3通 3通

新				旧				
(3 ページ)				(3 ページ)				
科目区分	授業科目の名称		配当年次	科目区分	授業科目の名称		配当年次	
③ 展開科目	農山村の文化の継承・ 農山村の地域社会	農山村田園地域公共学	1後	共通	農山村田園地域公共学		1後	
		農村景域論	3前		環境保全	環境と農林業		2前
		農と食の哲学	2前	環境保全型農業論		4前		
		食文化論	2後	森林マネジメント論		4前		
		在来作物学	3前	畜産環境学		4前		
				農村景域論		3前		
	農山村の地域社会	農村社会論	2前	③ 展開科目	農山村振興	農村社会論		2前
		農山村デザイン演習	3前			農山村デザイン演習		2前
		医福食農連携論	2後			農と食の哲学		2前
		グリーン・ツーリズム論	3前			農と食の健康論		2後
コミュニティビジネス論		3後	医福食農連携論			2後		
小計(10科目)			-			グリーン・ツーリズム論		3前
④ 総合科目	経営分析演習Ⅰ		4前			食文化論		2後
	経営分析演習Ⅱ		4後			コミュニティビジネス論		3前
	プロジェクト研究		4通			在来作物学		3前
	小計(3科目)		-			野生鳥獣管理・利用論		3前
合計(126科目)			-	小計(16科目)			-	
				④ 総合科目	経営実習Ⅰ		4前	
					経営実習Ⅱ		4後	
					経営分析演習Ⅰ		4前	
					経営分析演習Ⅱ		4後	
					プロジェクト研究Ⅰ		3後	
					プロジェクト研究Ⅱ		4通	
					小計(6科目)		-	
				合計(134科目)			-	
(卒業要件及び履修方法)				(卒業要件及び履修方法)				
<卒業要件>				<卒業要件>				
基礎科目より 20 単位以上、職業専門科目より 85 単位以上、展開科目より 20 単位、総合科目 4 単位を修得し、合計 129 単位以上とする。				基礎科目より 20 単位以上、職業専門科目より 62 単位以上、展開科目より 20 単位以上、総合科目 22 単位以上を修得し、合計 124 単位以上とする。				
(基礎科目) 必修科目と、英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語Ⅲ、英語Ⅳから 4 単位を含む 20 単位以上				(基礎科目) 必修科目を含む 20 単位以上				
(職業専門科目) 85 単位以上				(職業専門科目) 62 単位以上				
■「農林業基礎」 必修を含む 10 単位以上				○「農林業基礎」から必修 10 単位				
■「生産理論」 コースを選択し、必修科目、 選択必修、コース必修を含む 16 単位以上				○「生産理論(栽培)」、「生産理論(林業)」、 「生産理論(畜産)」のいずれから主たる分野				

新	旧
<p>○<u>選択必修：栽培学、植物生理生態学、樹木・組織学、畜産概論</u></p> <p>◎<u>栽培コース必修：肥料・植物栄養学、植物病理学、応用昆虫学、環境保全型農業論</u></p> <p>・<u>栽培コース必修に加え、作物学もしくは園芸学から2単位、植物遺伝育種学概論、土壌学、野菜園芸学、花き園芸学、果樹園芸学から2単位を選択</u></p> <p>◎<u>林業コース必修：森林計画・政策論、造林学、森林土木学、木質科学概論、木材生産システム、森林マネジメント</u></p> <p>◎<u>畜産コース必修：飼料総論、家畜生理解剖学、家畜育種繁殖学、家畜飼養学、家畜衛生学、畜産環境学</u></p> <p>■<u>「生産技術」</u></p> <p><u>生産理論科目群と同じコースを選択し、栽培コースと畜産コースは必修科目とコース必修を含む26単位以上、林業コースは必修科目とコース必修を含む28単位以上</u></p> <p>◎<u>栽培コース必修：圃場実習（栽培）、生産マネジメント実習Ⅰ（栽培）、生産マネジメント実習Ⅱ（栽培）</u></p> <p>◎<u>林業コース必修：演習林実習、生産マネジメント実習Ⅰ（林業）、生産マネジメント実習Ⅱ（林業）、林業機械実習</u></p> <p>◎<u>畜産コース必修：圃場実習（畜産）、生産マネジメント実習Ⅰ（畜産）、生産マネジメント実習Ⅱ（畜産）</u></p> <p>■<u>「加工・流通・販売」</u></p> <p><u>生産理論科目群と同じコースを選択し、栽培コースと畜産コースはコース必修を含む8単位以上、林業コースはコース必修を含む6単位以上</u></p> <p>◎<u>栽培コース必修：販売管理論、販売実習</u></p> <p>◎<u>林業コース必修：木材利用・流通論、木材加工学、木材加工実習</u></p> <p>◎<u>畜産コース必修：販売管理論、販売実習</u></p> <p>■<u>「経営管理」</u></p>	<p><u>を選択し、その分野からの選択必修を含む4単位以上</u></p> <p>・<u>「生産理論（栽培）」の選択必修：「肥料・植物栄養学」、「土壌学」</u></p> <p>・<u>「生産理論（林業）」の選択必修：「木質科学概論」、「木材生産システム論」</u></p> <p>・<u>「生産理論（畜産）」の選択必修：「人工授精論」、「家畜衛生学」</u></p> <p>○<u>農林業のための先端技術2単位</u></p> <p>○<u>「経営管理」から必修10単位を含む12単位以上</u></p> <p>○<u>「加工・流通・販売」から4単位以上</u></p> <p>○<u>「実習・演習」は総合実習と企業実習を含む30単位以上</u></p>

新	旧
<u>必修科目を含む 25 単位以上</u> (展開科目) <u>必修科目 20 単位</u> (総合科目) 必修科目 <u>4 単位</u> (履修科目の登録の上限：45 単位 (年間))	(展開科目) <u>必修 2 単位を含む 20 単位以上</u> (総合科目) 必修 <u>22 単位</u> (履修科目の登録の上限：45 単位 (年間))

(新旧対照表) 授業科目の概要

新	(14 ページ)				
	<table border="1"> <tr> <td>経営管理論</td> <td> <p>農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、<u>経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、経営管理の基礎理論や法人組織等における必要性が高い、経営組織、経営戦略、技術経営など、経営組織の基礎理論を、ケーススタディに基づき理解 (ベンチ・マーキング的) する。</u></p> </td> <td></td> </tr> </table>	経営管理論	<p>農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、<u>経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、経営管理の基礎理論や法人組織等における必要性が高い、経営組織、経営戦略、技術経営など、経営組織の基礎理論を、ケーススタディに基づき理解 (ベンチ・マーキング的) する。</u></p>		
経営管理論	<p>農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、<u>経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、経営管理の基礎理論や法人組織等における必要性が高い、経営組織、経営戦略、技術経営など、経営組織の基礎理論を、ケーススタディに基づき理解 (ベンチ・マーキング的) する。</u></p>				
旧	(13 ページ)				
	<table border="1"> <tr> <td>経営管理論</td> <td> <p>(概要) 農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、<u>経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営管理の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、人間関係論、動機づけ理論、リーダーシップ論など経営組織の基礎理論を理解した上で、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行い、経営管理に必要な能力を身につける。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5 天野哲郎/5回) 農林業経営体におけるケーススタディ (6 菊地宏之/10回) 経営管理の基礎理論</p> </td> <td>オムニバス方式</td> </tr> </table>	経営管理論	<p>(概要) 農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、<u>経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営管理の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、人間関係論、動機づけ理論、リーダーシップ論など経営組織の基礎理論を理解した上で、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行い、経営管理に必要な能力を身につける。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5 天野哲郎/5回) 農林業経営体におけるケーススタディ (6 菊地宏之/10回) 経営管理の基礎理論</p>	オムニバス方式	
経営管理論	<p>(概要) 農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、<u>経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営管理の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、人間関係論、動機づけ理論、リーダーシップ論など経営組織の基礎理論を理解した上で、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行い、経営管理に必要な能力を身につける。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5 天野哲郎/5回) 農林業経営体におけるケーススタディ (6 菊地宏之/10回) 経営管理の基礎理論</p>	オムニバス方式			

新	<p>(14 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="284 230 539 683"> <p>農林業経営学</p> </td> <td data-bbox="539 230 1182 683"> <p>(概要) 農林業の経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に達成し生産や販売の成果をあげるためには、経営の合理的な仕組を構築し、<u>堅実な経営計画を策定するとともに、進捗状況にあわせてそれらを適正にコントロールする経営管理が必要である。</u>本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。<u>また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行う。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5) 天野哲郎/12回) 農林業経営の基礎理論、経営管理の基礎理論、ケースメソッド (17) 大石竜/1回) ケース・メソッド 野菜経営 (26) 小林信一/1回) ケース・メソッド 畜産経営 (27) 近藤晃/1回) ケース・メソッド 林業経営と森林管理</p> </td> <td data-bbox="1182 230 1362 683"> <p>オムニバス方式</p> </td> </tr> </table>	<p>農林業経営学</p>	<p>(概要) 農林業の経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に達成し生産や販売の成果をあげるためには、経営の合理的な仕組を構築し、<u>堅実な経営計画を策定するとともに、進捗状況にあわせてそれらを適正にコントロールする経営管理が必要である。</u>本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。<u>また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行う。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5) 天野哲郎/12回) 農林業経営の基礎理論、経営管理の基礎理論、ケースメソッド (17) 大石竜/1回) ケース・メソッド 野菜経営 (26) 小林信一/1回) ケース・メソッド 畜産経営 (27) 近藤晃/1回) ケース・メソッド 林業経営と森林管理</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>農林業経営学</p>	<p>(概要) 農林業の経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に達成し生産や販売の成果をあげるためには、経営の合理的な仕組を構築し、<u>堅実な経営計画を策定するとともに、進捗状況にあわせてそれらを適正にコントロールする経営管理が必要である。</u>本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。<u>また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行う。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5) 天野哲郎/12回) 農林業経営の基礎理論、経営管理の基礎理論、ケースメソッド (17) 大石竜/1回) ケース・メソッド 野菜経営 (26) 小林信一/1回) ケース・メソッド 畜産経営 (27) 近藤晃/1回) ケース・メソッド 林業経営と森林管理</p>	<p>オムニバス方式</p>		
旧	<p>(13 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="261 757 533 1261"> <p>農林業経営学</p> </td> <td data-bbox="533 757 1198 1261"> <p>(概要) 農林業経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営や管理の合理的な仕組を構築し、<u>堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。</u>本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。<u>また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行って、経営管理に必要な能力を身につける。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5) 天野哲郎/7回) 農林業における経営管理と技術 (17) 大石竜/2回) ケーススタディ：農業経営体の現状と課題 (28) 小林信一/2回) ケーススタディ：畜産経営体の現状と課題 (30) 近藤晃/2回) ケーススタディ：林業経営体の現状と課題 (40) 青山東一/2回) ケーススタディ：畜産経営体の事業継承・独立</p> </td> <td data-bbox="1198 757 1385 1261"> <p>オムニバス方式</p> </td> </tr> </table>	<p>農林業経営学</p>	<p>(概要) 農林業経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営や管理の合理的な仕組を構築し、<u>堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。</u>本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。<u>また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行って、経営管理に必要な能力を身につける。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5) 天野哲郎/7回) 農林業における経営管理と技術 (17) 大石竜/2回) ケーススタディ：農業経営体の現状と課題 (28) 小林信一/2回) ケーススタディ：畜産経営体の現状と課題 (30) 近藤晃/2回) ケーススタディ：林業経営体の現状と課題 (40) 青山東一/2回) ケーススタディ：畜産経営体の事業継承・独立</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>農林業経営学</p>	<p>(概要) 農林業経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営や管理の合理的な仕組を構築し、<u>堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。</u>本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。<u>また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行って、経営管理に必要な能力を身につける。</u></p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5) 天野哲郎/7回) 農林業における経営管理と技術 (17) 大石竜/2回) ケーススタディ：農業経営体の現状と課題 (28) 小林信一/2回) ケーススタディ：畜産経営体の現状と課題 (30) 近藤晃/2回) ケーススタディ：林業経営体の現状と課題 (40) 青山東一/2回) ケーススタディ：畜産経営体の事業継承・独立</p>	<p>オムニバス方式</p>		

(新旧対象表) シラバス

(新) 48 ページ

授業名 経営管理論 Business Management		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	菊池宏之
授業時間	月曜日 4時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営の合理的な仕組を構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。また、法人組織等における必要性が高い、経営組織、経営戦略、技術経営など、経営組織の基礎理論を、ケーススタディに基づき理解（ベンチ・マーキング的）にする。		
授業目的・目標	経営管理の基礎理論を理解し、ケーススタディを通じて経営管理に必要な能力を身につける。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	ガイダンス（産業社会の発展と企業の役割）	
	2	経済メカニズムと会社法	
	3	米国の経営管理論の変遷	
	4	経営組織論①（人間関係論と意思決定）	
	5	経営組織論②（リーダー）	
	6	経営戦略論①（経営戦略、競争戦略）	
	7	経営戦略論②（企業戦略、事業戦略）	
	8	経営戦略論①（アウトソーシング）	
	9	経営戦略論②（マーケティング）	
	10	技術経営論①（製品開発、品質経営）	
	11	技術経営論②（イノベーション、イノベーションの普及）	
	12	ケース・メソッドの特徴と方法及び、市場消滅からの経営革新の富士フィルム	
	13	市場縮小市場の復活の経営革新（ハウス食品）	
	14	消費者の構造変化に対応する経営革新（地域食品スーパー）	
15	新規市場開拓の経営革新（龍角散）		
キーワード	人間関係論、動機づけ理論、リーダーシップ論、古典派管理論		
教科書・参考書	『現代経営入門』（有斐閣ブックス）、野中郁次郎（1980）『経営管理』日経文庫		
評価方法・評価基準	試験（50%）、課題・レポート（40%）、履修態度（10%）		
関連科目	フードシステム論、マーケティング論、食品流通論		
履修要件	特になし		
備考	新聞・雑誌・ネットニュース等で、企業経営に関する情報を収集し、問題を整理しておくこと。各回、教科書主体で約90分の事前学習及び、講義ノートを見直しての約90分の事後学習を要します。		

授業名 経営管理論 (英名) Case Study of Farm Management Activities		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	1年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	天野哲郎、菊池宏之
授業時間	月曜日 4時限	教室	講義室3
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営や管理の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。また、法人組織等において求められる人間関係論、動機づけ理論、リーダーシップ論など経営組織の基礎理論を、ケーススタディに基づき理解する。		
授業目的・目標	経営管理の基礎理論を理解し、ケーススタディを通じて経営管理に必要な能力を身につける。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	ガイダンスー経営管理論を如何に学ぶかー	
	2	近代産業社会の発展	
	3	産業社会の中心をなす企業の役割	
	4	経済メカニズムと会社法	
	5	米国の経営管理論の変遷	
	6	古典派管理論	
	7	人間関係論	
	8	動機付け理論	
	9	現代経営組織論	
	10	リーダーシップ論	
	11	ケース・メソッドの特徴と方法	
	12	畑作経営における規模拡大戦略と多角化戦略展開のケース（北海道）	
	13	花き経営における高品質化による販売戦略の展開のケース（神奈川県）	
	14	低投入戦略典型によるマイペース型酪農のケース（北海道）	
15	大規模水田作経営の組織化戦略と地域農業展開のケース（静岡県）		
キーワード	ケース・メソッド、人間関係論、動機づけ理論、リーダーシップ論、古典派管理論		
教科書・参考書	家族農業経営の底力、2003年、金沢夏樹・松木洋一・木村伸男編、農林統計協会、高橋・丹沢・花枝・三浦著（2011）『現代経営入門』（有斐閣ブックス）、野中郁次郎（1980）『経営管理』日経文庫		
評価方法・評価基準	試験（50%）、課題・レポート（40%）、履修態度（10%）		
関連科目	農と食の経済学、マーケティング論、農林業経営学、食品流通論、アグリフードシステム論		
履修要件	特になし		
備考	新聞・雑誌・ネットニュース等で、企業経営に関する情報を収集し、問題を整理しておくこと。各回、教科書主体で約90分の事前学習及び、講義ノートを見直しての約90分の事後学習を要します。		

授業名 農林業経営学 Case Study of Farm Management Activities		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	1年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	天野哲郎、大石竜、小林信一、近藤晃
授業時間	月曜日3時限	教室	講義室3
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	<p>農林業の経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に達成し生産や販売の成果をあげるためには、経営の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定するとともに進捗状況にあわせてそれらを適正にコントロールする経営管理が必要である。本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行う。</p>		
授業目的・目標	農業経営学の基礎理論、一般経営学における経営管理論や経営組織論などの理論を理解、経営管理に必要な能力を身につける。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	農林業経営学の概要と授業の進め方 (天野哲郎)	
	2	農業林業経営の動向 (天野哲郎)	
	3	農業経営の主体と組織 (農業組織論) (天野哲郎)	
	4	農業経営をめぐる情報とマーケティング (農業情報論、農産物市場論) (天野哲郎)	
	5	農業経営の管理運営と設計 (農業経営管理論、農業経営計画論) (天野哲郎)	
	6	意思決定論に基づく農業経営計画・経営管理 (天野哲郎)	
	7	経営組織論の農業への応用 (天野哲郎)	
	8	ケース・メソッドの特徴と方法 (天野哲郎)	
	9	畑作経営における規模拡大戦略と多角化戦略展開のケース (北海道) (天野哲郎)	
	10	花き経営における高品質化による販売戦略の展開のケース (神奈川県)	
	11	低投入戦略典型によるマイペース型酪農のケース (北海道) (天野哲郎)	
	12	大規模水田作経営の組織化戦略と地域農業展開のケース (静岡県) (天野哲郎)	
	13	ケース・メソッド 野菜経営 (大石竜)	
	14	ケース・メソッド 畜産経営 (小林信一)	
15	ケース・メソッド 林業経営と森林管理 (近藤晃)		
キーワード	ケース・メソッド、人間関係論、動機づけ理論、リーダーシップ論、古典派管理論		
教科書・参考書	<p>・資料を適宜配布する。 参考書：「農業経営概論」(2016)大泉一貫・津谷好人・木下幸雄ほか(実教出版)、「家族農業経営の底力」(2003)金沢夏樹・松木洋一・木村伸男編(農林統計協会)、「現代経営入門」(2011)高橋・丹沢・花枝・三浦著(有斐閣ブックス)、「経営管理」(1980)野中郁次郎(日経文庫)</p>		
評価方法・評価基準	試験(50%)、課題・レポート(40%)、履修態度(10%)		
関連科目	マーケティング論、食品流通論、フードシステム論		
履修要件	特になし		
備考			

授業名 農林業経営学 Theory of Farm and Forest Management		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	天野哲郎、大石竜、小林信一、青山東一、近藤晃
授業時間	月曜日 4時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	農林業経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営や管理の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行う。		
授業目的・目標	農業経営学の基礎理論、一般経営学における経営管理論や経営組織論などの理論を理解、経営管理に必要な能力を身につける。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	農林業経営学の概要と授業の進め方。	
	2	農業林業経営の動向	
	3	農業経営の主体と組織（農業組織論）	
	4	農業経営をめぐる情報とマーケティング（農業情報論、農産物市場論）	
	5	農業経営の管理運営と設計（農業経営管理論、農業経営計画論）	
	6	意思決定論に基づく農業経営計画・経営管理	
	7	経営組織論の農業への応用	
	8	畜産経営体の事業継承	
	9	畜産経営体の独立	
	10	静岡県の農業経営体（野菜）の現状	
	11	農業経営体（野菜）の経営課題と解決に向けた取組事例	
	12	畜産経営体の現状と課題①	
	13	畜産経営体の現状と課題②	
	14	林業経営体の現状と課題①	
15	林業経営体の現状と課題②		
キーワード	農業経営管理論、農業経営計画論、意思決定論、経営組織論		
教科書・参考書	教科書：農業経営概論、2016年、大泉一貫・津谷好人・木下幸雄ほか、実教出版		
評価方法・評価基準	レポート（60％）、履修態度（40％）。		
関連科目	法と農林業経営、経営管理論、経営戦略Ⅰ、経営戦略Ⅱ		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

新	旧
<p>4 教育課程の編成の考え方及び特色 (略)</p> <p>(2) 基礎科目</p> <p>基礎科目は、<u>専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養</u>を育成するための科目を配置する。「一般教養」科目群と「コミュニケーション・スキル」科目群の2科目群から構成する。</p> <p>①一般教養の科目群</p> <p>一般教養の科目は <u>13 科目を配置する。</u>このうち、<u>各界のトップランナーの講話を基に静岡県</u>の農林業のあり方や発展に向けた解決策について考える「静岡学」、<u>ミクロ経済学の基本概念やマクロ経済学の基礎を学ぶ「経済学概論」、現代において不可欠な情報処理能力を身につける「情報処理基礎」及び「情報処理応用」</u>を必修科目として配置する。また、<u>法の基本を理解し、法学の基本概念を習得する「法学概論」、現代の課題を歴史的な観点から考える「歴史学概論」、</u>「文明論」、自然科学的な思考と文学的想像力との結びつきについて考察する「文学概論」、日本文化について学ぶ「茶道」、「華道」、コミュニティについて学ぶ「社会学概論」、政治的なものの見方や基礎的な概念を身につける「政治学概論」、<u>統計学の基本的な知識やデータ解析手法を学ぶ「統計学」</u>を選択科目として配置する。</p> <p>②コミュニケーション・スキルの科目群</p>	<p>4 教育課程の編成の考え方及び特色 (略)</p> <p>(2) 基礎科目</p> <p>基礎科目は、<u>豊かな人間性を育み生涯にわたり自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するための科目を配置する。</u>「一般教養」科目群と「コミュニケーション・スキル」科目群の2科目群から構成し、<u>4年間を通じて専門分野にとらわれない幅広い知識と価値観の違いや多様性などを理解し多面的に物事を考える素養を育成することを目的とした科目を配置する。</u></p> <p>①一般教養の科目群</p> <p>一般教養の科目のうち、<u>静岡県の産業について学び今後の産業界全体について考える「静岡学」と、社会科学系の基礎知識として不可欠な「経済学概論」、「法学概論」</u>を必修科目として配置する。また、現代の課題を歴史的な観点から考える「歴史学概論」、「文明論」、自然科学的な思考と文学的想像力との結びつきについて考察する「文学概論」、日本文化について学ぶ「茶道」、「華道」、コミュニティについて学ぶ「社会学概論」、政治的なものの見方や基礎的な概念を身につける「政治学概論」を選択科目として配置する。</p> <p>②コミュニケーション・スキルの科目群</p>

新	旧
<p>コミュニケーション・スキル科目群として、<u>7科目を配置する。</u>コミュニケーション能力や表現力の向上を目的とした「コミュニケーション論」を必修科目として配置する。また、英語の「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能を高める「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」技能に加えディスカッション能力を養う「英語Ⅲ」、プレゼンテーション能力を養う「英語Ⅳ」を選択科目として配置し、<u>学生が自分の能力に合わせて選択できるようにする。</u></p> <p>また、人体と健康について学び、生涯健康に生活することの基本を学ぶ、「保健体育Ⅰ」を必修科目として、また、団体競技を扱う「保健体育Ⅱ」を選択科目として配置する。</p> <p>(3) 職業専門科目</p> <p><u>農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識や、農林業経営体の大規模化や経営の多角化等に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識を習得するための授業科目を配置する。</u>農林業に関する<u>基礎的な知識を学ぶ科目を農林業基礎の科目群へ、</u>企業的な<u>経営管理や経営戦略について学ぶ科目を経営管理の科目群に配置する。</u>また、農林業生産に関する基礎的な理論や技術を学ぶ科目を生産理論及び生産技術の科目群へ、加工・販売の手法や流通の仕組みなどを学ぶ科目を加工・流通・販売の科目群に配置する。<u>職業専門科目では、農林業基礎及び経営管理の科目群は、全学生が共通で学ぶが、生産理論、生産技術、加工・流通・販売の科目群は、栽培コース、林業コース、畜産</u></p>	<p>コミュニケーション・スキル科目群として、コミュニケーション能力や表現力の向上を目的とした「コミュニケーション論」を必修科目として配置する。また、英語の「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能を高める「英語Ⅰ」及び「英語Ⅱ」を必修科目として配置する。<u>この英語の4技能に加えディスカッション能力を養う「英語Ⅲ」、プレゼンテーション能力を養う「英語Ⅳ」を選択科目として配置する。</u></p> <p>また、人体と健康について学び、生涯健康に生活することの基本を学ぶ、「保健体育Ⅰ」を必修科目として、また、団体競技を扱う「保健体育Ⅱ」を選択科目として配置する。</p> <p>(3) 職業専門科目</p> <p>農林業において必要とされる理論的かつ実践的な能力及び農林業全般にわたり必要な能力を育成するための授業科目を配置する。<u>農林業生産を行うための基礎的な知識・技術を学ぶための能力、先端技術への対応力を学ぶ「農林業基礎」科目群及び「生産理論」科目群、農林業経営を行うための加工・流通・販売の知識や経営管理能力を学ぶ「経営管理」科目群及び「加工・流通・販売」科目群、農林業生産及び経営の実験・実習・演習を通じて身につく、自主的・継続的に学習を進める能力、他者と協調し事業を推進できる能力を養う「実習・演習」科目群の5つの科目群を配置する。</u></p>

新	旧
<p data-bbox="220 226 671 257"><u>コースの3コースに分かれて学ぶ。</u></p> <p data-bbox="220 320 504 351">①農林業基礎の科目群</p> <p data-bbox="245 367 783 544"><u>農林業基礎の科目群は、農林業に関する基礎的な知識、農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産を学ぶ科目群であり、17科目を配置する。</u></p> <p data-bbox="245 560 783 1070"><u>日本の農林業の現状を把握し持続的な社会を構築するために現代の農学は何ができるかを考える「農学概論」、農林業が環境保全へ果たしてきた役割や森林のもつ景観形成の機能、農林業が引き起こす環境問題と対策、森林が持つ景観形成機能について学ぶ「環境と農林業」、農林業の発展や倫理的な課題について考える「技術者倫理」を必修科目として配置する。これらの3科目では、自然環境の保全について取り上げる。</u></p> <p data-bbox="245 1086 783 1980"><u>また、農林業の歴史の変遷を学ぶ「農林業史」、農業・食料関連政策や森林・林業政策について学ぶ「農林業政策」、県内や県外、海外の農林業経営体等の現状を学ぶ「県内農林業事情」、「県外農林業事情」、「海外農林業事情」、生命現象を分子レベルで考察するために必要な知識を修得する「分子生物学」、農林業における気象災害とその対策について学ぶ「農業気象学」、生命科学の基本を学ぶ「生命科学」、野生鳥獣対策の現状と課題などについて学ぶ「野生鳥獣管理・利用論」を選択科目として配置する。さらに、農林業についての学びを深めるにあたっては理数科目の基礎知識が不可欠であるため、「農林業のための基礎数学」、「農林業のための生物学」、「農林業のための化学」、「農林業のための物理学」、「農林業のための地学」を自由科目として配置する。</u></p>	<p data-bbox="837 320 1121 351">①農林業基礎の科目群</p> <p data-bbox="863 367 1401 495"><u>農林業基礎の科目群は、農林業に関する基礎的な知識の修得を目的とする科目群である。</u></p> <p data-bbox="863 510 1401 1547"><u>日本の農林業の現状を把握し持続的な社会を構築するために現代の農学は何ができるかを考える「農学概論」、農業・食料関連政策や森林・林業政策について学ぶ「農林業政策」、農林業の発展や倫理的な課題について考える「技術者倫理」、生命現象を分子レベルで考察するために必要な知識を修得する「分子生物学」、現代における情報処理能力を身につける「情報処理基礎」及び「情報処理応用」を必修科目として配置する。また、農林業の歴史の変遷を学ぶ「農林業史」、県内や県外、海外の農林業経営体等の現状を学ぶ「県内農林業事情」、「県外農林業事情」、「海外農林業事情」、さらに、農林業についての学びを深めるにあたっては理数科目の基礎知識が不可欠であるため、「農林業のための基礎数学」、「農林業のための生物学」、「農林業のための化学」、「農林業のための物理学」、「農林業のための統計学」、「農林業のための地学」、「農業気象学」、「生命科学」を選択科目として配置する。</u></p>

新	旧
<p>②生産理論の科目群</p> <p>生産理論の科目群は、<u>農林業生産に関する基礎的な理論、農山村の自然環境や景観の保全に配慮した農林業生産、農林業生産に活用される先端技術を学ぶ科目群である。生産技術の裏づけとなる生産理論について、体系的に学ぶ科目配置とし、生産技術の科目群との関連を意識した構成とした。</u></p> <p>生産理論の科目群は、<u>共通科目とコース別の科目に分かれている。コースは、栽培コース、林業コース、畜産コースの3コースを設け、このうち1コースを選択し、各コースそれぞれの農林業分野での実践力を修得させるために深く関係する科目をコース必修とする。</u></p> <p>ア 共通</p> <p>コース選択の参考とする導入的な科目として、「栽培学」、「植物生理生態学」、「樹木・組織学」、「畜産概論」を選択科目として配置する。なお、「栽培学」、「樹木・組織学」、「畜産概論」の授業の中で、<u>自然環境の保全について取り上げる。また、農林業の生産や経営に関連する先端技術について学ぶ「農林業のための先端技術」を必修科目として配置する。</u></p> <p>イ 栽培コース</p> <p>栽培コースの生産理論科目群として、<u>11科目を配置する。栽培技術を学ぶ上で、植物栄養や病害虫、栽培体系、環境保全型農業の知識は不可欠である。このため、植物の特性や植物生産の代謝、養分機能、栄養特性と肥料について学ぶ「肥料・植物栄養学」、病害虫の種類や特長について学ぶ「植物病理学」及び「応</u></p>	<p>②生産理論の科目群</p> <p>生産理論の科目群は <u>29科目を配置し、農林業の先端技術について学ぶ「農林業のための先端技術」を必修とし、その他の科目を選択科目とする。生産技術の裏づけとなる生産理論について、体系的に学ぶ科目配置とし、実習との関連を意識した構成とした。</u></p> <p>生産理論の科目群では、<u>それぞれの農林業分野での実践力を修得させるため、栽培分野、林業分野、畜産分野の3つの分野を設け、いずれかの分野を1つ選択し、各分野に深く関係する科目を選択必修とする。</u></p> <p>栽培分野は <u>10科目を配置し、「肥料・植物栄養学」と「土壌学」を選択必修とする。</u></p> <p>林業分野は <u>6科目配置し、「木質科学概論」、「木材生産システム論」を選択必修とする。</u></p> <p>また、栽培分野と林業分野の共通科目として、「植物遺伝育種学概論」及び「土壌学」の <u>2科目を配置する。</u></p> <p>畜産分野は <u>10科目を配置し、「人工授精論」、「家畜衛生学」を選択必修とする。</u></p> <p>(追加)</p>

新	旧
<p>用昆虫学」、環境に配慮した農業を学ぶ「環境保全型農業論」をコース必修として配置する。また、栽培体系及び先端技術を学ぶ科目として、水稻や茶の栽培体系や精密農業について学ぶ「作物学」、野菜や花き、果樹の栽培体系や栽培施設の環境制御について総合的に学ぶ「園芸学」を配置し、いずれかを選択する。これらの2科目は栽培に関する先端技術を学ぶ科目である。さらに知識を深める科目として、土壌診断や土づくりについて学ぶ「土壌学」、野菜栽培の基礎知識を学ぶ「野菜園芸学」、果樹栽培の基礎知識を学ぶ「果樹園芸学」、花き栽培の基礎知識を学ぶ「花き園芸学」を選択科目として配置する。なお、これらの10科目の授業の中で、自然環境の保全について取り上げる。</p> <p>また、植物の遺伝の仕組みや育種技術について学ぶ「植物遺伝育種学概論」を選択科目として配置する。</p> <p>ウ 林業コース</p> <p>林業コースの生産理論科目群として6科目を配置する。林業技術を学ぶ上で、森林調査や造林、治山、収穫技術の知識が不可欠である。このため、森林政策の歴史や関連法、森林調査の基礎、森林情報システムについて学ぶ「森林計画・政策論」、林業機械を用いた木材生産や作業システムについて学ぶ「木材生産システム」をコース必修として配置する。これら2科目は、林業における先端技術について学ぶ科目である。</p> <p>また、森林づくりの目的・方法、施工技術、森林景観について学ぶ「造林学」、治山・砂防や林業土木、森林・植生がもつ環境保全や景観形成の機能について学</p>	

新	旧
<p>ぶ「<u>森林土木学</u>」、<u>木質バイオマスについて学ぶ「木質科学概論</u>」<u>森林計画制度や森林保護の視点を備えた持続的林業経営や森林認証制度について学ぶ「森林マネジメント</u>」をコース必修として配置する。</p> <p>なお、「<u>森林計画・政策論</u>」、「<u>造林学</u>」、「<u>森林マネジメント</u>」では、授業のなかで<u>自然環境保全について取り上げる</u>。さらに、「<u>造林学</u>」及び「<u>森林土木学</u>」では<u>森林景観の保全について取り上げる</u>。</p> <p>エ 畜産コース</p> <p><u>畜産コースの生産理論科目群として10科目を配置する</u>。<u>飼育技術を学ぶ上で、家畜の生理・生態、栄養と飼料、育種や繁殖の知識、また、家畜ふん尿と環境問題の知識は不可欠である</u>。このため、<u>家畜栄養と飼料、飼料配合設計の基礎理論を学ぶ「飼料総論」、飼料消化性の違いや環境要因による変化やその対策、ICTを利用した家畜の管理法について学ぶ「家畜飼養学」、家畜の体の仕組みや各臓器の生理機能を学ぶ「家畜生理解剖学」、育種の基礎知識や繁殖に関わる知識を学ぶ「家畜育種繁殖学」、家畜衛生の一連の知識を学ぶ「家畜衛生学」、環境に配慮した畜産について学ぶ「畜産環境学」をコース必修として配置する</u>。なお、「<u>家畜飼養学</u>」の授業の中で<u>畜産分野での先端技術を、「畜産環境学」の中で自然環境の保全について取り上げる</u>。</p> <p>また、<u>畜産分野では家畜人工授精師が重要な資格となっているため、本資格を取得するために必要となる「畜産法規」や「人工授精論」を選択科目として配置する</u>。更に、<u>草地の特徴や管理方法について学ぶ「自給飼料」や、アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理が求められ</u></p>	

新	旧
<p>ようになってきているため、「<u>家畜福祉学</u>」を選択科目として配置する。</p> <p>③経営管理の科目群</p> <p>経営管理の科目群は、<u>企業的な経営管理や経営戦略について学ぶ科目群</u>である。17科目を配置し、<u>農林業経営を行うための経営管理能力を体系的に学ぶ科目構成</u>とする。</p> <p><u>農林業経営の基礎理論や経営管理の基礎理論について学ぶ「農林業経営学」、経営戦略に関する基礎理論や戦略策定に有効な分析手法について学ぶ「経営戦略」、マーケティングの基礎理論を学ぶ「マーケティング論」、企業の財務諸表の読み方や経営分析の手法について学ぶ「財務会計」、企業の利益管理や経営戦略と管理会計の関連について学ぶ「管理会計」、労働者の雇用の実務に必要な知識を学ぶ「労務管理」、農林業の経営について学ぶ臨地実務実習である「経営実習Ⅰ・Ⅱ」を必修科目として配置する。また、フードシステムの観点から現代の食料をめぐる実態と変動を理解する「フードシステム論」、農林業経営を取り巻く法令について学ぶ「法と農業経営」、経営管理や経営組織の基礎理論について学ぶ「経営管理論」、経営組織の理論の基礎知識や農業協同組合の理念や組織、事業展開等について学ぶ「農林業の経営組織論」、人的資源管理について学ぶ「人材マネジメント」、知的財産に係る法律について学ぶ「知的財産権」、農業や食品関連分野での起業について学ぶ「農と食の起業論」</u>を選択科目として配置する。さらに、経営管理の科目群に関する学びを深めるにあたっては<u>簿記の知識が不可欠であるため、「簿記基礎」、「簿記応用」を自由科目として配置する。</u></p>	<p>③経営管理の科目群</p> <p>経営管理の科目群は 17 科目を配置し、<u>農林業経営を行うための経営管理能力を体系的に学ぶ科目構成とする。</u></p> <p><u>農林業経営において特に重要である、農林業経営を取り巻く法令について学ぶ「法と農業経営」、経営管理の知識について学ぶ「経営管理論」、経営戦略の知識について学ぶ「経営戦略Ⅰ」、「マーケティング論」、「財務会計」、起業について学ぶ「農と食の起業論」</u>を必修科目として配置する。また、<u>農や食を取り巻く課題について学ぶ「農と食の経済学」や、企業会計について学ぶ「簿記基礎」、「簿記応用」、「管理会計」、人材や組織について学ぶ「経営組織論」、「労務管理」、「人材マネジメント」、「協同組合論」、農林業経営の現状と課題について学ぶ「農林業経営学」、知的財産に係る法律について学ぶ「知的財産権」</u>を選択科目として配置する。</p>

新	旧
<p>④加工・流通・販売の科目群</p> <p><u>加工・流通・販売の科目群は、加工販売の手法や流通の仕組み、農林業経営に活用される先端技術を学ぶ科目群であり、12科目を配置し、生産理論と同様に、3コースに分かれて学ぶ。</u></p> <p><u>ア 栽培コース</u></p> <p><u>販売管理の基礎理論やPOSシステムといった経営に活用される先端技術の知識を学ぶ「販売管理論」と、販売技術やPOSシステムの活用法について学ぶ「販売実習」をコース必修として配置する。また、食品成分や化学変化・貯蔵・衛生管理について学ぶ「食品科学」、農畜産物の栄養特性や嗜好性、保存性を向上させる加工技術を学ぶ「食品加工学」、豆類や野菜、果樹、乳製品、畜肉類などの加工を学ぶ「食品加工実習」、消費者に安全・安心な食品を安定的に届けるための流通システムについて学ぶ「食品流通論」、食品の機能性や健康について学ぶ「農と食の健康論」、園芸作物の品質保持技術・貯蔵方法・加工に関わる知識を学ぶ「収穫後生理学」、6次産業化の方向性や可能性について学ぶ「6次産業化実践論」を選択科目として配置する。</u></p> <p><u>イ 林業コース</u></p> <p><u>木材の様々な利用方法や流通・原木市場、IoTやICTを活用した木材流通について学ぶ「木材利用・流通論」、木材加工の基礎理論を学ぶ「木材加工学」、木工作品の製作を行う「木材加工実習」をコース必修として配置する。</u></p> <p><u>ウ 畜産コース</u></p>	<p>④加工・流通・販売の科目群</p> <p><u>加工・流通・販売の科目群は11科目を配置し、いずれも選択科目とする。実習・演習科目群と対応する科目構成とする。</u></p> <p>(追加)</p>

新	旧
<p>販売管理の基礎理論やPOSシステムといった経営に活用される先端技術の知識を学ぶ「販売管理論」と、販売技術やPOSシステムの活用法について学ぶ「販売実習」をコース必修として配置する。また、食品成分や化学変化・貯蔵・衛生管理について学ぶ「食品科学」、農畜産物の栄養特性や嗜好性、保存性を向上させる加工技術を学ぶ「食品加工学」、豆類や野菜、果樹、乳製品、畜肉類などの加工を学ぶ「食品加工実習」、消費者に安全・安心な食品を安定的に届けるための流通システムについて学ぶ「食品流通論」、食品の機能性や健康について学ぶ「農と食の健康論」、6次産業化の方向性や可能性について学ぶ「6次産業化実践論」を選択科目として配置する。</p> <p>⑤生産技術の科目群</p> <p>生産技術の科目群は、農林業生産に関する基礎的な技術や先端技術、農山村の自然環境の保全に配慮した生産を学ぶ科目群であり、15科目を配置し、共通科目と生産理論と同様の3コースに分かれて学ぶ科目からなる。</p> <p>ア 共通</p> <p>共通科目として4科目を配置する。農林業生産の全般的な技術や先端技術を広く学ぶ「総合実習」、食品安全や環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理など農業の生産工程管理について学ぶ「GAP演習」、トラクター等の大型機械の操作方法や安全使用について学ぶ「大型機械実習Ⅰ」、農林業経営体で生産技術を学修する「企業実習」を必修科目として配置</p>	<p>⑤実習・演習の科目群</p> <p>実習・演習の科目群では、20科目を配置し、生産理論科目群と関連した栽培分野、林業分野、畜産分野、及び加工・販売分野の4つの分野を設定する。</p> <p>「総合実習」は、本科目群の導入科目とし、水稻や野菜、花き、茶、果樹の栽培や畜産、林業について総合的に学ぶ実習とし、必修科目とする。</p> <p>栽培分野に対応する実習科目として、「圃場実習（栽培）」、「生産マネジメント実習Ⅰ（栽培）」、「生産マネジメント実習Ⅱ（栽培）」とする。林業分野に対応する実習科目として、「演習林実習」、「生産マネジメント実習Ⅰ（林業）」、「生産マネジメント実習Ⅱ（林業）」、「森林施業プラン演習」、「森林認証演習」、「林業機械実習」とした。畜産分野に対応する実習科目とし</p>

新	旧
<p>する。</p> <p>イ 栽培コース</p> <p>基礎的な栽培技術を学ぶ「圃場実習(栽培)」、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)」、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)」をコース必修として配置する。なお、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ(栽培)」では、先端技術の導入について学ぶ。また、大型機械の知識や技能を学修する「大型機械実習Ⅱ」を選択科目として配置する。</p> <p>ウ 林業コース</p> <p>基礎的な栽培技術を学ぶ「演習林実習」、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ(林業)」、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ(林業)」をコース必修として配置する。なお、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ(林業)」では、先端技術の導入について学ぶ。また、林業機械の操作法や高性能林業機械について学ぶ「林業機械実習」をコース必修として配置する。</p> <p>エ 畜産コース</p> <p>基礎的な飼養管理技術を学ぶ「圃場実習(畜産)」、生産現場のマネジメントの基礎を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)」、応用を学ぶ「生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)」をコース必修として配置する。なお、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ(畜産)」では、先端技術の導入について学ぶ。また、大型機械の知識や技能を学修する「大型機械実習Ⅱ」を選択科目として配置する。</p>	<p>て「圃場実習(畜産)」、「生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)」、「生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)」とする。いずれの分野も生産技術と、生産現場のマネジメントについて学べる構成とする。</p> <p>共通として、農林業で扱う大型機械について学ぶ「大型機械実習Ⅰ」及び「大型機械実習Ⅱ」、GAPの理論や実践について学ぶ「GAP演習」、実際の農林業経営体でインターンシップを行う臨地実務実習である「企業実習」を配置し、より実践的な技術を学べる構成とする。</p> <p>加工・販売分野では、食品や木材の加工について学ぶ「食品加工実習」及び「木材加工実習」、実践的な販売方法について学ぶ「販売実習」を配置する。</p> <p>(追加)</p>

新	旧
<p>(4) 展開科目</p> <p><u>農山村の地域社会における将来のリーダーに求められる農山村の伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会に関する知識を身に付けるとともに、農山村の伝統・文化などの地域資源を活用することにより、農林業経営に新たな事業展開を生み出すための創造力を備えた農林業経営者を養成するための科目を配置する。</u></p> <p>①農山村の伝統・文化の継承の科目群</p> <p><u>農山村の歴史や文化、多面的機能などについて学ぶ「農山村田園地域公共学」、日本や世界の食文化について学ぶ「食文化論」、農と食の営みの本質について考える「農と食の哲学」、農村に暮らす人々の生業と歴史文化との関係から農村景域について学ぶ「農村景域論」、生きた文化財とも呼ばれる在来作物の過去・現在・未来について考える「在来作物学」を必修科目として配置する。</u></p> <p>②農山村の地域社会の科目群</p> <p><u>農山村の生活や地域社会の特徴について学ぶ「農村社会論」、農山村において地域住民と交流し、地域や地域住民が抱える課題を発見し、その解決策を考える「農山村デザイン演習」、グリーン・ツーリズムの現状・課題・展開について考える「グリーン・ツーリズム論」、農と医、農と福の連携について学ぶ「医福食農連携論」、地域が抱える課題を地域資源を活かしながらビジネス的な手法により解決する手法などについて学ぶ「コミュニティビジ</u></p>	<p>(4) 展開科目</p> <p><u>農林業の新たな展開につながる応用的能力や、創造的役割を果たすために必要な能力を育成するため、農林業や農山村が持つ多面的機能を学ぶ科目を配置する。</u></p> <p><u>多面的機能の総論について学ぶ「農山村田園地域公共学」を必修科目として配置し、選択科目については環境保全科目群と農山村振興科目群の2つの科目群を配置する。</u></p> <p>①環境保全の科目群</p> <p><u>環境保全科目群は5科目を配置する。農林業と環境の総論を学ぶ「環境と農林業」、農村の景観について学ぶ「農村景域論」、環境に配慮した農林業について学ぶ「環境保全型農業論」、森林マネジメント論、「畜産環境学」を配置する。</u></p> <p>②農山村振興の科目群</p> <p><u>農村と健康・福祉について学ぶ「農村社会論」、「農山村デザイン演習」、「農と食の哲学」、「農と食の健康論」、「医福食農連携論」、農山村地域の資源とビジネスについて学ぶ「グリーン・ツーリズム論」、「食文化論」、「野生鳥獣管理・利用論」、「在来作物学」、「コミュニティビジネス論」、「在来作物学」、「野生鳥獣管理・利用論」を配置する。</u></p>

新	旧
<p><u>ネス論」を必修科目として配置する。</u></p> <p>(5) 総合科目</p> <p><u>修得した専門知識と技術を駆使して農 林業経営における課題を探求し、解決に 必要な情報を収集・分析・整理すると もに、分析・整理した結果を表現できる 能力を習得するため、農林業経営におけ る課題の解決に向けた研究の手法などを 学ぶ科目を配置する。</u></p> <p><u>農林業経営体の生産部門の分析を行 う「経営分析演習Ⅰ」、農林業経営体の経 営全般について分析する「経営分析演習 Ⅱ」、農林業経営体を分析し、課題と解決 策を考える「プロジェクト研究」を必修 科目として配置する。</u></p>	<p>(5) 総合科目</p> <p><u>修得した知識及び技能を総合し、農林業者 としての実践的かつ応用的な能力を総合的 に向上させるための科目を6科目配置する。</u></p> <p><u>農林業法人での生産現場のオペレーショ ンについて学ぶ「経営実習Ⅰ」、農林業経営 体の経営戦略とその戦略に基づいた経営に ついて学ぶ「経営実習Ⅱ」、これらの実習を もとに行う演習科目である「経営分析演習 Ⅰ」、「経営分析演習Ⅱ」を配置する。</u></p> <p><u>本学での学修の集大成として「プロジェクト研 究Ⅰ」「プロジェクト研究Ⅱ」を配置し、学生 が農林業経営体の分析を行い、経営における課 題へのアプローチ手法について研究する。</u></p>

(新旧対象表) 設置の趣旨を記載した書類 (28 ページ)

新				旧					
<p>④卒業要件</p> <p>本学科で卒業に必要なとなる卒業要件単位数は、次のとおりとする。なお、実験・実習・実技による授業科目にかかる 40 単位以上（うち臨地実務実習 20 単位以上）を修得しなければならないものとする。</p>				<p>④卒業要件</p> <p>本学科で卒業に必要なとなる卒業要件単位数は、次のとおりとする。なお、実験・実習・実技による授業科目にかかる 40 単位以上（うち臨地実務実習 20 単位以上）を修得しなければならないものとする。</p>					
		卒業要件単位数					卒業要件単位数		
科目群		必修科目	選択科目	合計	区分		必修科目	選択科目	合計
基礎科目		10 単位	10 単位以上	20 単位以上	基礎科目		14 単位	6 単位以上	20 単位以上
職業専門科目	農林業基礎	6 単位	4 単位以上	85 単位以上	職業専門科目	農林業基礎	10 単位	二	62 単位以上
	生産理論	2 単位	14 単位以上			生産理論	6 単位	二	
	経営管理	21 単位	4 単位以上			経営管理	10 単位	2 単位以上	
	加工・流通・販売	—	栽培・畜産コース：8 単位以上 林業コース：6 単位以上			加工・流通・販売	—	4 単位以上	
	生産技術	16 単位	栽培・畜産コース：10 単位以上 林業コース：12 単位以上		実習・演習	12 単位	18 単位以上		
展開科目		20 単位	二	20 単位	展開科目		2 単位	18 単位以上	20 単位以上
総合科目		4 単位	二	4 単位	総合科目		22 単位		22 単位以上
卒業要件単位数		129 単位以上			卒業要件単位数		124 単位以上		

8. <教育課程の編成方針が不明確>

213 単位の選択科目を配置する計画であるが、卒業要件を踏まえると、多くの科目が未開講となる懸念や、少数の学生で開講された際に教育効果が低減する恐れがある。人材養成像に照らしてどのような考え方で選択科目を配置し、どのように履修させる計画であるのか具体的に説明し、必要に応じて配置科目を見直すこと。

(対応)

本学では、生産理論や生産技術、加工・流通・販売は、栽培、林業、畜産の分野に分かれて学ぶ計画である。申請時は、「分野」や「領域」などの言葉を用いて説明していたが、説明が不十分で明確でなかったため、コース制を設置することを明確に説明する。その上で、未開講となる科目が多く発生することがないように科目の整理・統合、単位数の見直し、履修要件の見直しを行う。なお、見直しにあたっては、体系的な学びになるような科目配置を行う。また、少人数で開講しても、教育効果が低減することがない教育内容となるよう配慮する。

(詳細説明)

本学では、生産理論、生産技術、加工・流通・販売は、栽培、林業、畜産の分野に分かれて学ぶ計画である。申請時は、基本計画書や設置の趣旨等を記載した書類のなかで、「分野」や「領域」を用いて説明していたが、説明が不十分で不明確であった。このため、生産理論と生産技術、加工・流通・販売は分かれて学ぶことを明確にするため、コース制とし、「栽培コース」、「林業コース」、「畜産コース」の3コースを置き、それぞれのコースで体系的な学びとなるように科目配置を行う。

また、御指摘を踏まえ、多くの科目が未開講となることがないように、科目の整理・統合、単位数の見直し、履修要件の見直しを行う(別添資料8 単位数・科目数の見直し状況)。科目の変更では、基礎と中級科目を統合したり、教育効果を狙って講義科目と演習科目を統合することで、16科目を8科目へ整理・統合した。また、科目の内容から必要な内容への見直しを行い、3科目において単位数を減じた。さらに、履修要件の見直しにより、基礎的な知識を学ぶための科目の自由科目化、体系的な学びになるように、生産理論や生産技術、加工・流通・販売の科目群については、各コースでコアとなる科目のコース必修化を行った。その結果、全体の単位数は287単位から267単位、また、選択科目は213単位から176単位となった。この見直しにより、生産理論や生産技術、加工・流通・販売の科目群の選択科目のうち、40科目をコース必修とした。

<単位数・科目数の見直し状況>

項目	基礎科目		職業専門科目		展開科目		総合科目		合計	
	変更前	変更後	変更前	変更後	変更前	変更後	変更前	変更後	変更前	変更後
科目数	17科目	20科目	95科目	93科目	16科目	10科目	6科目	3科目	134科目	126科目
合計単位数	32単位	36単位	201単位	207単位	32単位	20単位	22単位	4単位	287単位	267単位
必修単位数	14単位	10単位	36単位	45単位	2単位	20単位	22単位	4単位	74単位	79単位
選択単位数	18単位	26単位	165単位	150単位	30単位	0単位	0単位	0単位	213単位	176単位
(うち選択必修)	0単位	4単位	12単位	8単位	0単位	0単位	0単位	0単位	0単位	12単位
(うちコース必修)	-	0単位	-	40単位	-	0単位	-	0単位	-	40単位
自由科目単位数	-	-	-	12単位	-	-	-	-	-	12単位

選択科目の考え方であるが、基礎科目は、「専門分野のみにとらわれない幅広い知識やコミュニケーション能力及び価値観の相違や多様性などを理解し多面的に物事を考える素養」をディプロマポリシーとして掲げている。このため、教養を学ぶ選択の幅を広げるために、一般教養科目群の「法学概論」、「社会学概論」、「政治学概論」、「歴史学概論」、「文学概論」、「文明論」、「茶道」、「華道」、「統計学」を選択科目として配置する。また、コミュニケーション・スキルの科目群のうち、「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、「英語Ⅲ」、「英語Ⅳ」については、学生の英語レベルや将来の目的に合わせて科目が履修できるように、選択科目として、2科目4単位を選択必修とすることとする。基礎科目からは、6単位以上を選択することができる。

職業専門科目のうち、農林業基礎の科目群は、学生の興味のある分野や将来の目的に合わせて農林業の基礎を学べるよう選択の幅を設けた。県内や県外、海外の農林業をとりまく現状を学ぶ、「県内農林業事情」、「県外農林業事情」、「海外農林業事情」、農林業の歴史や政策について学ぶ「農林業史」や「農林業政策」、生命現象を分子レベルで学ぶための「分子生物学」や「生命科学」、微気象や気象災害、災害対策について学ぶ「農業気象学」、鳥獣被害や対策、利用について学ぶ「野生鳥獣管理・利用論」など、農林業に関係する幅広い分野の科目を選択科目とした。また、農林業の専門知識を学ぶための基礎的素養を身につけるために配置していた「農林業のための生物学」、「農林業のための基礎数学」、「農林業のための化学」、「農林業のための物理学」、「農林業のための地学」については、配置の目的に照らすと自由科目とすることが適当であると思われるため、自由科目に配置を見直した。

生産理論科目群では、学生のコース選択の指標となる導入的な科目として、「栽培学」、「植物生理生態学」、「樹木・組織学」、「畜産概論」を配置し、このうち1科目以上を選択必修とし、コースごとの特色と進路等を説明した上で、履修誘導を行う。2年次からはコースに分かれて学ぶが、栽培コースでは栽培技術を学ぶために不可欠である「肥料・植物栄養学」、「植物病理学」、「応用昆虫学」、「環境保全型農業論」をコース必修として配置した。栽培コースでは、水稲や茶、野菜、果樹、花きなど学生が将来取り組みたいと考えている栽培品目について知識を得られるよう、「作物学」もしくは「園芸学」のいずれか、また、「植物遺伝育種学概論」、「土壌学」、「野菜園芸学」、「果樹園芸学」、「花き園芸学」のいずれかを学べるように科目を配置した。林業コースでは、学生数が3名程度であることを想定し、体系的な学びとなるよう、「森林計画・政策論」、「造林学」、「森林土木学」、「木質科学概論」、「木材生産システム」、「森林マネジメント」をコース必修とした。なお、演習科目である「木材生産システム」及び「森林マネジメント」は、教員から指導を受けながら模擬的な書類作成を行う授業であるため、少人数であっても教育効果が低減する懸念はないと考える。指導を受けながら畜産コースも同様に、学生数が3名程度であることを想定し、体系的な学びになるよう、「飼料総論」、「家畜飼養学」、「家畜生理解剖学」、「家畜育種繁殖」、「家畜衛生学」、「畜産環境学」をコース必修とする。さらに、知識を深めるため、家畜人工授精師の取得に必要となる「畜産法規」及び「人工授精論」、酪農で必要となる「自給飼料」や、アニマルウェルフェアについて学ぶことの出来る「家畜福祉学」を選択科目として配置する。

栽培技術科目群では、「圃場実習（栽培）」、「演習林実習」、「圃場実習（畜産）」、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ（栽培）」、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ（林業）」、「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ（畜産）」、「林業機械実習」をコース必修とした。また、機械化が進む農業において、大型機

械の技能を深める「大型機械実習Ⅱ」を選択科目とした。

加工・流通・販売科目群では、コース毎に科目を配置した。栽培コース及び畜産コースでは、新たな経営展開につながる「販売管理論」、「販売実習」はコース必修とした。また、学生が将来の方向性などに合わせて科目を選択できるよう、栽培コースでは、「食品科学」、「収穫後生理学」、「食品加工学」、「食品流通論」、「6次産業化実践論」、「食品加工実習」、「農と食の健康論」、畜産コースでは、「食品科学」、「食品加工学」、「食品流通論」、「6次産業化実践論」、「食品加工実習」、「農と食の健康論」を選択科目として配置した。林業コースでは、「木材利用・流通論」、「木材加工学」、「木材加工実習」をコース必修とする。

経営管理科目群は、全コースが共通で学ぶ科目であるが、経営管理に必須となる知識・技能を学ぶ科目を必修とした上で、学生の将来志向にあわせて経営の知識をさらに広げるため、「フードシステム論」、「法と農業経営」、「農林業の経営組織論」、「人材マネジメント」、「農と食の起業論」、「知的財産権」、「経営管理論」を選択科目として配置した。

展開科目及び総合科目に配置した科目は全て必修とした。

以上を踏まえ、教育課程等の概要及び授業科目の概要を修正した（別添資料6 教育課程等の概要）。

(新旧対照表) 教育課程等の概要

新					旧							
(1 ページ)					(1 ページ)							
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			
			必修	選択	自由				必修	選択	自由	
①基礎科目	静岡学	1通	2			一般教養	静岡学	1通	2			
	歴史学概論	2前		2			歴史学概論	2前		2		
	文明論	2後		2			文明論	2後		2		
	文学概論	2後		2			文学概論	2後		2		
	茶道	3前		1			茶道	3前		1		
	華道	3前		1			華道	3前		1		
	経済学概論	1前	2				経済学概論	1前	2			
	法学概論	1前		2			法学概論	1前		2		
	社会学概論	1後		2			社会学概論	1後		2		
	政治学概論	1後		2			政治学概論	1後		2		
	統計学	1後		2			政治学概論	1後		2		
	情報処理基礎	1前	1				コミュニケーション・スキル	コミュニケーション論	1前	2		
	情報処理応用	2後	1					英語 I	1通	2		
	コミュニケーション論	1前	2			英語 II		2通	2			
	英語 I	1前		2		英語 III		3通		2		
	英語 II	1後		2		英語 IV		4通		2		
	英語 III	2前		2		保健体育 I	1通	2				
	英語 IV	2後		2		保健体育 II	2通		2			
	保健体育 I	1通	2			小計(17科目)	-	14	18	0		
	保健体育 II	2通		2								
小計(20科目)	-	10	26	0								
②職業専門科目	農学概論	1前	2			農林業基礎	農学概論	1前	2			
	環境と農林業	1後	2				農林業史	1前		2		
	農林業史	1後		2			農林業政策	2前	2			
	農林業政策	2前		2			技術者倫理	3前	2			
	技術者倫理	3前	2				県内農林業事情	1後		2		
	県内農林業事情	1前		2			県外農林業事情	2前		1		
	県外農林業事情	2前	1				海外農林業事情	3前		1		
	海外農林業事情	3前		1			農林業のための基礎数学	1前		2		
	農林業のための基礎数学	1前			2		農林業のための生物学	1前		2		
	農林業のための生物学	1前			2		農林業のための化学	1前		2		
	農林業のための化学	1前			2		農林業のための物理学	1後		2		
	農林業のための物理学	1後			2		農林業のための統計学	1後		2		
	農林業のための地学	1後			2		農林業のための地学	2前		2		
	分子生物学	1後		2			分子生物学	1後	2			
	農業気象学	2後		2			農業気象学	2前		2		
	生命科学	2後		2			生命科学	3前		2		
	野生鳥獣管理・利用論	3前		2			情報処理基礎	1前	1			
	栽培学	1後		2		情報処理応用	2後	1				
	植物生理生態学	1後		2		生産理論(栽培)	栽培学	1前		2		
	作物学	2前		2			植物生理生態学	1前		2		
	園芸学	2前		2			作物学	1後		2		
	植物病理学	2前		2			園芸学	1後		2		
	応用昆虫学	2後		2			植物病理学	2前		2		
	肥料・植物栄養学	2前		2			応用昆虫学	2前		2		
	野菜園芸学	2後		2			肥料・植物栄養学	2後		2		
	果樹園芸学	2後		2			野菜園芸学	3前		2		
	花き園芸学	2後		2			果樹園芸学	3前		2		
	植物遺伝伝種学概論	2後		2			花き園芸学	3前		2		
	土壌学	2後		2								
	環境保全型農業論	3前		2								

新					旧						
(2 ページ)					(2 ページ)						
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数		
			必修	選択	自由				必修	選択	自由
② 職業専門科目	生産理論 (林業)	森林計画・政策論	2前	2		生産理論 (林業)	森林計画・政策論	1前	2		
		造林学	2前	2			造林学	1前	2		
		樹木・組織学	1後	2			樹木・組織学	1後	2		
		森林土木学	2前	2			森林土木学	2前	2		
		木質科学概論	2後	2			木質科学概論	2前	2		
		木材生産システム	2後	2			木材生産システム論	2後	2		
		森林マネジメント	3前	2			植物遺伝育種学概論	1後	2		
	生産理論 (畜産)	畜産概論	1後	2		生産理論 (畜産)	畜産概論	1前	2		
		飼料総論	2前	2			飼料総論	1前	2		
		家畜生理解剖学	2前	2			家畜生理解剖学	1後	2		
		家畜育種繁殖学	2後	2			家畜育種繁殖学	1後	2		
		家畜飼養学	2前	2			家畜飼養学	1後	2		
		畜産法規	2前	2			畜産法規	2前	2		
		人工授精論	2前	2			人工授精論	2前	2		
	生産理論 (共通)	自給飼料	2後	2		自給飼料	2後	2			
		家畜衛生学	2後	2		家畜衛生学	2後	2			
		家畜福祉学	2後	2		家畜福祉学	2後	2			
	生産理論 (共通)	畜産環境学	3前	2		畜産環境学	3前	2			
	② 職業専門科目	経営管理	農林業のための先端技術	3前	2		農林業のための先端技術	3前	2		
			簿記基礎	1前		1	簿記基礎	1前		1	
簿記応用			1後		1	簿記応用	1後		1		
フードシステム論			1後	2		農と食の経済学	1前	2			
法と農業経営			2前	2		法と農業経営	1後	2			
経営管理論			2前	2		経営管理論	1後	2			
農業経営学			1後	2		農業経営学	2前	2			
経営戦略			2前	2		経営戦略Ⅰ	2後	2			
マーケティング論			2後	2		経営戦略Ⅱ	3前	2			
財務会計			2前	2		マーケティング論	2後	2			
管理会計			3前	1		財務会計	2前	2			
農林業の経営組織論			3前	2		管理会計	3前	2			
労務管理			2後	2		経営組織論	2前	2			
人材マネジメント	3前	2		労務管理	2後	2					
知的財産権	3後	2		人材マネジメント	3前	2					
農と食の起業論	3後	2		協同組合論	3前	1					
経営実習Ⅰ	4前	5		知的財産権	3後	2					
経営実習Ⅱ	4後	5		農と食の起業論	3後	2					
加工・流通・販売	加工・流通・販売	食品科学	2前	2		食品化学	2前	2			
		食品加工学	2後	2		食品衛生学	2前	2			
		収穫後生理学	3前	2		食品加工学	2後	2			
		木材利用・流通論	2前	2		収穫後生理学	3後	2			
		木材加工学	2後	2		アグリフードシステム論	2後	2			
		食品流通論	3前	2		木材利用論	2前	2			
		販売管理論	3前	2		木材加工学	2後	2			
		農と食の健康論	2後	2		食品流通論	3前	2			
		6次産業化実践論	3後	2		木材流通論	3前	2			
		食品加工実習	3前	2		販売管理論	3前	2			
木材加工実習	3前	2		6次産業化実践論	3後	2					
生産技術	生産技術	販売実習	3後	2		総合実習	1前	2			
		総合実習	1通	2		圃場実習(栽培)	1後	2			
		圃場実習(栽培)	2前	2		圃場実習(畜産)	1後	2			
		圃場実習(畜産)	2前	2		演習林実習	1後	2			
		演習林実習	2前	2		生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)	2通	4			
		生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)	2後	4		生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)	2通	4			
		生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)	2後	4		生産マネジメント実習Ⅰ(林業)	2通	4			
		生産マネジメント実習Ⅰ(林業)	2後	4		生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)	3通	4			
		生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)	3通	4		生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)	3通	4			
		生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)	3通	4		生産マネジメント実習Ⅱ(林業)	3通	4			
生産マネジメント実習Ⅱ(林業)	3通	4									

新						旧						
(3 ページ)						(3 ページ)						
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			
			必修	選択	自由				必修	選択	自由	
② 職業専門科目	生産技術	大型機械実習Ⅰ	2前	2		② 職業専門科目	実習・演習	大型機械実習Ⅰ	2前	2		
		大型機械実習Ⅱ	3前		2			3前	2			
		林業機械実習	3前		2			3前	2			
		GAP演習	2前	2				2後	2			
		企業実習	3後	10				3後	10			
	小計(93科目)	-	45	150	12							
③ 展開科目	農山村の伝統・文化の継承	農山村田園地域公共学	1後	2		③ 展開科目	共通	農山村田園地域公共学	1後	2		
		農村景域論	3前	2				環境保全	環境と農林業	2前		2
		農と食の哲学	2前	2					環境保全型農業論	4前		2
		食文化論	2後	2					森林マネジメント論	4前		2
		在来作物学	3前	2					畜産環境学	4前		2
					農村景域論		3前			2		
	農山村の地域社会	農村社会論	2前	2			農山村振興	農村社会論	2前		2	
		農山村デザイン演習	3前	2				農山村デザイン演習	2前		2	
		医福食農連携論	2後	2				農と食の哲学	2前		2	
		グリーン・ツーリズム論	3前	2				農と食の健康論	2後		2	
コミュニティビジネス論		3後	2		医福食農連携論	2後			2			
	小計(10科目)	-	20	0	0							
④ 総合科目		経営分析演習Ⅰ	4前	1		④ 総合科目	経営実習Ⅰ	4前	5			
		経営分析演習Ⅱ	4後	1			経営実習Ⅱ	4後	5			
		プロジェクト研究	4通	2			経営分析演習Ⅰ	4前	3			
							経営分析演習Ⅱ	4後	3			
	小計(3科目)	-	4	0	0							
	合計(126科目)	-	79	176	12							
③ 展開科目		環境と農林業	2前		2	③ 展開科目	農山村振興	農村社会論	2前		2	
		環境保全型農業論	4前		2			農山村デザイン演習	2前		2	
		森林マネジメント論	4前		2			農と食の哲学	2前		2	
		畜産環境学	4前		2			農と食の健康論	2後		2	
		農村景域論	3前		2			医福食農連携論	2後		2	
		小計(16科目)	-	2	30			0	グリーン・ツーリズム論	3前		2
		経営実習Ⅱ	4後	5				食文化論	2後		2	
		経営分析演習Ⅰ	4前	3				コミュニティビジネス論	3前		2	
		経営分析演習Ⅱ	4後	3				在来作物学	3前		2	
		プロジェクト研究Ⅰ	3後	2				野生鳥獣管理・利用論	3前		2	
プロジェクト研究Ⅱ	4通	4										
	小計(6科目)	-	22	0	0							
	合計(134科目)	-	74	213	0							

(新旧対照表) 授業科目の概要

新	(11 ページ)		
	<table border="1"> <tr> <td style="text-align: center;">木材生産システム</td> <td> <p>(概要)</p> <p>森林・林業の重要な担い手である森林総合監理士（フォレストラー）や森林施業プランナーは、林業活性化構想等の策定や森林経営計画の樹立支援等の役割を担っている。本科目では、木材生産（伐採・搬出）に関する理論、丸太の造材や材積計測、価格形成の背景・要因、木材生産活動における自然環境に配慮した作業システム構築（車両系、架線系）、林業機械の構造・性能・整備・取扱方法、原価計算などの知識を学ぶ。さらに、森林経営計画の作成に必要な関連法、政策、森林の現況把握、森林管理の様々な施業法の理論と技術等を学ぶとともに同計画作成を演習する。なお、林業は労働災害の発生率が高産業と比較して高いことを踏まえ、林業・林産業の労働災害の現状やその対策を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>([24] 池田潔彦/ 5回) 木材加工システム</p> <p>([27] 近藤晃/20回) 森林経営と森林管理、森林経営計画</p> <p>([30] 鶴飼一博/ 5回) 森林における作業システム</p> </td> </tr> </table>	木材生産システム	<p>(概要)</p> <p>森林・林業の重要な担い手である森林総合監理士（フォレストラー）や森林施業プランナーは、林業活性化構想等の策定や森林経営計画の樹立支援等の役割を担っている。本科目では、木材生産（伐採・搬出）に関する理論、丸太の造材や材積計測、価格形成の背景・要因、木材生産活動における自然環境に配慮した作業システム構築（車両系、架線系）、林業機械の構造・性能・整備・取扱方法、原価計算などの知識を学ぶ。さらに、森林経営計画の作成に必要な関連法、政策、森林の現況把握、森林管理の様々な施業法の理論と技術等を学ぶとともに同計画作成を演習する。なお、林業は労働災害の発生率が高産業と比較して高いことを踏まえ、林業・林産業の労働災害の現状やその対策を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>([24] 池田潔彦/ 5回) 木材加工システム</p> <p>([27] 近藤晃/20回) 森林経営と森林管理、森林経営計画</p> <p>([30] 鶴飼一博/ 5回) 森林における作業システム</p>
木材生産システム	<p>(概要)</p> <p>森林・林業の重要な担い手である森林総合監理士（フォレストラー）や森林施業プランナーは、林業活性化構想等の策定や森林経営計画の樹立支援等の役割を担っている。本科目では、木材生産（伐採・搬出）に関する理論、丸太の造材や材積計測、価格形成の背景・要因、木材生産活動における自然環境に配慮した作業システム構築（車両系、架線系）、林業機械の構造・性能・整備・取扱方法、原価計算などの知識を学ぶ。さらに、森林経営計画の作成に必要な関連法、政策、森林の現況把握、森林管理の様々な施業法の理論と技術等を学ぶとともに同計画作成を演習する。なお、林業は労働災害の発生率が高産業と比較して高いことを踏まえ、林業・林産業の労働災害の現状やその対策を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>([24] 池田潔彦/ 5回) 木材加工システム</p> <p>([27] 近藤晃/20回) 森林経営と森林管理、森林経営計画</p> <p>([30] 鶴飼一博/ 5回) 森林における作業システム</p>		
旧	(追加)		

新			
	<table border="1"> <tr> <td style="text-align: center;">森林マネジメント</td> <td> <p>森林は、国土の保全、水源の涵養、生物多様性の保全、地球温暖化防止等の多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて生活を支えている。このため、長期的な視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。また、森林認証制度は、公共建築や商業施設での認証材の活用が推進されているため、森林認証の取得はビジネス・チャンスにつながる可能性がある。長期的な視点に立って作成される森林計画制度や森林保護の視点を備えた持続的林业経営を考える。森林認証の制度や取得方法について学び、森林認証を使用したビジネス展開について考える。</p> </td> </tr> </table>	森林マネジメント	<p>森林は、国土の保全、水源の涵養、生物多様性の保全、地球温暖化防止等の多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて生活を支えている。このため、長期的な視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。また、森林認証制度は、公共建築や商業施設での認証材の活用が推進されているため、森林認証の取得はビジネス・チャンスにつながる可能性がある。長期的な視点に立って作成される森林計画制度や森林保護の視点を備えた持続的林业経営を考える。森林認証の制度や取得方法について学び、森林認証を使用したビジネス展開について考える。</p>
森林マネジメント	<p>森林は、国土の保全、水源の涵養、生物多様性の保全、地球温暖化防止等の多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて生活を支えている。このため、長期的な視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。また、森林認証制度は、公共建築や商業施設での認証材の活用が推進されているため、森林認証の取得はビジネス・チャンスにつながる可能性がある。長期的な視点に立って作成される森林計画制度や森林保護の視点を備えた持続的林业経営を考える。森林認証の制度や取得方法について学び、森林認証を使用したビジネス展開について考える。</p>		
旧	(追加)		

新	(13 ページ)		
	<table border="1"> <tr> <td style="text-align: center;">フードシステム論</td> <td> <p>農業・農村の持つ多面的な役割・機能を担う日本農業に対する期待は、近年において一層の高まりが確認できる。それは、食料自給率の向上や食料の安全・安心への高い期待の高まり、地産地消・スローフード運動の広がり、持続可能な循環型社会の形成の必要性に対する認識の高まり等である。その一方で、食料生産を担う農業や食料生産の場としての農村は、過疎化や高齢化等により、持続可能性の面からみると危機的状況におかれている。また、生活様式の変化に伴い、外食や中食に代表される食の「外部化」が進み、「食」と「農」の乖離が進展している。本講義では、農産物を主体とした食料生産、食料流通、食料消費までをも含めた食料供給連鎖に関して、フードシステムの観点から現代の食料をめぐる実態と変動を理解することを、主たるねらいとする。</p> </td> </tr> </table>	フードシステム論	<p>農業・農村の持つ多面的な役割・機能を担う日本農業に対する期待は、近年において一層の高まりが確認できる。それは、食料自給率の向上や食料の安全・安心への高い期待の高まり、地産地消・スローフード運動の広がり、持続可能な循環型社会の形成の必要性に対する認識の高まり等である。その一方で、食料生産を担う農業や食料生産の場としての農村は、過疎化や高齢化等により、持続可能性の面からみると危機的状況におかれている。また、生活様式の変化に伴い、外食や中食に代表される食の「外部化」が進み、「食」と「農」の乖離が進展している。本講義では、農産物を主体とした食料生産、食料流通、食料消費までをも含めた食料供給連鎖に関して、フードシステムの観点から現代の食料をめぐる実態と変動を理解することを、主たるねらいとする。</p>
フードシステム論	<p>農業・農村の持つ多面的な役割・機能を担う日本農業に対する期待は、近年において一層の高まりが確認できる。それは、食料自給率の向上や食料の安全・安心への高い期待の高まり、地産地消・スローフード運動の広がり、持続可能な循環型社会の形成の必要性に対する認識の高まり等である。その一方で、食料生産を担う農業や食料生産の場としての農村は、過疎化や高齢化等により、持続可能性の面からみると危機的状況におかれている。また、生活様式の変化に伴い、外食や中食に代表される食の「外部化」が進み、「食」と「農」の乖離が進展している。本講義では、農産物を主体とした食料生産、食料流通、食料消費までをも含めた食料供給連鎖に関して、フードシステムの観点から現代の食料をめぐる実態と変動を理解することを、主たるねらいとする。</p>		
旧	(追加)		

新	(15 ページ)	
	経営戦略	<p>変動し続ける環境に適応しながら、企業が長期的に存続していくためには、長期的視点に立った経営戦略の理論を持つことが必要である。本科目では、経営戦略に関する知識を習得することを目標として、経営理念・経営目標、環境分析、ドメイン・成長ベクトル・多角化戦略など経営戦略に関する基礎知識や、5つの競争要因と3つの基本戦略・価値連鎖・産業クラスター・競争対抗戦略など成長戦略に関する基礎知識、コーポレート・ガバナンスと企業の社会的責任、技術経営（MOT）などについて学ぶ。その際、経営戦略の基礎理論を学ぶとともに、戦略策定に有効な分析手法について習得するとともに、グループワークにおけるディスカッションにより、具体的な戦略の策定の仕方を学ぶ。</p>
旧	(追加)	

新	(15 ページ)	
	農林業の経営組織論	<p>(概要) 農業においては家族経営を主体として展開してきたが、近年、法人化や集落営農などの経営主体が展開してきた。これらの経営体では、様々な構成員の活動によって成り立っており、チームや職場という組織をいかにうまく活用して、経営成長を成し遂げるかを目的としている。また、家族経営においても個々の経営体だけで企業活動を継続できるものではなく、各種の組織に支援されていることから、経営組織論は農林業経営にとって必要な知識となっている。そこで、一般企業を対象にして展開してきた経営組織論の論理に関する基礎知識を習得するとともに、農業経営の経営形態別に組織論上の課題を具体的に考察する。</p> <p>また、近年は株式会社等が過度に効率性・合理性を追求することで、世界経済に混乱をもたらし、貧富の格差拡大や自然環境への過大な負荷などの問題も顕在化してきている。こうしたなかで、協同組合が、その掲げる理念とともに世界的に再評価されている。そこで、株式会社等と対比しながら、協同組合の基本特性、意義や役割、それを担保する協同組合原則について学ぶとともに、協同組合運動と事業の展開について学ぶ。さらに、農業分野で関連の深い農業協同組合の理念や組織、事業展開と今日的課題について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (L5) 天野哲郎/9回) 経営組織論の理論と課題 (L36) 柴垣裕司/6回) 協同組合の基本特性、意義や役割、協同組合原則</p>
旧	(追加)	

新	(16 ページ)	
	食品科学	<p>近年、食の安全性など食にまつわる様々な課題、問題が噴出しており、消費者の関心が高くなっている。農林業経営では食品に対する幅広い正確な知識、食品安全、健康に生活していくための栄養バランスのとれた食品の摂取に関する知識が不可欠である。本科目では、食品と健康とのかかわりや機能、食品の主要成分や特殊成分、食品成分の酸化や成分間反応、食品の貯蔵、食品安全をリスク学の視点から考えるための基礎知識や、化学物質および微生物からの食品汚染、最近注目が高い特定保健用食品や機能性食品、HACCPについての最新情報など、食品化学や食品衛生の基礎知識や先端的内容について学ぶ。</p>
旧	(追加)	

新	(17 ページ)	木材利用・流通論	林業の主要な生産物である木材は、建築材料や家具など様々な用途に、その特性を生かして加工・利用されている。本科目では、木材の特性と加工・利用の関係を理解することを目的とする。まず、木材の物理的性質や木材の保存、木質材料の製造と2次加工など木材に関する基礎知識を学ぶ。次に、世界の木材需給と流通、日本の木造住宅における在来工法、枠組壁工法等の特徴について学ぶ。最後に、林業にとって市場に出す最初の製品である丸太の商品力を高め、採算性を高めるための工夫や、木材の種類・生産工程・用途等の違いによる流通の形態や変遷、木材市場の役割・動向、IoT、ICTを利用した木材流通について学ぶ。
旧	(追加)		

新	(23 ページ)	経営分析演習 I	経営実習 I での結果をもとに、実習を行った農林業経営体の生産部門の現状について分析を行う。分析を行う際は、生産物の生産計画と実際の状況、人員配置の状況、生産資材の調達や使用の状況、生産に必要な情報収集と利用の状況などについて調査し、最終的には生産部門での計画した利益と実際の利益を比較分析する。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員で、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行い、生産現場について考察する。
旧	(24 ページ)	経営分析演習 I	経営実習 I での結果をもとに、学生ごとに実習を行った農林業経営体の生産現場について、適切な計画か、人員の配置は適切だったか、生産資材は効率的に使用されていたか、生産情報の収集と利用法は適切であったか、生産部門は計画した利益を生み出しているかという視点で分析する。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員のグループで、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行い、生産現場について考察する。

新	(23 ページ)	経営分析演習 II	経営実習 II での結果をもとに、実習を行った農林業経営体の経営について分析を行う。分析を行う際は、農林業経営体の沿革や経営理念、経営戦略、マーケティング、財務状況、リスクマネジメントなどについて調査を行う。また、実習を通じて発見した、農林業経営体の新たな価値や可能性、財務状況、経営上の課題について分析を行う。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員のグループで、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行う。
旧	(24 ページ)	経営分析演習 II	企業実習 II での結果をもとに、学生ごとに実習を行った農林業経営体の沿革や経営理念、経営戦略、マーケティング、財務状況、リスクマネジメントについて分析を行う。また、実習を通じて発見した、農林業経営体の新たな価値や可能性、財務状況、経営上の課題について分析を行う。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員のグループで、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行い、農林業経営を行う際の経営理念と経営戦略について考える。

新	<p data-bbox="272 226 416 257">(23 ページ)</p> <table border="1" data-bbox="256 286 1331 577"> <tr> <td data-bbox="256 286 564 577">プロジェクト研究</td> <td data-bbox="564 286 1331 577"> <p data-bbox="571 286 1308 506"> <u>実習や演習などを通じて農林業経営体の分析を進め、分析を通じて発見した課題とその解決策について農林業経営体への提案書をまとめ、これらを通じて、研究手法や課題解決のための能力を習得することを本科目の目的とする。農林業経営体の事前調査、研究の進め方、調査方法について教員から指導を受けながら調査計画を作成し、計画発表会を開催する。また、調査結果や調査手法について指導教員と議論し、的確に結果を解釈し、教員から指導を受けながら提案書を作成し、発表会を開催する。</u> </p> </td> </tr> </table>	プロジェクト研究	<p data-bbox="571 286 1308 506"> <u>実習や演習などを通じて農林業経営体の分析を進め、分析を通じて発見した課題とその解決策について農林業経営体への提案書をまとめ、これらを通じて、研究手法や課題解決のための能力を習得することを本科目の目的とする。農林業経営体の事前調査、研究の進め方、調査方法について教員から指導を受けながら調査計画を作成し、計画発表会を開催する。また、調査結果や調査手法について指導教員と議論し、的確に結果を解釈し、教員から指導を受けながら提案書を作成し、発表会を開催する。</u> </p>
プロジェクト研究	<p data-bbox="571 286 1308 506"> <u>実習や演習などを通じて農林業経営体の分析を進め、分析を通じて発見した課題とその解決策について農林業経営体への提案書をまとめ、これらを通じて、研究手法や課題解決のための能力を習得することを本科目の目的とする。農林業経営体の事前調査、研究の進め方、調査方法について教員から指導を受けながら調査計画を作成し、計画発表会を開催する。また、調査結果や調査手法について指導教員と議論し、的確に結果を解釈し、教員から指導を受けながら提案書を作成し、発表会を開催する。</u> </p>		
旧	(追加)		

(新旧対照表) シラバス

(新) 37 ページ

授業名 木材生産システム Forestry Harvesting System and Engineering		単位数 2単位	授業の方法 講義・演習
		履修年次	2年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	池田潔彦、近藤晃、鶴飼一博
授業時間	月曜日 3・4時限	教室	講義室14
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	<p>森林・林業の重要な担い手である森林総合監理士（フォレスター）や森林施業プランナーは、林業活性化構想等の策定や森林経営計画の樹立支援等の役割を担っている。本科目では、木材生産（伐採・搬出）に関する理論、丸太の造材や材積計測、価格形成の背景・要因、木材生産活動における自然環境に配慮した作業システム構築（車両系、架線系）、林業機械の構造・性能・整備・取扱方法、原価計算などの知識を学ぶ。さらに、森林経営計画の作成に必要な関連法、政策、森林の現況把握、森林管理の様々な施業法の理論と技術等を学ぶとともに同計画作成を演習する。なお、林業は労働災害の発生率が高いため他産業と比較して高いことを踏まえ、林業・林産業の労働災害の現状やその対策を学ぶ。</p>		
授業目的・目標	森林経営で重要である木材生産（伐採・搬出）に関する理論、木材生産活動における自然環境に配慮した作業システム構築（車両系、架線系）の技術を理解する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	森林の生産力（近藤晃）	
	2	森林作業法1 主伐（近藤晃）	
	3	森林作業法2 間伐（近藤晃）	
	4	森林作業法3 更新（近藤晃）	
	5	林業労働災害の現状（近藤晃）	
	6	林業労働災害の対策（近藤晃）	
	7	木材（立木）生長形質と採材（造材）（池田潔彦）	
	8	立木、丸太の材積・材質計測手法（池田潔彦）	
	9	木材の木取り及び製材規格（池田潔彦）	
	10	木材価格① 木材価格形成のメカニズム、伐出費用との関連（池田潔彦）	
	11	木材価格② 丸太及び製材品の価格とその変遷（池田潔彦）	
	12	作業システムと生産性（鶴飼一博）	
	13	林業機械の特徴（鶴飼一博）	
	14	車両系作業システム（鶴飼一博）	
	15	架線系作業システム（鶴飼一博）	
	16	工程管理と原価計算（鶴飼一博）	
	17	森林関連法と森林政策（近藤晃）	
	18	森林計画制度（近藤晃）	
	19	森林総合監理士、森林施業プランナー等の役割（近藤晃）	
	20	森林情報（森林簿、森林計画図等）（近藤晃）	
	21	森林の現況把握（近藤晃）	
	22	森林経営計画（1）概要（近藤晃）	
	23	森林経営計画（2）森林経営の方針（近藤晃）	
	24	森林経営計画（3）作成要件（近藤晃）	
	25	森林経営計画（4）作成要件（近藤晃）	
	26	森林経営計画（5）認定要件（近藤晃）	
	27	森林経営計画（6）変更と遵守（近藤晃）	
	28	森林経営計画（7）変更と遵守（近藤晃）	
	29	森林経営計画（8）実行支援（近藤晃）	
30	森林経営計画（9）計画発表（近藤晃）		
キーワード	主伐、林業労働災害、作業システム、林業機械、採材、成長形質、木材材質、価格形成、木取り、製材規格		
教科書・参考書	配付資料、全国森林組合連合会（2016）「森林施業プランナーテキスト改訂版」		
評価方法・評価基準	試験（60%）、レポート評点（20%）、受講態度（20%）		
関連科目	造林学、木材利用・流通論、木材加工学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

(旧) 追加

授業名 フードシステム論 Economics of Agricultural Food System		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	1年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	菊池宏之
授業時間	木曜日1時限	教室	講義室3
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	農業・農村の持つ多面的な役割・機能を担う日本農業に対する期待は、近年において一層の高まりが確認できる。それは、食料自給率の向上や食料の安全・安心への高い期待の高まり、地産地消・スローフード運動の広がり、持続可能な循環型社会の形成の必要性に対する認識の高まり等である。その一方で、食料生産を担う農業や食料生産の場としての農村は、過疎化や高齢化等により、持続可能性の面からみると危機的状況におかれている。また、生活様式の変化に伴い、外食や中食に代表される食の「外部化」が進み、「食」と「農」の乖離が進展している。本講義では、農産物を主体とした食料生産、食料流通、食料消費までもを含めた食料供給連鎖に関して、フードシステムの観点から現代の食料をめぐる実態と変動を理解することを、主たるねらいとする。		
授業目的・目標	①フードシステムの観点から現代の食料をめぐる現状を理解することで、食料供給、食料流通、消費者の食品購買行動の各段階ごとの取組課題を理解する。 ②農産物の生産、流通と食品安全・付加価値情報、表示・認証、マーケティングに関して理解する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	ガイダンス (フードシステムの変化)	
	2	食料経済の理論 (経済発展と農業・食料の需要・供給)	
	3	日本における食料消費の成熟 農産物の貿易と農業保護政策	
	4	家族の変化と食生活・食糧消費パターンの変化	
	5	食の安全と安心 (食品の安全確保と政府の役割、食品情報と表示)	
	6	農産物の市場組織と価格政策	
	7	アグリビジネスの特性と産業構造 (農業生産と土地、規模の経済性、収穫通減の法則)	
	8	食料の安全保障と自給率	
	9	食品工業の構造と変化 (食品産業・農水産物の生産と農業の連携)	
	10	食品流通業の現状と革新	
	11	食品産業とインテグレーションとサプライチェーン	
	12	外食・中食の成長と革新	
	13	食品製造業の役割と食品流通業の変化	
	14	食料問題、資源・環境問題と農業	
15	食生活と政府の役割 (農業基本法と日本の農業・食料)		
キーワード	日本農業の特性、フードシステム、食生活の変化、消費者の食品購買行動食の外部化、食生活の成熟化、食糧問題、環境問題		
教科書・参考書	教科書：時子山ひろみ・荻開津典生 (2008) 『フードシステムの経済学 第5版』医歯薬出版) 参考書：荻開津典生 (2008) 『農業経済学 第3版』 (岩波書店)		
評価方法・評価基準	試験 (50%)、課題レポート (30%)、コメントシート (20%)		
関連科目	経営管理論、農業経営、農林業経営学、食品流通論		
履修要件	特になし		
備考	新聞・雑誌・ネットニュース等で、農と食に関する情報を収集し、問題を整理しておくこと。各回、教科書主体で約90分の事前学習及び、講義ノートを見直しての約90分の事後学習を要します。		

授業名 経営戦略		単位数 2単位	授業の方法 講義
Strategic Management		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	天野哲郎
授業時間	木曜日 2時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	<p>変動し続ける環境に適応しながら、企業が長期的に存続していくためには、長期的視点に立った経営戦略の理論を持つことが必要である。本科目では、経営戦略に関する知識を習得することを目標として、経営理念・経営目標、環境分析、ドメイン・成長ベクトル・多角化戦略など経営戦略に関する基礎知識や、5つの競争要因と3つの基本戦略・価値連鎖・産業クラスター・競争対抗戦略など成長戦略に関する基礎知識、コーポレート・ガバナンスと企業の社会的責任、技術経営(MOT)などについて学ぶ。その際、経営戦略の基礎理論を学ぶとともに、戦略策定に有効な分析手法について習得するとともに、グループワークにおけるディスカッションにより、具体的な戦略の策定の仕方を学ぶ。</p>		
授業目的・目標	<p>①経営戦略に関する知識を習得する。 ②経営環境の変化に応じた戦略を策定するための具体的な分析手法を学ぶ。</p>		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	経営戦略論の概要と授業の進め方	
	2	チャンドラーとアンソフ、ポーターの経営戦略論、企業戦略と事業戦略	
	3	環境のマネジメントとは	
	4	多角化戦略	
	5	競争戦略（ポーターの5つの力と3つの競争戦略、バリューチェーン、差別化戦略とその限界）	
	6	マーケティングにおける4Pとマーケティングミクス、価格戦略、流通戦略	
	7	組織のマネジメント（組織の構造とインセンティブ・システム、経営理念と組織文化、企業倫理）	
	8	技術のマネジメント	
	9	農林業の経営環境の分析に活用できる解析手法（統計書と計量経済学的手法、調査データと多変量解析）	
	10	PPM分析、SWOT分析の具体的な提示法	
	11	OR手法の活用：事業部門の多角化、複合化戦略策定、規模拡大戦略の策定、新技術導入戦略	
	12	マーケティングにおけるSTP戦略の策定にかかる調査解析手法	
	13	経営戦略におけるシミュレーションと意思決定	
	14	ケーススタディ①：多角化戦略、規模拡大戦略	
15	ケーススタディ②：施設投資戦略、マーケティング戦略		
キーワード	ドメイン、企業戦略、事業戦略、多角化戦略、競争戦略、戦略策定手法、オペレーションズリサーチ（OR）、多変量解析		
教科書・参考書	ゼミナール経営学入門（第3版）2003年、伊丹孝之、加護野忠男著、日本経済新聞社 グロービスMBAマネジメント・ブック、2008年、グロービス経営大学院、ダイヤモンド社		
評価方法・評価基準	試験(40%)、レポート(40%)、履修態度(20%)		
関連科目	法と農業経営、経営管理論、マーケティング論		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 農林業の経営組織論 Theory of Farm Management Organization		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	3年 前期 (集中)
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	天野哲郎、柴垣裕司
授業時間	月～金曜日 1～3時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	<p>農業においては家族経営を主体として展開してきたが、近年、法人化や集落営農などの経営主体が展開してきた。これらの経営体では、様々な構成員の活動によって成り立っており、チームや職場という組織をいかにうまく活用して、経営成長を成し遂げるかを目的としている。また、家族経営においても個々の経営体だけで企業活動を継続できるものではなく、各種の組織に支援されていることから、経営組織論は農林業経営にとって必要な知識となっている。そこで、一般企業を対象にして展開してきた経営組織論の論理に関する基礎知識を習得するとともに、農業経営の経営形態別に組織論上の課題を具体的に考察する。</p> <p>また、近年は株式会社等が過度に効率性・合理性を追求することで、世界経済に混乱をもたらし、貧富の格差拡大や自然環境への過大な負荷などの問題も顕在化してきている。こうしたなかで、協同組合が、その掲げる理念とともに世界的に再評価されている。そこで、株式会社等と対比しながら、協同組合の基本特性、意義や役割、それを担保する協同組合原則について学ぶとともに、協同組合運動と事業の展開について学ぶ。さらに、農業分野で関連の深い農業協同組合の理念や組織、事業展開と今日的課題について学ぶ。</p>		
授業目的・目標	<p>①農業経営をめぐる経営組織を俯瞰的に眺め、経営組織をうまく使えるようになるための経営組織論の基礎知識の習得を本科目の目的とする。</p> <p>②株式会社とは異なる経営形態である協同組合の特性や役割について理解できるとともに、農業者として実際に利用する可能性のある農業協同組合の実態や課題について理解できるようになる。</p>		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	経営組織論の進め方 (天野哲郎)	
	2	バーナードとサイモンの経営組織論 (天野哲郎)	
	3	経営組織の構造、インセンティブシステム (天野哲郎)	
	4	経営理念と組織文化 (天野哲郎)	
	5	農業経営における組織論、農業をめぐる諸組織 (天野哲郎)	
	6	農業の企業形態 (家族経営、法人経営、集落営農) (天野哲郎)	
	7	耕種農業における支援組織の課題 (天野哲郎)	
	8	畜産経営における支援組織の課題 (天野哲郎)	
	9	トピックス (ネットワーク形成とフランチャイズ型農業経営、機械利用組合とマシーネンリンク) (天野哲郎)	
	10	協同組合の特性と意義、役割 (柴垣裕司)	
	11	協同組合運動と事業展開 (柴垣裕司)	
	12	協同組合原則 (柴垣裕司)	
	13	農業協同組合の理念と組織 (柴垣裕司)	
	14	農業協同組合の事業展開 (柴垣裕司)	
	15	農業協同組合の動向と今日的課題 (柴垣裕司)	
キーワード	事業部制、マトリックス組織、組織文化、協同組合、農業協同組合		
教科書・参考書	<p>「ゼミナール経営学入門 (第3版)」 (2003) 伊丹孝之・加護野忠男著 (日本経済新聞社)、「MBA組織と人材マネジメント」 (2007) 佐藤剛 (ダイヤモンド社)、「最新・戦略経営」 (1996) H・Iアンゾフ (産能大学出版部)、「協同組合入門ーその仕組み・取り組みー」 (2006) 河野直哉 (創森社)</p>		
評価方法・評価基準	試験 (60%)、レポート (40%)		
関連科目	フードシステム論、マーケティング論、食品流通論		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 食品科学 Food Chemistry & Food hygiene		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	内藤博敬
授業時間	金曜日1時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	近年、食の安全性など食にまつわる様々な課題、問題が噴出しており、消費者の関心が高くなっている。農林業経営では食品に対する幅広い正確な知識、食品安全、健康に生活していくための栄養バランスのとれた食品の摂取に関する知識が不可欠である。本科目では、食品と健康とのかかわりや機能、食品の主要成分や特殊成分、食品成分の酸化や成分間反応、食品の貯蔵、食品安全をリスク学の視点から考えるための基礎知識として、化学物質および微生物からの食品汚染に加え、最近注目が高い特定保健用食品や機能性食品、HACCPについての最新情報など、食品化学や食品衛生の基礎知識や先端的な内容について学ぶ。		
授業目的・目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本のみならず世界の食品について知見を広め、その食品学的特徴や加工製造における役割を説明できる。 2. 食品成分の変化や相互作用を理解し、有毒成分生成や保存法について説明できる。 3. 食品の三次機能および特定保健用食品について説明できる。 4. 食の安全を法律やエビデンスに基づいて説明できる。 5. 食中毒の原因と予防対策について考察でき、情報を収集できる。 6. HACCPを実践できる。 		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	健康的な生活と食品	
	2	食品の成分Ⅰ：水分、炭水化物、ミネラル、タンパク質、ビタミン	
	3	食品の成分Ⅱ：脂質、色素・香り・呈味成分、有害成分	
	4	成分間反応：酸化、劣化、酵素反応、有害成分となる反応副生成物	
	5	食品の分類：植物性食品（穀類、マメ類、イモ類、野菜類、果実類、種子類、きのこ類）、動物性食品	
	6	食品の機能性：病気と食品の機能性（三次機能成分）、特定保健用食品、サプリメント	
	7	食品成分表：成分分析試験、官能試験	
	8	食品の安全とは？（食品安全リスクの理解）	
	9	食品衛生の歴史、現状と課題、食品衛生法と食品安全基本法	
	10	食品と科学技術：残留農薬・飼料添加物、食品添加物・洗浄・消毒、遺伝子組み替え食品	
	11	食品と微生物Ⅰ：微生物学基礎、発酵と腐敗、人畜共通感染症、衛生害獣/虫	
	12	食品と微生物Ⅱ：発酵と腐敗、食品の変質と予防対策	
	13	食中毒Ⅰ：天然物質、人為的有害物質	
	14	食中毒Ⅱ：現代の食中毒事情と病害微生物・寄生虫、食中毒の予防・食品衛生対策	
15	食の安全を守る（HACCP 実践）		
キーワード	食と生活、食品成分、食品の分類、嗜好成分、有害成分、内分泌かく乱物質、食品成分間反応、食品の機能性、サプリメント、調味料、官能検査、食中毒、食品添加物、残留農薬、食品衛生法、遺伝子組み換え食品、食品リスク、食の安全		
教科書・参考書	<p>テキスト：①「食品化学」（実教出版、2010）高野克己 著②栄養科学イラストレイテッド「食品衛生学」（羊土社、2017）田崎達明 編</p> <p>参考書：①「日本食品成分表 本表編」第七訂（医歯薬出版、2017）、②「わかりやすい食品化学」（三共出版、2008）早瀬 文孝、佐藤 隆一郎 著、吉田 勉 監修、③「食品学」（東京化学同人、2016）久保田紀久枝、森光康次郎 編、④栄養・健康科学シリーズ「食品衛生学」改訂第3版（南江堂、2003）谷村顕雄、豊川裕之編</p> <p>※この他、適宜プリントを配布する。</p>		
評価方法・評価基準	試験（70%）、小テスト・レポート（30%）		
関連科目	農と食の健康論、農と食の哲学、医福食農連携論、食品加工学、流通加工論、食品加工実習、畜産衛生学		
履修要件	農林業のための生物学、農林業のための化学を受講していることが望ましい。		
備考	特になし。		

授業名 木材利用・流通論		単位数 2単位	授業の方法 講義
Philosophy of wood utilization & Wood Distribution		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	池田潔彦
授業時間	金曜日 4時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	林業の主要な生産物である木材は、建築材料や家具など様々な用途に、その特性を生かして加工・利用されている。本科目では、木材の特性と加工・利用の関係を理解することを目的とする。まず、木材の物理的性質や木材の保存、木質材料の製造と2次加工など木材に関する基礎知識を学ぶ。次に、世界の木材需給と流通、日本の木造住宅における在来工法、枠組壁工法等の特徴について学ぶ。最後に、林業にとって市場に出す最初の製品である丸太の商品力を高め、採算性を高めるための工夫について学ぶ。また、木材の種類・生産工程・用途等の違いによる流通の形態や変遷、木材市場の役割・動向、IoT、ICTを利用した木材流通について学ぶ。		
授業目的・目標	①木材の特性と加工・利用の関係を理解する。 ②森林所有者、素材生産事業者、木材加工業者のそれぞれが置かれている現状をとらえたうえで、どのような経営戦略を立てるべきかを考える。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	環境（環境基本法）と木材（地域産材）利用、木材流通	
	2	循環型社会における森林と木材	
	3	木材のカスケード利用の意義	
	4	木質バイオマス利用システム：マテリアル利用、エネルギー利用	
	5	木造住宅：在来軸組工法及び枠組壁工法の特徴と使用部材の変遷	
	6	木質構造・構造物：木質構造物の耐震性、中・大規模木造建築物の変遷、土木・道路・景観施設への利用	
	7	木材内装利用：室内環境規格、オフィス家具・床壁面、調湿効果、接触・視覚等の感性向上効果	
	8	木材外構利用 構造物の耐久性、維持管理、劣化診断、耐候性向上技術	
	9	木材流通① 国産材（地域材）の資源、流通経路、市場	
	10	木材流通② 外国産材の資源、流通とマーケット戦略	
	11	木材流通③ 国産材需要構造の変遷、国産材自給率の現状と今後の課題	
	12	木材流通④ IoT、ICT活用 森林～素材生産	
	13	木材流通⑤ IoT、ICT活用 素材生産～建築需要者・一般消費者	
	14	原木市場：役割・機能、素材価格、取り扱い材の変遷、新たな取組み・事業展開	
15	木質バイオマス、認証材と合法木材の流通、木材輸出・海外マーケット市場		
キーワード	環境、地域産材、カスケード利用、資源循環、バイオマス、木造住宅、木質構造、国産材、外国産材、森林資源量、木材需要、木材供給、原木市場、情報技術		
教科書・参考書	最新木材工業事典（日本木材加工技術協会）、木質構造（海青社）、林業改良普及双書（No180, 181等）、森林経営計画ハンドブック		
評価方法・評価基準	試験（60%）、レポート（20%）、受講態度（20%）		
関連科目	木材生産システム、木材加工学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 経営分析演習 I Analysis of management I		単位数 1 単位	授業の方法 演習
		履修年次	4 年前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	全教員
授業時間	月曜日 1, 2 時限	教室	各研究室
オフィスアワー	随時受け付ける。ただし、事前にメールで連絡すること。		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	経営実習 I での結果をもとに、実習を行った農林業経営体の生産部門の現状について分析を行う。分析を行う際は、生産物の生産計画と実際の状況、人員配置の状況、生産資材の調達や使用の状況、生産に必要な情報収集と利用の状況などについて調査し、最終的には生産部門での計画した利益と実際の利益を比較分析する。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員で、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行い、生産現場について考察する。		
授業目的・目標	分析後は、その結果をもとに、学生及び教員で、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行い、生産現場について考察する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	オリエンテーション	
	2	生産計画に関する分析①	
	3	生産計画に関する分析②	
	4	グループ・ワーク①	
	5	人員配置に関する分析①	
	6	人員配置に関する分析②	
	7	グループ・ワーク②	
	8	生産資材の使用に関する分析①	
	9	生産資材の使用に関する分析②	
	10	グループ・ワーク③	
	11	生産情報の分析①	
	12	生産情報の分析②	
	13	グループ・ワーク④	
	14	まとめ①	
15	まとめ②		
キーワード	生産技術、地域活性化		
教科書・参考書	適宜、資料を配布する。		
評価方法・評価基準	レポート (60%)、プレゼンテーション (40%)		
関連科目	経営実習 I		
履修要件	圃場実習や演習林実習等を通じて、生産現場のマネジメントの基礎知識を理解できている。		
備考	特になし		

経営分析演習 I Analysis of management I		単位数 3 単位	授業の方法 演習
		履修年次	4 年前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	全教員
授業時間	水曜日 1～3 時限	教室	各研究室
オフィスアワー	随時受け付ける。ただし、事前にメールで連絡すること。		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	経営実習 I での結果をもとに、学生ごとに実習を行った農林業経営体の生産現場について、適切な計画か、人員の配置は適切だったか、生産資材は効率的に使用されていたか、生産情報の収集と利用法は適切であったか、生産部門は計画した利益を生み出しているかという視点で分析する。		
授業目的・目標	分析後は、その結果をもとに、学生及び教員のグループで、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行い、生産現場について考察する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1～39	<ul style="list-style-type: none"> ・生産計画に関する分析 ・人員配置に関する分析 ・生産資材の使用に関する分析 ・生産情報の分析 	
	40～42	グループ・ワーク	
	43～45	まとめ	
キーワード	生産技術、地域活性化		
教科書・参考書	適宜、資料を配布する。		
評価方法・評価基準	作業日誌 (20%)、レポート (60%)、プレゼンテーション (20%)		
関連科目	圃場実習 (栽培)、圃場実習 (畜産)、演習林実習、生産マネジメント実習 I・II (栽培・畜産・林業)		
履修要件	圃場実習や演習林実習等を通じて、生産現場のマネジメントの基礎知識を理解できている。		
備考	特になし		

授業名 経営分析演習Ⅱ Analysis of management Ⅱ		単位数 1 単位	授業の方法 演習
		履修年次	4 年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	多々良明夫、森口卓哉、祐森誠司、逢坂興宏、天野哲郎、菊池宏之、柯麗華、前田節子、大塚誠、平岡裕一郎、中山正典、丹羽康夫、内藤博敬、太田智、長藤亮彦、大石竜、貞弘恵、松尾和之、佐藤展之、外側正之、小澤朗人、杉山恵太郎、池田潔彦
授業時間	月曜日 1, 2 時限	教室	各研究室
オフィスアワー	随時受け付ける。ただし、事前にメールで連絡すること。		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	経営実習Ⅱでの結果をもとに、実習を行った農林業経営体の経営について分析を行う。分析を行う際は、農林業経営体の沿革や経営理念、経営戦略、マーケティング、財務状況、リスクマネジメントなどについて調査を行う。また、実習を通じて発見した、農林業経営体の新たな価値や可能性、財務状況、経営上の課題について分析を行う。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員のグループで、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行う。		
授業目的・目標	農林業経営を行う際の経営理念と経営戦略について考える。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	オリエンテーション	
	2	経営理念に関する分析①	
	3	経営理念に関する分析②	
	4	グループ・ワーク①	
	5	経営戦略に関する分析①	
	6	経営戦略に関する分析②	
	7	グループ・ワーク②	
	8	マーケティングに関する分析①	
	9	マーケティングに関する分析②	
	10	グループ・ワーク③	
	11	財務分析①	
	12	財務分析②	
	13	グループ・ワーク④	
	14	まとめ①	
15	まとめ②		
キーワード	生産技術、地域活性化、経営		
教科書・参考書	適宜、資料を配布する。		
評価方法・評価基準	レポート (60%)、プレゼンテーション (40%)		
関連科目	経営実習Ⅱ		
履修要件	経営戦略について理解している。		
備考	特になし		

経営分析演習Ⅱ Analysis of management Ⅱ		単位数 3単位	授業の方法 演習
		履修年次	4年後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	全教員
授業時間	水曜日 1～3時限	教室	各研究室
オフィスアワー	随時受け付ける。ただし、事前にメールで連絡すること。		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	企業実習Ⅱでの結果をもとに、学生ごとに実習を行った農林業経営体の沿革や経営理念、経営戦略、マーケティング、財務状況、リスクマネジメントについて分析を行う。また、実習を通じて発見した、農林業経営体の新たな価値や可能性、財務状況、経営上の課題について分析を行う。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員のグループで、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行う。		
授業目的・目標	農林業経営を行う際の経営理念と経営戦略について考える。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1～39	<ul style="list-style-type: none"> ・経営理念に関する分析 ・経営戦略に関する分析 ・マーケティングに関する分析 ・財務分析 ・リスクマネジメント 	
	40～42	グループ・ワーク	
	43～45	まとめ	
キーワード	生産技術、地域活性化、経営		
教科書・参考書	適宜、資料を配布する。		
評価方法・評価基準	作業日誌 (20%)、レポート (60%)、プレゼンテーション (20%)		
関連科目	圃場実習 (栽培)、圃場実習 (畜産)、演習林実習、生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ (栽培・畜産・林業)		
履修要件	経営戦略について理解している。		
備考	特になし		

授業名 プロジェクト研究 Research for Graduation		単位数 2単位	授業の方法 演習
		履修年次	4年 通年
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	全教員(長藤亮彦除く)
授業時間	火曜日1、2時限	教室	各研究室
オフィスアワー	随時受け付ける。ただし、事前にメールで連絡すること。		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	実習や演習などを通じて農林業経営体の分析を進め、分析を通じて発見した課題とその解決策について農林業経営体への提案書をまとめ、これらを通じて、研究手法や課題解決のための能力を習得することを本科目の目的とする。農林業経営体の事前調査、研究の進め方、調査方法について教員から指導を受けながら調査計画を作成し、計画発表会を開催する。また、調査結果や調査手法について指導教員と議論し、的確に結果を解釈し、教員から指導を受けながら提案書を作成し、発表会を開催する。		
授業目的・目標	専門的な知識と技術の習得を通して、研究手法や課題解決のための能力を身につける。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	オリエンテーション	
	2	研究課題発見方法の習得①	
	3	研究課題発見方法の習得②	
	4	研究課題発見方法の習得③	
	5	情報収集能力の習得①	
	6	情報収集能力の習得②	
	7	研究手法の習得①	
	8	研究手法の習得②	
	9	計画発表会①	
	10	計画発表会②	
	12	研究結果の解析方法の習得①	
	13	研究結果の解析方法の習得②	
	14	研究結果の解析方法の習得③	
	15	研究結果の解析方法の習得④	
	16	研究結果の取りまとめ方法の習得①	
	17	研究結果の取りまとめ方法の習得②	
	18	研究結果の取りまとめ方法の習得③	
	19	研究結果の取りまとめ方法の習得④	
	20	成果発表能力の習得①	
	21	成果発表能力の習得②	
	22	成果発表能力の習得③	
	23	成果発表能力の習得④	
	24	論文作成能力の習得①	
	25	論文作成能力の習得②	
	26	論文作成能力の習得③	
	27	発表会①	
	28	発表会②	
	29	発表会③	
	30	発表会④	
キーワード	生産技術、地域活性化、経営		
教科書・参考書	適宜、資料を配布する。		
評価方法・評価基準	レポート(80%)、プレゼンテーション(20%)		
関連科目	すべての科目		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

9. <教育課程が不明確>

本学設置の意義として掲げるAIやIoTなどの先端技術の農林業分野への導入を実現するために学ぶ科目が十分に配置されているか疑義がある。先端技術への対応力を担保するための資質・能力を教育課程においてどのように育成するのか、対応する授業科目を示しつつ具体的に説明するか、必要に応じて修正すること。

(対応)

先端技術を学ぶ科目であることが不明確であった科目についてシラバスの記載内容を修正するとともに、一部の科目に先端技術に関する内容を追加し、「授業科目の概要」を修正する。

その上で、農林業分野での先端技術を学ぶ科目の配置状況を示すとともに、授業科目の内容を具体的に示し、先端技術への対応力を担保する教育課程となっていることを説明する。(別添資料9：先端技術について学ぶ科目)

(詳細説明)

これからの農林業においては、従来の経験知や労働集約型の管理から、AIやIoTなどの先端技術を活用した管理への転換が必要となることから、先端技術を利用した農林業の経営や生産について幅広く学ぶ「農林業のための先端技術」と、先端技術の実例を学ぶ「総合実習」を必修科目として配置し、これらに加えて、専攻するコース別の講義や実習で、より専門的な知識を身に付けることとする。

栽培コースでは、データに基づく細やかな栽培である精密農業を学ぶ「作物学」と、農業の生産現場で導入が進むICTを活用した栽培施設の環境制御を学ぶ「園芸学」を選択科目として配置する。また、実習を通じて先端技術を利用した生産技術や生産管理について学ぶ「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ(栽培)」、POSシステムを活用したマーチャンダイジングなどについて学ぶ「販売管理論」及び「販売実習」をコース必修科目として配置する。

林業コースでは、森林管理における地理情報システム(森林GIS)と森林・林業分野のICT利活用、リモートセンシング技術などについて学ぶ「森林計画・政策論」及び「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ(林業)」、林業機械を用いた木材生産システムについて学ぶ「木材生産システム」及び「林業機械実習」、IoTやICTを活用した木材流通について学ぶ「木材利用・流通論」をコース必修科目として配置する。

畜産コースでは、自動給餌システムやロボット搾乳などについて学ぶ「家畜飼養学」及び「生産マネジメント実習Ⅰ・Ⅱ(畜産)」、POSシステムを活用したマーチャンダイジングなどについて学ぶ「販売管理論」及び「販売実習」をコース必修科目として配置する。

< 農林業分野での先端技術を学ぶ科目の配置状況 > (● : 必修、◎ : コース必修)

区分	1年	2年	3年
共通	●総合実習		●農林業のための先端技術
栽培		作物学 または 園芸学 ◎生産マネジメント実習Ⅰ (栽培)	◎生産マネジメント実習Ⅱ (栽培) ◎販売管理論 ◎販売実習
林業		◎森林計画・政策論 ◎木材生産システム ◎木材利用・流通論 ◎生産マネジメント実習Ⅰ (林業)	◎生産マネジメント実習Ⅱ (林業) ◎林業機械実習
畜産		◎家畜飼養学 ◎生産マネジメント実習Ⅰ (畜産)	◎生産マネジメント実習Ⅱ (畜産) ◎販売管理論 (再掲) ◎販売実習 (再掲)

(新旧対照表) 授業科目の概要

<p>新</p>	<p>(10 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="312 277 596 779"> <p>森林計画・政策論</p> </td> <td data-bbox="596 277 1295 779"> <p>(概要) 森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、森林計画制度等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた森林認証制度を学ぶとともに、地球環境問題等の各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。また、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における地理情報システム(森林GIS)と森林・林業分野のICT利活用、UAVや衛星画像等を用いたリモートセンシング技術等について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4) 逢坂興宏/7回) 森林調査の方法論 (10) 平岡裕一郎/3回) リモートセンシング技術 (27) 近藤晃/5回) 森林政策の歴史と制度</p> </td> </tr> </table>	<p>森林計画・政策論</p>	<p>(概要) 森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、森林計画制度等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた森林認証制度を学ぶとともに、地球環境問題等の各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。また、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における地理情報システム(森林GIS)と森林・林業分野のICT利活用、UAVや衛星画像等を用いたリモートセンシング技術等について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4) 逢坂興宏/7回) 森林調査の方法論 (10) 平岡裕一郎/3回) リモートセンシング技術 (27) 近藤晃/5回) 森林政策の歴史と制度</p>
<p>森林計画・政策論</p>	<p>(概要) 森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、森林計画制度等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた森林認証制度を学ぶとともに、地球環境問題等の各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。また、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における地理情報システム(森林GIS)と森林・林業分野のICT利活用、UAVや衛星画像等を用いたリモートセンシング技術等について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4) 逢坂興宏/7回) 森林調査の方法論 (10) 平岡裕一郎/3回) リモートセンシング技術 (27) 近藤晃/5回) 森林政策の歴史と制度</p>		
<p>旧</p>	<p>(9 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="304 853 596 1308"> <p>森林計画・政策論</p> </td> <td data-bbox="596 853 1295 1308"> <p>(概要) 森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点にたった計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における森林GISの基本的仕組、現場への応用法等について学ぶ。また、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、保安林制度、森林計画制度、補助金、国有林、民有林、木材生産・流通等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4) 逢坂興宏/8回) 森林調査の方法論 (30) 近藤晃/7回) 森林政策の歴史と制度</p> </td> </tr> </table>	<p>森林計画・政策論</p>	<p>(概要) 森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点にたった計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における森林GISの基本的仕組、現場への応用法等について学ぶ。また、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、保安林制度、森林計画制度、補助金、国有林、民有林、木材生産・流通等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4) 逢坂興宏/8回) 森林調査の方法論 (30) 近藤晃/7回) 森林政策の歴史と制度</p>
<p>森林計画・政策論</p>	<p>(概要) 森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点にたった計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における森林GISの基本的仕組、現場への応用法等について学ぶ。また、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、保安林制度、森林計画制度、補助金、国有林、民有林、木材生産・流通等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4) 逢坂興宏/8回) 森林調査の方法論 (30) 近藤晃/7回) 森林政策の歴史と制度</p>		
<p>新</p>	<p>(12 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="256 1429 560 1693"> <p>家畜飼養学</p> </td> <td data-bbox="560 1429 1295 1693"> <p>牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解することが重要である。本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容として環境負荷物質を含む排せつ物の成分制御法や労働の負担低減を図る自動給餌やロボット搾乳などの先端技術の導入是非などを学ぶ。</p> </td> </tr> </table>	<p>家畜飼養学</p>	<p>牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解することが重要である。本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容として環境負荷物質を含む排せつ物の成分制御法や労働の負担低減を図る自動給餌やロボット搾乳などの先端技術の導入是非などを学ぶ。</p>
<p>家畜飼養学</p>	<p>牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解することが重要である。本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容として環境負荷物質を含む排せつ物の成分制御法や労働の負担低減を図る自動給餌やロボット搾乳などの先端技術の導入是非などを学ぶ。</p>		
<p>旧</p>	<p>(10 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="256 1765 560 1975"> <p>家畜飼養学</p> </td> <td data-bbox="560 1765 1295 1975"> <p>牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解することが重要である。本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容としてその対策の理由を理解することを目的とする。</p> </td> </tr> </table>	<p>家畜飼養学</p>	<p>牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解することが重要である。本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容としてその対策の理由を理解することを目的とする。</p>
<p>家畜飼養学</p>	<p>牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解することが重要である。本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容としてその対策の理由を理解することを目的とする。</p>		

<p>新</p>	<p>(19 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="256 264 552 837"> <p>総合実習</p> </td> <td data-bbox="552 264 1278 837"> <p>水稻、茶、野菜、果樹、花卉、畜産、林業の生産管理に関わる知識や技術を学ぶため、実習や生産現場の見学を通じ、農業現場に即した農業の実学の基本を学ぶ。また、これらの実習等を通じて、農林業を総合的に理解する能力と態度を養う。野菜栽培の「総合実習」においては、露地野菜及び施設野菜の両面から、野菜栽培の基本技術について、現地の農業者の栽培に即した栽培の工程や栽培の管理、防除の技術、収穫作業など実習体験を通じた技能を学ぶ。</p> <p>(オムニバス/全30回)</p> <p>(14 太田智/4回) 果樹栽培：果樹の樹種別の枝管理と着果管理、接木・挿し木</p> <p>(15 相蘇春菜/2回) 林業：木材の樹種同定</p> <p>(17 大石竜/4回) 野菜栽培（施設）：環境制御システムの利用法</p> <p>(18 貞弘恵/4回) 畜産：酪農施設、乳業メーカー見学</p> <p>(31 中根健/4回) 作物栽培：田植え</p> <p>(32 中野敬之/4回) 茶栽培：摘採、製茶</p> <p>(36 五十右薫/4回) 花き栽培：播種、鉢上げ、収穫・調整</p> <p>(38 坂口良介 37 増田壽彦/4回) 野菜栽培（露地）：露地野菜の播種、育苗、定植</p> </td> </tr> </table>	<p>総合実習</p>	<p>水稻、茶、野菜、果樹、花卉、畜産、林業の生産管理に関わる知識や技術を学ぶため、実習や生産現場の見学を通じ、農業現場に即した農業の実学の基本を学ぶ。また、これらの実習等を通じて、農林業を総合的に理解する能力と態度を養う。野菜栽培の「総合実習」においては、露地野菜及び施設野菜の両面から、野菜栽培の基本技術について、現地の農業者の栽培に即した栽培の工程や栽培の管理、防除の技術、収穫作業など実習体験を通じた技能を学ぶ。</p> <p>(オムニバス/全30回)</p> <p>(14 太田智/4回) 果樹栽培：果樹の樹種別の枝管理と着果管理、接木・挿し木</p> <p>(15 相蘇春菜/2回) 林業：木材の樹種同定</p> <p>(17 大石竜/4回) 野菜栽培（施設）：環境制御システムの利用法</p> <p>(18 貞弘恵/4回) 畜産：酪農施設、乳業メーカー見学</p> <p>(31 中根健/4回) 作物栽培：田植え</p> <p>(32 中野敬之/4回) 茶栽培：摘採、製茶</p> <p>(36 五十右薫/4回) 花き栽培：播種、鉢上げ、収穫・調整</p> <p>(38 坂口良介 37 増田壽彦/4回) 野菜栽培（露地）：露地野菜の播種、育苗、定植</p>
<p>総合実習</p>	<p>水稻、茶、野菜、果樹、花卉、畜産、林業の生産管理に関わる知識や技術を学ぶため、実習や生産現場の見学を通じ、農業現場に即した農業の実学の基本を学ぶ。また、これらの実習等を通じて、農林業を総合的に理解する能力と態度を養う。野菜栽培の「総合実習」においては、露地野菜及び施設野菜の両面から、野菜栽培の基本技術について、現地の農業者の栽培に即した栽培の工程や栽培の管理、防除の技術、収穫作業など実習体験を通じた技能を学ぶ。</p> <p>(オムニバス/全30回)</p> <p>(14 太田智/4回) 果樹栽培：果樹の樹種別の枝管理と着果管理、接木・挿し木</p> <p>(15 相蘇春菜/2回) 林業：木材の樹種同定</p> <p>(17 大石竜/4回) 野菜栽培（施設）：環境制御システムの利用法</p> <p>(18 貞弘恵/4回) 畜産：酪農施設、乳業メーカー見学</p> <p>(31 中根健/4回) 作物栽培：田植え</p> <p>(32 中野敬之/4回) 茶栽培：摘採、製茶</p> <p>(36 五十右薫/4回) 花き栽培：播種、鉢上げ、収穫・調整</p> <p>(38 坂口良介 37 増田壽彦/4回) 野菜栽培（露地）：露地野菜の播種、育苗、定植</p>		
<p>旧</p>	<p>(17 ページ)</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="256 893 552 1467"> <p>総合実習</p> </td> <td data-bbox="552 893 1278 1467"> <p>(概要)</p> <p>水稻、茶、野菜、果樹、花卉、畜産、林業の生産管理に関わる知識や技術を学ぶため、実習や生産現場の見学を通じ、農業現場に即した農業の実学の基本を学ぶ。また、これらの実習等を通じて、農林業を総合的に理解する能力と態度を養う。また、畜産関連施設や、ICTやIoTを活用したスマート農業の視察を通じ、農林業の先端技術の現状について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(14 太田智/4回) 果樹栽培：果樹の樹種別の枝管理と着果管理、接木・挿し木</p> <p>(15 相蘇春菜/2回) 林業：木材の樹種同定</p> <p>(17 大石竜/4回) 野菜栽培（施設）：環境制御システムの利用法</p> <p>(18 貞弘恵/4回) 畜産：酪農施設、乳業メーカー見学</p> <p>(28 中根健/4回) 作物栽培：田植え</p> <p>(29 中野敬之/4回) 茶栽培：摘採、製茶</p> <p>(31 五十右薫/4回) 花き栽培：播種、鉢上げ、収穫・調整</p> <p>(32 増田壽彦、33 坂口良介/4回) (共同) 野菜栽培（露地）：露地野菜の栽培管理、スマート農業の視察</p> </td> </tr> </table>	<p>総合実習</p>	<p>(概要)</p> <p>水稻、茶、野菜、果樹、花卉、畜産、林業の生産管理に関わる知識や技術を学ぶため、実習や生産現場の見学を通じ、農業現場に即した農業の実学の基本を学ぶ。また、これらの実習等を通じて、農林業を総合的に理解する能力と態度を養う。また、畜産関連施設や、ICTやIoTを活用したスマート農業の視察を通じ、農林業の先端技術の現状について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(14 太田智/4回) 果樹栽培：果樹の樹種別の枝管理と着果管理、接木・挿し木</p> <p>(15 相蘇春菜/2回) 林業：木材の樹種同定</p> <p>(17 大石竜/4回) 野菜栽培（施設）：環境制御システムの利用法</p> <p>(18 貞弘恵/4回) 畜産：酪農施設、乳業メーカー見学</p> <p>(28 中根健/4回) 作物栽培：田植え</p> <p>(29 中野敬之/4回) 茶栽培：摘採、製茶</p> <p>(31 五十右薫/4回) 花き栽培：播種、鉢上げ、収穫・調整</p> <p>(32 増田壽彦、33 坂口良介/4回) (共同) 野菜栽培（露地）：露地野菜の栽培管理、スマート農業の視察</p>
<p>総合実習</p>	<p>(概要)</p> <p>水稻、茶、野菜、果樹、花卉、畜産、林業の生産管理に関わる知識や技術を学ぶため、実習や生産現場の見学を通じ、農業現場に即した農業の実学の基本を学ぶ。また、これらの実習等を通じて、農林業を総合的に理解する能力と態度を養う。また、畜産関連施設や、ICTやIoTを活用したスマート農業の視察を通じ、農林業の先端技術の現状について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(14 太田智/4回) 果樹栽培：果樹の樹種別の枝管理と着果管理、接木・挿し木</p> <p>(15 相蘇春菜/2回) 林業：木材の樹種同定</p> <p>(17 大石竜/4回) 野菜栽培（施設）：環境制御システムの利用法</p> <p>(18 貞弘恵/4回) 畜産：酪農施設、乳業メーカー見学</p> <p>(28 中根健/4回) 作物栽培：田植え</p> <p>(29 中野敬之/4回) 茶栽培：摘採、製茶</p> <p>(31 五十右薫/4回) 花き栽培：播種、鉢上げ、収穫・調整</p> <p>(32 増田壽彦、33 坂口良介/4回) (共同) 野菜栽培（露地）：露地野菜の栽培管理、スマート農業の視察</p>		

(新旧対照表) シラバス

(新) 33 ページ

授業名 森林計画・政策論 Forest Planning and Forest Policy		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	逢坂興宏、平岡裕一郎、近藤晃
授業時間	水曜日 1 時限	教室	講義室 5
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点にたった計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、森林計画制度等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた森林認証制度を学ぶとともに、地球環境問題等の新たな政策課題についても考察する。また、これらの森林計画策定に必要な森林の各種調査法、森林管理における地理情報システム(森林GIS)と森林・林業分野のICT利活用、UAVや衛星画像等を用いたリモートセンシング技術等について学ぶ。		
授業目的・目標	森林計画策定に必要な森林の調査法、森林管理における森林GISの基本的仕組、現場への応用法、リモートセンシング技術について理解する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	森林政策の歴史 (近藤晃)	
	2	森林・林業基本法 (近藤晃)	
	3	森林計画制度 (近藤晃)	
	4	森林認証制度 (近藤晃)	
	5	地球環境問題 (近藤晃)	
	6	測量 1 : 基準点測量、GNSS測量 (逢坂興宏)	
	7	測量 2 : 空中写真判読 (逢坂興宏)	
	8	森林計測 1 : 林分調査、測樹 (逢坂興宏)	
	9	森林計測 2 : UAV、レーザ計測 (逢坂興宏)	
	10	森林GIS 1 : GISの基礎 (逢坂興宏)	
	11	森林GIS 2 : GISの活用 (逢坂興宏)	
	12	森林・林業分野におけるICT利活用事例 (逢坂興宏)	
	13	森林リモートセンシング (平岡裕一郎)	
	14	リモートセンシングの基礎 (平岡裕一郎)	
15	リモートセンシングによる森林管理 (平岡裕一郎)		
キーワード	測量、空中写真、林分調査、測樹、森林GIS、リモートセンシング、森林・林業基本法、森林計画制度、森林認証制度		
教科書・参考書	森林計画学 (木平勇吉)、配付資料		
評価方法・評価基準	試験 (50%)、課題 (50%)		
関連科目	森林土木学、木材生産システム、森林マネジメント		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 森林計画・政策論 (英名) Forest Planning and Forest Policy		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	1年前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	逢坂興宏、近藤晃
授業時間	月曜日 3 時限	教室	講義室 3
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点にたった計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における森林GISの基本的仕組、現場への応用法等について学ぶ。また、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、保安林制度、森林計画制度、補助金、国有林、民有林、木材生産・流通等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。		
授業目的・目標	森林計画策定に必要な森林の調査法、森林管理における森林GISの基本的仕組、現場への応用法等について学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	測量 1 : トラバース測量	
	2	測量 2 : 三角測量	
	3	測量 3 , 空中写真測量	
	4	森林計測 1 : 林分調査	
	5	森林計測 2 : 測樹	
	6	森林GIS 1	
	7	森林GIS 2	
	8	森林GIS 3	
	9	森林政策の歴史	
	10	森林・林業基本法	
	11	森林計画制度	
	12	保安林制度	
	13	森林情報システム	
	14	森林認証制度	
15	地球環境問題		
キーワード	測量、空中写真、林分調査、測樹、森林GIS、森林・林業基本法、森林計画制度、森林認証制度		
教科書・参考書	森林計画学 (木平勇吉)、配付資料		
評価方法・評価基準	試験 (50%)、課題 (50%)		
関連科目	森林経営学		
履修要件			
備考			

授業名 家畜飼養学 Animal Feeding		単位数 2単位 履修年次	授業の方法 講義 2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	祐森誠司
授業時間	木曜日3時限	教室	講義室3
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解するとともに大規模経営に欠くことのできない自動給餌や除糞、さらに搾乳などの機械化の解説も含む。		
授業目的・目標	本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容としてその対策の理由を理解する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	家畜飼養学を学ぶ理由、専門用語の解説	
	2	家畜のライフサイクル	
	3	栄養要求に対するフェーズフィーディングと排せつ物成分の関係	
	4	養分要求量に影響する環境(暑熱、寒冷)要因	
	5	栄養障害(欠乏症)について	
	6	栄養障害(過剰症)について	
	7	乳牛の養分要求量について	
	8	乳牛への飼料給与の特徴と搾乳の自動化(ロボット搾乳)	
	9	肉牛の養分要求量	
	10	肉牛への飼料給与の特徴(首輪等の装着信号による個体識別管理)	
	11	豚の養分要求量	
	12	豚への飼料給与の特徴(大規模化による自動給餌システム)	
	13	家禽の養分要求量	
	14	家禽への飼料給与の特徴(大規模化による自動給餌システム)	
15	総合的なまとめ		
キーワード	家畜[牛、豚、家禽]、栄養、飼料、管理、消化吸収、飼養標準		
教科書・参考書	動物飼養学 石橋 晃他編、(株)養賢堂		
評価方法・評価基準	試験(70%)、課題(30%)		
関連科目	飼料総論、家畜衛生学など、動物生産に関わる科目および、飼料作物関連の科目。		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 家畜飼養学 Animal Feeding		単位数 2単位	授業の方法 講義	
		履修年次	1年 後期	
受講対象	生産環境経営学部			
授業コード	8910234	教員名	祐森誠司	
授業時間	火曜日5時限	教室	講義室3	
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡			
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp			
授業概要	牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解する。			
授業目的・目標	本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容としてその対策の理由を <u>理解する</u> 。			
授業計画・内容	回数	内容		
	1	家畜飼養学を学ぶ理由、専門用語の解説		
	2	家畜のライフサイクル		
	3	栄養要求に対するフェーズフィーディング		
	4	養分要求量に影響する環境(暑熱、寒冷)要因		
	5	栄養障害(欠乏症)について		
	6	栄養障害(過剰症)について		
	7	乳牛の養分要求量について		
	8	乳牛への飼料給与の特徴		
	9	肉牛の養分要求量		
	10	肉牛への飼料給与の特徴		
	11	豚の養分要求量		
	12	豚への飼料給与の特徴		
	13	家禽の養分要求量		
	14	家禽への飼料給与の特徴		
15	総合的なまとめ			
キーワード	家畜〔牛、豚、家禽〕、栄養、飼料、管理、消化吸収、飼養標準			
教科書・参考書	動物飼養学 石橋 晃他編、(株)養賢堂			
評価方法・評価基準	試験(70%)、課題(30%)			
関連科目	飼料総論、家畜衛生学など、動物生産に関わる科目および、飼料作物関連の科目。			
履修要件	特になし			
備考	特になし			

授業名 農林業のための先端技術 Advanced technology for Agriculture and Forestry		単位数 2 単位	授業の方法 講義
		履修年次	3 年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	松尾和之
授業時間	水曜日 4 時限	教室	講義室14
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	<p>各種センサー、モニタリング手法、AI（人工知能）、ロボット等の技術について技術革新が進む中、農業においてもこれら情報科学と農業科学の融合が求められている。これは経営の大規模化、軽労化技術や安全な農産物への要望、気象災害の増加に対して、従来の経験知や労働集約型管理による農業から、情報処理・機械制御技術を活用した農業への変換であり、その適用場面も施設栽培だけでなく土地利用型農業にも及んでいる。また、我が国では実用化はされていないもの、多収やストレス耐性の強化等を目標とした遺伝子組み替えに関する研究が進められており、温暖化や水不足の深刻化が予想される中、農業生産の安定化の手段として有望視されている。本授業では、これら先端技術の導入や研究開発を学ぶことで、将来の農業経営に資する。</p>		
授業目的・目標	センサー、リモートセンシング、AI、自動・ロボット化などの最新の情報処理、農業機械、植物工場など最新の栽培施設の技術、バイオセンサなど、最新の農林業技術について学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	農業を取り巻く情勢（大規模化、軽労化、安全性・高品質化、気象災害）	
	2	情報科学と農業科学の融合（経験知型、労働集約型農業のからの脱却）	
	3	施設型農業における情報科学の利用	
	4	土地利用型農業における情報科学の利用：ストレス評価	
	5	土地利用型農業でのロボティクス・ドローンを活用した栽培管理	
	6	収量コンバインやGPS情報を用いた生産性情報の取得	
	7	フィールドサーバー等IoTによる作物生育情報の収集技術	
	8	農作業の無人化・軽労化技術開発の現状	
	9	農業におけるAI活用（膨大な研究情報・経験知をもとにした意思決定）	
	10	農業におけるAI活用（画像解析による生育診断と栽培管理）	
	11	農業経営におけるAI、IoT等のツールの活用	
	12	遺伝子情報の活用：遺伝子情報の基本とGMO作物の位置づけ	
	13	遺伝子情報：遺伝子マーカーによる育種選抜の効率化	
	14	遺伝子導入：遺伝子組替技術についての研究の現状と成果	
15	革新的技術の農業システム導入にあたっての問題		
キーワード	情報科学と農業科学の融合、生育診断、無人化、軽労化、遺伝子情報、組み替え技術		
教科書・参考書	<p>・授業毎に資料を配布する。</p> <p>参考書：精密農業（渋沢）、農業研究機構、国際農林水産業研究センター等の成果情報、学術論文をもとにしたスライド類</p>		
評価方法・評価基準	レポート（100%）		
関連科目	農学概論		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 農林業のための先端技術 Advanced technology for Agriculture and Forestry		単位数 2単位	授業の方法 講義
		履修年次	3年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	松尾和之
授業時間	金曜日 3時限	教室	講義室14
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	各種センサー、モニタリング手法、AI（人工知能）、ロボット等の技術について技術革新が進む中、農業においてもこれら情報科学と農業科学の融合が求められている。これは経営の大規模化、軽労化技術や安全な農産物への要望、気象災害の増加に対して、従来の経験知や労働集約型管理による農業から、情報処理・機械制御技術を活用した農業への変換であり、その適用場面も施設栽培だけでなく土地利用型農業にも及んでいる。また、我が国では実用化はされていないもの、多収やストレス耐性の強化等を目標とした遺伝子組み替えに関する研究が進められており、温暖化や水不足の深刻化が予想される中、農業生産の安定化の手段として有望視されている。本授業では、これら先端技術の導入や研究開発を学ぶことで、将来の農業経営に資する。		
授業目的・目標	センサー、リモートセンシング、AI、自動・ロボット化などの最新の情報処理、農業機械、植物工場など最新の栽培施設の技術、バイオセンサなど、最新の農林業技術について学ぶ。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	農業を取り巻く情勢（大規模化、軽労化、安全性・高品質化、気象災害）	
	2	情報科学と農業科学の融合（経験知型、労働集約型農業のからの脱却）	
	3	施設型農業における情報科学の利用	
	4	土地利用型農業における情報科学の利用：ストレス評価	
	5	土地利用型農業でのロボティクス・ドローンを活用した栽培管理	
	6	収量コンバインやGPS情報を用いた生産性情報の取得	
	7	フィールドサーバー等IoTによる作物生育情報の収集と活用	
	8	農作業の無人化技術開発の現状	
	9	農作業の軽労化技術開発の現状	
	10	農業におけるAI活用（膨大な研究情報・経験知をもとにした意思決定）	
	11	農業におけるAI活用（画像解析による生育診断と栽培管理）	
	12	遺伝子情報の活用：遺伝子情報の基本とGMO作物の位置づけ	
	13	遺伝子情報：遺伝子マーカーによる育種選抜の効率化	
	14	遺伝子導入：遺伝子組替技術についての研究の現状と成果	
15	革新的技術の農業システム導入にあたっての問題		
キーワード	情報科学と農業科学の融合、生育診断、無人化、軽労化、遺伝子情報、組み替え技術		
教科書・参考書	参考書：精密農業（渋沢）、農業研究機構、国際農林水産業研究センター等の成果情報、学術論文をもとにしたスライド類		
評価方法・評価基準	レポート（100%）		
関連科目	農学概論		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

10. <職業専門科目の配置が不十分>

専攻する職業分野における労働安全について理解を深める科目が十分に配置されているか疑義があるため、必要に応じて修正し、具体的に対応を説明すること。

(対応)

労働安全について学ぶ科目の配置状況を示し、また、「GAP演習」の授業内容を見直し、労働安全について理解を深める教育課程となっていることを説明する。

(詳細説明)

本学科では、労働安全について学ぶ科目として、「GAP演習」、「大型機械実習Ⅰ」、「労務管理」、「林業機械実習」、「木材生産システム」を配置しているが、今回の御意見を踏まえて検討し、それぞれ下記のように見直す。

労働安全について理解を深めるため、「GAP演習」、「大型機械実習Ⅰ」、「労務管理」を選択科目から、全コースの学生が履修する必修科目へ変更する。また、「GAP演習」は教育内容を見直し、単位数も1単位から2単位へ変更を行う。

GAP (GAP: Good Agriculture Practice、農業生産工程管理) は、農業において、食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取り組みであり、農業分野では重要な取り組みとなっている。このため、本学科ではGAPについて学ぶ「GAP演習」を配置し、この中で、機械設備の点検・整備、薬品・燃料等の適切な管理、安全作業のための保護具の着用等の労働安全への取り組みについて学ぶ。また、農作業事故死亡者数のうち、農業機械作業に係る事故が7割近くを占めている現状があることから「大型機械実習Ⅰ」の中で、大型機械の安全使用について学ぶ。さらに、経営者には、労働者が安心して安全に働けるよう労働関係法令の内容を正しく理解する必要があることから、「労務管理」を配置する。

以上に加え、林業は農業よりもさらに事故が多い実態を踏まえ、林業コースは、さらに、「木材生産システム」及び「林業機械実習」をコース必修とし、林業・林産業の労働災害の現状や策、基本的な救急法、林業機械の安全使用について学ぶ。

<労働安全を学ぶ科目> (●必修、◎コース必修)

	2年	3年
共通	●GAP演習 ●労務管理 ●大型機械実習Ⅰ	
林業コース	◎木材生産システム	◎林業機械実習

<新旧対照表>教育課程等の概要

新					旧							
(2 ページ)					(2 ページ)							
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			
			必修	選択	自由				必修	選択	自由	
②職業専門科目	経営管理	簿記基礎	1前		1	②職業専門科目	経営管理	簿記基礎	1前			
		簿記応用	1後		1			簿記応用	1後		1	
		フードシステム論	1後					農と食の経済学	1前			2
		法と農業経営	2前	2				法と農業経営	1後	2		
		経営管理論	2前	2				経営管理論	1後	2		
		農林業経営学	1後	2				農林業経営学	2前			2
		経営戦略	2前	2				経営戦略Ⅰ	2後	2		
		マーケティング論	2後	2				経営戦略Ⅱ	3前			2
		財務会計	2前	2				マーケティング論	2後	2		
		管理会計	3前	1				財務会計	2前	2		
		農林業の経営組織論	3前		2			管理会計	3前			2
		労務管理	2後	2				経営組織論	2前			2
		人材マネジメント	3前		2			労務管理	2後			2
		知的財産権	3後		2			人材マネジメント	3前			2
		農と食の起業論	3後		2			協同組合論	3前			1
経営実習Ⅰ	4前	5		知的財産権	3後			2				
経営実習Ⅱ	4後	5		農と食の起業論	3後	2						
(3 ページ)					(3 ページ)							
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			
			必修	選択	自由				必修	選択	自由	
②職業専門科目	生産技術	大型機械実習Ⅰ	2前	2		②職業専門科目	実習・演習	大型機械実習Ⅰ	2前		2	
		大型機械実習Ⅱ	3前		2			大型機械実習Ⅱ	3前		2	
		林業機械実習	3前		2			林業機械実習	3前		2	
		GAP演習	2前	2				GAP演習	2後		2	
		企業実習	3後	10				企業実習	3後	10		
		小計(93科目)	-	45	150			12	小計(95科目)	-	36	165

<新旧対照表>授業科目の概要

<p>新</p>	<p>(21 ページ)</p> <table border="1" data-bbox="320 277 1289 730"> <tr> <td data-bbox="320 277 600 730"> <p>GAP演習</p> </td> <td data-bbox="600 277 1289 730"> <p>(概要)</p> <p>GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理などの持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、JGAPやGLOBALG.A.P.などの認証制度がある。本科目では、GAPの定義や導入されている背景、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理に係るGAP規範、GAP認証制度などの基礎知識について学び、GAPの実践方法について演習を通じて習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(18 貞弘恵/5回) GAPの実践 (畜産編)</p> <p>(25 杉山泰之/20回) GAPの定義と導入の背景、GAP規範、GAP認証制度</p> <p>(33 坂口良介/5回) GAPの実践 (栽培編)</p> </td> </tr> </table>	<p>GAP演習</p>	<p>(概要)</p> <p>GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理などの持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、JGAPやGLOBALG.A.P.などの認証制度がある。本科目では、GAPの定義や導入されている背景、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理に係るGAP規範、GAP認証制度などの基礎知識について学び、GAPの実践方法について演習を通じて習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(18 貞弘恵/5回) GAPの実践 (畜産編)</p> <p>(25 杉山泰之/20回) GAPの定義と導入の背景、GAP規範、GAP認証制度</p> <p>(33 坂口良介/5回) GAPの実践 (栽培編)</p>
<p>GAP演習</p>	<p>(概要)</p> <p>GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理などの持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、JGAPやGLOBALG.A.P.などの認証制度がある。本科目では、GAPの定義や導入されている背景、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理に係るGAP規範、GAP認証制度などの基礎知識について学び、GAPの実践方法について演習を通じて習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(18 貞弘恵/5回) GAPの実践 (畜産編)</p> <p>(25 杉山泰之/20回) GAPの定義と導入の背景、GAP規範、GAP認証制度</p> <p>(33 坂口良介/5回) GAPの実践 (栽培編)</p>		
<p>旧</p>	<p>(19 ページ)</p> <table border="1" data-bbox="320 815 1289 1200"> <tr> <td data-bbox="320 815 600 1200"> <p>GAP演習</p> </td> <td data-bbox="600 815 1289 1200"> <p>GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、J-GAPやG-GAPなどの認証制度がある。本科目では、GAPの定義や導入されている背景、GAP規範、GAP認証制度などの基礎知識について学び、GAPの実践方法について演習を通じて習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(18 貞弘恵/3回) GAPの実践 (畜産編)</p> <p>(27 杉山泰之/9回) GAPの定義と導入の背景、GAP規範、GAP認証制度</p> <p>(38 坂口良介/3回) GAPの実践演習 (栽培編)</p> </td> </tr> </table>	<p>GAP演習</p>	<p>GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、J-GAPやG-GAPなどの認証制度がある。本科目では、GAPの定義や導入されている背景、GAP規範、GAP認証制度などの基礎知識について学び、GAPの実践方法について演習を通じて習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(18 貞弘恵/3回) GAPの実践 (畜産編)</p> <p>(27 杉山泰之/9回) GAPの定義と導入の背景、GAP規範、GAP認証制度</p> <p>(38 坂口良介/3回) GAPの実践演習 (栽培編)</p>
<p>GAP演習</p>	<p>GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、J-GAPやG-GAPなどの認証制度がある。本科目では、GAPの定義や導入されている背景、GAP規範、GAP認証制度などの基礎知識について学び、GAPの実践方法について演習を通じて習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(18 貞弘恵/3回) GAPの実践 (畜産編)</p> <p>(27 杉山泰之/9回) GAPの定義と導入の背景、GAP規範、GAP認証制度</p> <p>(38 坂口良介/3回) GAPの実践演習 (栽培編)</p>		

<新旧対照表>シラバス

(新) 79 ページ

授業名 GAP演習 GAP Seminar		単位数 2単位	授業の方法 演習
		履修年次	2年 前期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	杉山泰之、坂口良介、貞弘恵
授業時間	水曜日 4, 5時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	GAP (Good Agricultural Practice: 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理などの持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、JGAPやGLOBALG.A.P.などの認証制度がある。		
授業目的・目標	GAPの定義や導入されている背景、GAP規範、GAP認証制度などの基礎知識について学び、GAPの実践方法について演習やフィールドワークを通じて習得する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	GAPの概要 (杉山泰之)	
	2	土壌と作物の栄養管理 (杉山泰之)	
	3	農場における水管理 (杉山泰之)	
	4	作物保護と廃棄物の取扱い (杉山泰之)	
	5	農場内の施設・資材管理 (杉山泰之)	
	6	農産物の安全性と食品衛生 (杉山泰之)	
	7	労働安全の確保 (杉山泰之)	
	8	農業管理の作業手順づくりと周知方法・社員教育の必要性 (杉山泰之)	
	9	人権保護(杉山泰之)	
	10	農場経営管理(杉山泰之)	
	11	リスク評価 (杉山泰之)	
	12	リスクの回避と模擬演習 (杉山泰之)	
	13	モデル農場のリスク調査 (フィールドワーク) (杉山泰之)	
	14	モデル農場のリスク調査 (フィールドワーク) (杉山泰之)	
	15	モデル農場のリスク評価 (グループワーク) (杉山泰之)	
	16	モデル農場のリスク評価 (グループワーク) (杉山泰之)	
	17	リスク評価の発表・検討 (杉山泰之)	
	18	リスク評価の発表・検討 (杉山泰之)	
	19	GAP認証の取得方法 (杉山泰之)	
	20	GAP認証の取得方法 (杉山泰之)	
	21	畜産実践編 飼養衛生と環境保全 (貞弘恵)	
	22	畜産実践編 アニマルウェルフェアに対応した飼養管理 (貞弘恵)	
	23	畜産実践編 畜産物生産工程におけるリスク管理 (貞弘恵)	
	24	畜産実践編 生産資材 (動物用医薬品・精液・受精卵・素畜・飼料・敷料) の管理 (貞弘恵)	
	25	畜産実践編 畜産現場における労働安全管理 (貞弘恵)	
	26	栽培実践編 施肥計画の検討 (坂口良介)	
	27	栽培実践編 防除計画の検討 (坂口良介)	
	28	栽培実践編 収穫作業方法の検討 (坂口良介)	
	29	栽培実践編 モデル圃場での改善実習 (坂口良介)	
	30	栽培実践編 モデル圃場での改善実習 (坂口良介)	
キーワード	農場管理、農産物、安全性、リスク、ハザード、J-GAP、G-GAP		
教科書・参考書	日本GAP協会「農場管理を“見える化”し、食の安全を確保する 実務者のための日本GAP協会 JGAP導入ガイドブック」、日本生産者GAP協会「日本GAP規範ver 1.1」 (幸書房)		
評価方法・評価基準	レポート (50%)、履修態度 (50%)		
関連科目	労務管理、大型機械実習Ⅰ・Ⅱ、栽培学、野菜園芸学、果樹園芸学、花き園芸学、家畜飼養学、家畜福祉学、飼料総論、自給飼料、畜産法規、家畜衛生学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

授業名 GAP 演習 (GAP Seminar)		単位数 2 単位	授業の方法 演習
		履修年次	2 年 後期
受講対象	生産環境経営学部		
授業コード	8910234	教員名	杉山泰之、坂口良介、貞弘恵
授業時間	火曜日 3, 4 時限	教室	講義室13
オフィスアワー	随時受け付ける、ただし事前にメール連絡		
メールアドレス	××@pref.shizuoka.lg.jp		
授業概要	GAP (Good Agricultural Practice : 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックである GAP 規範が定められており、J-GAP や G-GAP などの認証制度がある。		
授業目的・目標	GAP の定義や導入されている背景、GAP 規範、GAP 認証制度などの基礎知識について学び、GAP の実践方法について演習を通じて習得する。		
授業計画・内容	回数	内容	
	1	農場内の責任分担の明確化と生産環境の確認とリスク検討	
	2	土壌と作物の栄養管理	
	3	農場における水管理	
	4	農場内の施設・資材管理	
	5	廃棄物の取扱い	
	6	農産物の安全性と食品衛生	
	7	労働安全の確保	
	8	農業管理の作業手順づくりと周知方法・社員教育の必要性	
	9	記録の検証と自己審査	
	10	家畜衛生と環境対策	
	11	アニマルウェルフェアに対応した飼養管理	
	12	生産資材 (精液・受精卵・素畜・飼料・敷料) の管理	
	13	圃場管理と作物保護① (施肥計画の検討)	
	14	圃場管理と作物保護① (防除計画の検討)	
15	圃場管理と作物保護③ (収穫作業方法の検討)		
キーワード	農場管理、農産物、安全性、リスク、ハザード、J-GAP、G-GAP		
教科書・参考書	日本GAP協会「農場管理を“見える化”し、食の安全を確保する 実務者のための日本GAP協会 JGAP導入ガイドブック」、日本生産者GAP協会「日本GAP規範ver 1.1」(幸書房)		
評価方法・評価基準	レポート (50%)、履修態度 (50%)		
関連科目	家畜飼養学、家畜福祉学、飼料総論、自給飼料、畜産法規、家畜衛生学		
履修要件	特になし		
備考	特になし		

11. <展開科目の設定が不明確>

展開科目は、「専攻する特定の職業分野に関連する他分野の応用的な能力であって、当該職業の分野において創造的な役割を果たすために必要なものを育成する」ことを目的としているが、「環境保全型農業論」、「野生鳥獣管理・利用論」等、職業専門科目に位置付けるべき内容と考えられる科目が含まれている。展開科目を通じて育成する人材像を明確にし、必要な能力を修得するための科目を展開科目に配置するよう修正すること。

(対応)

展開科目を通じて育成する人材像を踏まえて展開科目に配置すべき科目を見直し、次の科目を展開科目から職業専門科目に変更する。

「環境保全型農業論」、「畜産環境学」、「森林マネジメント論」、「野生鳥獣管理・利用論」、「農と食の健康論」

また、展開科目を通じて育成する人材像と、必要な能力を修得するための科目についての説明を「設置の趣旨等を記載した書類」に追加する。

(詳細説明)

1 展開科目を通じて育成する人材像

本学において養成する人材像は、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てていくことができる人材」であり、そのための資質・能力を身に付けた農林業経営者を養成することとしている。

農山村の地域社会における将来のリーダーに求められる知識のうち、農山村の自然環境や景観の保全については、専門分野との一体性が高いため職業専門科目において学び、展開科目においては、農山村の伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会に関する知識を身に付けることとする。

一方、農林業は、年々、国内外の産地間競争が厳しさを増すとともに、消費者ニーズも多様化してきており、農林業経営を持続的に発展させていくためには、経営規模の拡大だけでなく、消費者ニーズの多様化等に対応して、農林業経営において新たな事業展開を生み出していく必要がある。

そのような農林業経営における新たな事業展開を生み出すための手段の一つとして、農山村に由来する様々な地域資源と農林業を結び付けることによる新たな価値の創造が考えられる。具体例としては、地域の特性を活かした観光農園や農家レストラン、農家民宿、農村体験などが考えられるが、こうした新たな事業展開を企画するためには、農山村の地域資源である伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会に関する知識を身に付けるとともに、それらを活用するための手法を理解することが必要となる。

これらのことから、本学においては、展開科目の学習を通じて、農山村の地域社会における

将来のリーダーに求められる農山村の伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会に関する知識を身に付けるとともに、農山村の伝統・文化などの地域資源を活用することにより、農林業経営に新たな事業展開を生み出すための創造力を備えた農林業経営者を養成するものとする。

2 必要な能力を修得するための科目

展開科目を通じて育成する人材像を踏まえて配置する科目を見直し、次の科目を展開科目から職業専門科目に変更する。

「環境保全型農業論」、「畜産環境学」、「森林マネジメント」、「野生鳥獣管理・利用論」、「農と食の健康論」

さらに、展開科目として、農山村の伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会について学ぶ科目を、以下のとおり配置することとする。

<展開科目> (●：必修科目)

区分	1年	2年	3年
農山村の 伝統・文 化の継承	●農山村田園地域公共学	●食文化論 ●農と食の哲学	●農村景域論 ●在来作物学
農山村の 地域社会		●農村社会論 ●医福食農連携論	●農山村デザイン演習 ●グリーン・ツーリズム論 ●コミュニティビジネス論

<新旧対照表> 教育課程等の概要

新					旧						
(3 ページ)					(3 ページ)						
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数		
			必修	選択	自由				必修	選択	自由
③ 展開科目	農山村の伝統・文化の継承	農山村田園地域公共学	1後	2		共通	農山村田園地域公共学	1後	2		
		農村景城論	3前	2							
		農と食の哲学	2前	2		環境保全	環境と農林業	2前		2	
		食文化論	2後	2			環境保全型農業論	4前		2	
		在来作物学	3前	2			森林マネジメント論	4前		2	
		農山村の地域社会	農村社会論	2前	2		畜産環境学	4前		2	
			農山村デザイン演習	3前	2		農村景城論	3前		2	
			医福食農連携論	2後	2	③ 展開科目	農村社会論	2前		2	
			グリーン・ツーリズム論	3前	2		農山村デザイン演習	2前		2	
			コミュニティビジネス論	3後	2		農と食の哲学	2前		2	
	小計(10科目)	-	20	0	0		農と食の健康論	2後		2	
							医福食農連携論	2後		2	
							グリーン・ツーリズム論	3前		2	
							食文化論	2後		2	
							コミュニティビジネス論	3前		2	
							在来作物学	3前		2	
							野生鳥獣管理・利用論	3前		2	
						小計(16科目)	-	2	30	0	

(設置の趣旨等を記載した書類)

新		旧	
(●ページ)		(21 ページ)	
4 教育課程の編成の考え方及び特色 (略)		4 教育課程の編成の考え方及び特色 (略)	
(4) 展開科目		(4) 展開科目	
<p>農山村の地域社会における将来のリーダーに求められる農山村の伝統・文化の継承や、伝統・文化を育む農山村の地域社会に関する知識を身に付けるとともに、農山村の伝統・文化などの地域資源を活用することにより、農林業経営に新たな事業展開を生み出すための創造力を備えた農林業経営者を養成するための科目を配置する。</p>		<p>農林業の新たな展開につながる応用的能力や、創造的役割を果たすために必要な能力を育成するため、農林業や農山村が持つ多面的機能を学ぶ科目を配置する。</p>	
<p>①農山村の伝統・文化の継承の科目群</p> <p>農山村の歴史や文化、多面的機能などについて学ぶ「農山村田園地域公共学」、</p>		<p>①環境保全の科目群</p> <p>環境保全科目群は5科目を配置する。農林業と環境の総論を学ぶ「環境と農林</p>	

新	旧
<p>日本や世界の食文化について学ぶ「<u>食文化論</u>」、農と食の営みの本質について考える「<u>農と食の哲学</u>」、農村に暮らす人々の生業と歴史文化との関係から農村景域について学ぶ「<u>農村景域論</u>」、<u>生きた文化財とも呼ばれる在来作物の過去・現在・未来について考える「在来作物学」</u>を必修科目として配置する。</p> <p>②農山村の地域社会の科目群</p> <p>農山村の生活や地域社会の特徴について学ぶ「<u>農村社会論</u>」、農山村において地域住民と交流し、地域や地域住民が抱える課題を発見し、その解決策を考える「<u>農山村デザイン演習</u>」、<u>グリーン・ツーリズムの現状・課題・展開について考える「グリーン・ツーリズム論</u>」、<u>農と医、農と福の連携について学ぶ「医福食農連携論</u>」、<u>地域が抱える課題を地域資源を活かしながらビジネス的な手法により解決する手法などについて学ぶ「コミュニティビジネス論」</u>を必修科目として配置する。</p> <p>(5) 総合科目 (略)</p>	<p>業」、農村の景観について学ぶ「<u>農村景域論</u>」、環境に配慮した農林業について学ぶ「<u>環境保全型農業論</u>」、<u>「森林マネジメント論</u>」、<u>「畜産環境学」</u>を配置する。</p> <p>②農山村振興の科目群</p> <p>農村と健康・福祉について学ぶ「<u>農村社会論</u>」、<u>「農山村デザイン演習</u>」、<u>「農と食の哲学</u>」、<u>「農と食の健康論</u>」、<u>「医福食農連携論</u>」、<u>農山村地域の資源とビジネスについて学ぶ「グリーン・ツーリズム論</u>」、<u>「食文化論</u>」、<u>「野生鳥獣管理・利用論</u>」、<u>「在来作物学</u>」、<u>「コミュニティビジネス論</u>」、<u>「在来作物学</u>」、<u>「野生鳥獣管理・利用論」</u>を配置する。</p> <p>(5) 総合科目 (略)</p>

12. <卒業要件の記載が不適切>

専門職大学制度において、実習等にかかる授業科目を40単位以上修得する必要があるが、学則や教育課程の概要の卒業要件において明確な指定がなく、必要な実習に関する単位数を修得することが担保されていないため、適切に改めること。

(対応)

学則や教育課程の概要の卒業要件において明確に指定し、実習にかかる授業科目の履修単位数が40単位以上であることを明確にするため記載を改める。

なお、卒業に必要な実習は下記のとおりであり、共通の必修の実習30単位である。なお、GAP演習及び農山村デザイン演習は演習による実習等代替授業科目とする。また、栽培コース及び畜産コースはコース必修の実習が12単位、林業コースはコース必修の実習が14単位である。このため、栽培コース及び畜産コースでは必修とコース必修を合わせた42単位、林業コースは44単位を学修する。

<必修科目>

項目	科目	単位数
共通	保健体育 I	2
	総合実習	2
	大型機械実習 I	2
	企業実習	10
	経営実習 I	5
	経営実習 II	5
	GAP 演習※	2
	農山村デザイン演習※	2
	小計	30

<コース必修科目>

項目	科目	単位数
栽培コース	圃場実習 (栽培)	2
	生産マネジメント実習 I (栽培)	4
	生産マネジメント実習 II (栽培)	4
	販売実習	2
	小計	12
林業コース	演習林実習	2
	生産マネジメント実習 I (林業)	4
	生産マネジメント実習 II (林業)	4
	林業機械実習	2
	木材加工実習	2
	小計	14
畜産コース	圃場実習 (畜産)	2
	生産マネジメント実習 I (畜産)	4
	生産マネジメント実習 II (畜産)	4
	販売実習	2
	小計	12

※演習による実習等代替授業科目

13. <臨地実務実習の具体的計画が不明確>

臨地実務実習について、具体的な説明が不足しているため、以下の点も踏まえて具体的な計画を示し、大学教育としてふさわしい実習水準が確保されていることを説明すること。その際、計画している実習要綱等を添付すること。

(1) 実習の内容や学生にどのような能力を獲得させるのか、ディプロマ・ポリシーも踏まえて具体的に説明すること。また、習得させようとする知識・技能及びその修得状況の評価方法・評価基準を計画している実習評価表を示し、具体的に説明すること。

(対応)

臨地実務実習の具体的な説明が不足していたため、臨地実務実習として配置している「企業実習」、「経営実習Ⅰ」、「経営実習Ⅱ」の内容について具体的に説明し、大学教育としての実習水準が確保されていることを説明する。また、計画している「臨地実務実習要綱」を添付する。さらに、設置の趣旨等について記載した書類に、臨地実務実習の内容を追記する。(別添資料13: 臨地実務実習要綱)

(詳細説明)

1 臨地実務実習の流れ

本学の養成する人材像は、「農林業経営体の中核を担う人材であるとともに、自らが農林業を営む農山村の自然環境や景観の保全、伝統・文化の継承などについて学び、農山村の地域社会における将来のリーダーとして、それらを守り育てていくことができる人材」である。

これを踏まえたディプロマポリシー3の「農林業生産現場の状況を的確に把握するための農林業生産に関する基礎的な知識・技術や農林業生産に活用される先端技術に関する知識」を身に付けるため、生産の知識や知識を学ぶ「企業実習」(3年次後期 必修10単位)を配置する。

また、ディプロマポリシー2の「農林業経営体の大規模化や経営の多角化に対応していくための経営管理能力、農林業経営に活用される先端技術や加工・流通・販売などに関する知識」を身に付けるため、生産現場のマネジメントについて学ぶ「経営実習Ⅰ」(4年次前期 必修5単位)、農林業経営について学ぶ「経営実習Ⅱ」(4年次後期 必修5単位)を配置する。

<臨地実務実習の流れ>

3年(後期)	4年(前期)	4年(後期)
企業実習	→ 経営実習Ⅰ	→ 経営実習Ⅱ
(目的) 実践的な生産技術	(目的) 生産現場のマネジメントを行うために必要な知識・技能	(目的) 農林業経営体の経営や経営戦略、加工、流通、販売等

2 実習の具体的な内容

(1)「企業実習」(3年次後期 必修10単位)

①目的

先進的な農林業経営体の生産現場での実習を通じて、学内で学んだ知識・技能をもとに実践的な生産技術を学ぶ。

②目標

- a. 生産現場での基本的な作業工程について理解することが出来る。
- b. 各作業工程に必要な基本的な技術を身につける。

③方法

実習は、「臨地実務実習要綱」に基づいて実施する。

3年次後期に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約2カ月間実施する。学生数は1施設1名を予定している。

企業実習の受講に当たっては、「圃場実習(栽培)」、「圃場実習(畜産)」、「演習林実習」、「生産マネジメント実習Ⅰ」において、基本的な生産技術を学んでいることを前提とする。実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。

実習中は、臨地実務実習指導者のもと、実際の生産現場を体験する。日々の作業は、臨地実務実習指導者の指示に従って行い、毎日、作業内容について記録を行う。実習指導は、臨地実務実習指導者と本学教員が連携し、適宜連絡を取り合い、学生の実習状況について情報を共有し、助言・指導を行う。

実習終了後は、報告書の作成、報告会の実施により、生産現場で必要となる技術について理解を深める。

(2) 経営実習Ⅰ(4年次前期 必修5単位)

①目的

生産現場のマネジメントを行うために必要な知識・技能を学ぶ。

②目標

- a. 生産現場の年間計画が理解できる。
- b. 生産現場の必要な要素(資材、労力、資金)について理解し、これらを適切に配置した生産マネジメントについて理解できる。

③方法

実習は、「臨地実務実習要綱」に基づいて実施する。

4年次前期に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約1ヶ月間の実習を行う。1施設1～4名を想定している。

実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。実習中は、臨地実務実習指導者の指示のもとで作業を行いながら、人員配置、機械、生産資材の利用計画など生産現場のマネジメントに必要な知識・技能を学ぶ。実習終了後は経営分析演習Ⅰにて実習先の分析を行った後、報告会を実施し、生産現場のマネジメントについて理解を深める。

(3) 経営実習Ⅱ (4年次後期 必修5単位)

①目的

農林業経営体の経営や経営戦略、加工、流通、販売等について学ぶ。

②目標

- a 農林業経営体の経営戦略について理解する。
- b 経営戦略に基づいた経営のあり方について理解する。
- c 生産現場以外の加工・流通・販売について理解する。

③方法

実習は、「臨地実務実習要綱」に基づいて実施する。

4年次後期に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約1ヶ月間の実習を行う。1施設1～4名を想定している。

実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。実習中は、臨地実務実習指導者の指示のもと作業を行いながら、農林業経営体の経営、生産現場以外の加工・流通・販売等について学ぶ。実習終了後は、経営分析演習Ⅱにて研修先の分析を行った後、報告会を実施し、農林業経営について理解を深める。

3 評価方法

全日程の80%以上の出席で単位認定の資格を得るものとする。単位認定における成績評価の項目は、a～dの通りである。aについては、臨地実務実習指導者へ評価基準を示す。「企業実習」では、「職業人としての適性」、「生産管理」について、「経営実習Ⅰ」では、「職業人としての適性」、「生産管理」、「作業管理」について、「経営実習Ⅱ」では、「職業人としての適性」、「生産管理」、「作業管理」、「財務管理」について評価基準を設けて、評価を行う。なお、評価表は、「臨地実務実習要綱」27ページ以降に示す。

<成績評価の項目>

- a. 臨地実務実習指導者による成績評価
- b. 臨地実務実習中の作業記録・自己点検表
- c. 臨地実務実習後の報告会での報告内容
- d. 事後報告書

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (40ページ)

新	旧
11 実習の具体的計画 (略) <u>(2) 臨地実務実習 (資料 29 臨地実務実習指導要綱)</u> <u>①実習の流れ</u> 本学の臨地実務実習は、教育課程で示	11 実習の具体的計画 (略) (2) 臨地実務実習 ①実習の目的 3年次の「企業実習」では、農林業

新	旧				
<p>す「<u>企業実習</u>」、「<u>経営実習Ⅰ</u>」、「<u>経営実習Ⅱ</u>」を行う。<u>臨地実務実習の内容は「臨地実務実習要綱」を基本として実施する。</u></p> <div style="text-align: center;"> <table border="1" style="margin: 0 auto;"> <tr> <td style="padding: 2px;">1年次</td> <td style="padding: 2px;">2年次</td> <td style="padding: 2px;">3年次</td> <td style="padding: 2px;">4年次</td> </tr> </table> <p style="margin: 5px 0;"> 企業実習 → 経営実習Ⅰ → 経営実習Ⅱ </p> </div> <p><臨地実務実習の流れ></p> <p>②専門職大学としての取り組み</p> <p><u>専門職大学としての教育成果をあげるための取り組みとして、職業専門科目に多くの実習科目を配置し、生産から販売まで農林業経営に必要な知識や技能を学修した上で、臨地実務実習を実施する履修体系とする。学内実習では、チェック表を作成して学生が学修すべき知識や技能を明確にし、実習を実施する。</u></p> <p><u>成績評価は、臨地実務実習の評価基準を本学として統一し、専任教員による認定ではなく、臨地実務実習委員会による認定とする。</u></p> <p><u>臨地実務実習の水準を保つため、臨地実務実習終了後に、学生が臨地実務先を評価するためのアンケート調査を実施する。この結果は、臨地実務実習の目標と学修に乖離がないかを確認し、臨地実務実習指導者と専任教員の連携した指導に活用する。</u></p> <p>③臨地実務実習計画の概要</p> <p><u>本学の養成する人材像である「農林業の生産技術や知識にくわえ、経営体の経営革新を推進する、加工・流通・販売への応用力や経営管理能力、先端技術への対応力を有する」ことを目標に、農林業経営者とし</u></p>	1年次	2年次	3年次	4年次	<p>経営体で実習を行うことで、実践的な生産技術を、4年次の「<u>経営実習Ⅰ</u>」および「<u>経営実習Ⅱ</u>」では、実践的な経営について学ぶことを目的とする。</p> <p>②実習の目標</p> <p>実際の農林業現場で学ぶことで、実践的な生産技術や生産現場のオペレーション、経営戦略に基づいた経営手法等を修得することを目標とする。</p> <p>③実習の計画</p> <p>ア 3年次</p> <p>実践的な生産技術について学ぶ「<u>企業実習</u>」を配置する。</p> <p>イ 4年次</p>
1年次	2年次	3年次	4年次		

新	旧
<p>ての態度や責任、生産の知識と技術、経営管理能力を身につけるとともに、自主的に学習を進める能力と、他者との協調力を養う。</p> <p><u>臨地実務実習は3年次に「企業実習」(必修10単位)、4年次に「経営実習Ⅰ」(必修5単位)と「経営実習Ⅱ」(必修5単位)を配置する。</u></p> <p>④臨地実務実習の実施</p> <p><u>臨地実務実習指導者の指導を受けながら、農林業の実際について体験し、各実習の目標を達成することで、農林業経営に必要な能力を養う。</u></p> <p>⑤臨地実務実習の種類と目的</p> <p><u>ア 「企業実習」(3年次後期 必修10単位)</u></p> <p><u>(ア) 目的</u></p> <p><u>先進的な農林業経営体での実習を通じて、学内で学んだ知識・技能をもとに実践的な生産技術を学ぶ。</u></p> <p><u>(イ) 目標</u></p> <p><u>a. 生産現場での基本的な作業工程について理解することが出来る。</u></p> <p><u>b. 各作業工程に必要な基本的な技術を身につける。</u></p> <p><u>(ウ) 方法</u></p> <p><u>実習は、「臨地実務実習要綱」(資料29)に基づいて実施する。</u></p> <p><u>3年次に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約2カ月間実施する。学生数は1施設1名を予定している。</u></p> <p><u>企業実習の受講に当たっては、「圃</u></p>	<p>農林業経営体の生産現場において、農林業経営体の持続と発展に向けた効率的な人員配置、適切な生産資材の利用、生産情報の収集と利用法について学ぶ「経営実習Ⅰ」と、農林業経営体の経営戦略と戦略に基づく経営について学ぶ「経営実習Ⅱ」を配置する。</p> <p>④実習先の確保状況</p> <p>「企業実習」及び「経営実習Ⅰ」、「経営実習Ⅱ」の実習先である農林業経営体は、32経営体を確保している。</p> <p>なお、実習の実施に当たっては、受入先と大学の間で受入れに関する取り決めを交わす。</p> <p>⑤実習先との連携体制</p> <p>ア 実習前の連携体制</p> <p>実習前には、学生、担当教員、受入側で事前に実習計画の確認を、大学側と受入側が緊密に連携して事前準備を行う。</p> <p>イ 実習中の連携体制</p> <p>実習中は、受入側の担当者を決め、学生が相談しやすい体制を作る。</p> <p>また、教員が定期的に訪問し、受入側や学生に実習の実施状況や学生の状況を確認する。</p> <p>ウ 実習後の連携体制</p> <p>実施後は、問題点や課題点を大学側と受入側で共有し、次回の実習に反映する体制とする。</p>

新	旧
<p><u>場実習（栽培）、「圃場実習（畜産）」、「演習林実習」及び「生産マネジメント実習Ⅰ」において、基本的な生産技術を学んでいることを前提とする。</u></p> <p><u>実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。</u></p> <p><u>実習中は、臨地実務実習指導者のもと、実際の生産現場を体験する。日々の作業は、臨地実務実習指導者の指示に従って行い、毎日、作業内容について記録を行う。実習指導は、臨地実務実習指導者と本学教員が連携し、適宜連絡を取り合い、学生の実習状況について情報を共有し、助言・指導を行う。</u></p> <p><u>実習終了後は、報告書の作成、報告会の実施により、生産現場や生産現場で必要となる技術について理解を深める。</u></p> <p><u>(エ) 評価</u></p> <p><u>単位認定における成績評価の項目は、次の通りである。</u></p> <p><u>a. 臨地実務実習指導者による成績評価</u></p> <p><u>b. 臨地実務実習中の作業記録・自己点検表</u></p> <p><u>c. 臨地実務実習後の報告会での報告内容</u></p> <p><u>d. 事後報告書</u></p> <p><u>イ 経営実習Ⅰ（4年次前期 必修5単位）</u></p> <p><u>(ア) 目的</u></p> <p><u>生産現場のマネジメントを行うために必要な知識・技能を学ぶ。</u></p> <p><u>(イ) 目標</u></p> <p><u>a. 生産現場の年間計画が理解できる。</u></p> <p><u>b. 生産現場の必要な要素（資材、労力、資金）について理解し、これらを適切に配置した生産マネジメントにつ</u></p>	

新	旧
<p><u>いて理解できる。</u></p> <p><u>(ウ) 方法</u></p> <p><u>実習は、「臨地実務実習要綱」(資料29)に基づいて実施する。</u></p> <p><u>4年次に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約1ヶ月間の実習を行う。1施設1～4名を想定している。</u></p> <p><u>実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。</u></p> <p><u>実習中は、臨地実務実習指導者の指示のもとで作業を行いながら、人員配置、機械、生産資材の利用計画など生産現場のマネジメントに必要な知識・技能を学ぶ。</u></p> <p><u>実習終了後は経営分析演習Ⅰにて実習先の分析を行った後、報告会を実施し、生産現場のマネジメントについて理解を深める。</u></p> <p><u>(エ) 評価</u></p> <p><u>単位認定における成績評価の項目は、次の通りである。</u></p> <p><u>a. 臨地実務実習指導者による成績評価</u></p> <p><u>b. 臨地実務実習中の作業記録・自己点検表</u></p> <p><u>c. 臨地実務実習後の報告会での報告内容</u></p> <p><u>d. 事後報告書</u></p> <p><u>ウ 経営実習Ⅱ(4年次後期 必修5単位)</u></p> <p><u>(ア) 目的</u></p> <p><u>農林業経営体の経営や経営戦略、加工、流通、販売等について学ぶ。</u></p> <p><u>(イ) 目標</u></p> <p><u>a. 農林業経営体の経営戦略について理解する。</u></p>	

新	旧
<p><u>b. 戦略に基づいた経営のあり方について理解する。</u></p> <p><u>c. 生産現場以外の加工・流通・販売について理解する。</u></p> <p><u>(ウ) 方法</u></p> <p><u>実習は、「臨地実務実習要綱」(資料29)に基づいて実施する。</u></p> <p><u>4年次に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約1ヶ月間の実習を行う。1施設1～4名を想定している。</u></p> <p><u>実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。</u></p> <p><u>実習中は、臨地実務実習指導者の指示のもと作業を行いながら、農林業経営体の経営、生産現場以外の加工・流通・販売等について学ぶ。</u></p> <p><u>実習終了後は、経営分析演習Ⅱにて研修先の分析を行った後、報告会を実施し、農林業経営について理解を深める。</u></p> <p><u>(エ) 評価</u></p> <p><u>単位認定における成績評価の項目は、次の通りである。</u></p> <p><u>a. 臨地実務実習指導者による成績評価</u></p> <p><u>b. 臨地実務実習中の作業記録・自己点検表</u></p> <p><u>c. 臨地実務実習後の報告会での報告内容</u></p> <p><u>d. 事後報告書</u></p> <p>⑥実習先の確保状況と選定基準</p> <p><u>「企業実習」の臨地実務実習先は、生産に関する技術力を有している株式会社や有限会社、協同組合とし、本選定基準を満たす実習先として、24</u></p>	<p>⑥実習水準の確保と対策</p> <p>各実習先には、1～5名の少人数の学生を配置し、受入先から細かな指導が受けられるよう体制を整える。実習中は、専任教員が定期的に受入先を訪問し、実習の実施状況について確認を行い、問題点や課題点があれば、受入先と連携しながら解決に努める。</p>

新	旧
<p><u>経営体を確保している。</u></p> <p><u>「経営実習Ⅰ・Ⅱ」の臨地実務実習先は、将来の経営幹部を目指す学生のモデルとなりうる十分な経営規模(年間売上高5千万円以上)を有する法人経営体とし、選定基準を満たす実習先を8経営体確保している。</u></p> <p>⑦実習先との連携体制</p> <p><u>教員と臨地実務実習指導者が連携して臨地実務実習指導を行う。それぞれの役割分担を共通理解し、緊密な連携のもとで学習効果の高い臨地実務実習が可能となる体制を構築する。</u></p> <p><u>実習前には、学生、担当教員、受入側で事前に実習計画を確認し、教員と受入側が緊密に連携して事前準備を行う。</u></p> <p><u>実習中は、受入側の担当者を決め、学生が相談しやすい体制を作る。</u></p> <p><u>また、教員が定期的に訪問し、受入側や学生に実習の実施状況や学生の状況を確認する。</u></p> <p><u>実施後は、問題点や課題点を教員と受入側で共有し、次回の実習に反映する体制とする。</u></p> <p><u>ア 教員：臨地実務実習担当者</u></p> <p><u>専任教員が担当し、臨地実務実習の計画・実施・評価、臨地実務実習指導体制の構築、臨地実務実習施設との連絡調整、臨地実務実習指導者と臨地実務実習内容・方法に関する協議・調整の役割を担う。</u></p> <p><u>イ 農林業経営体：臨地実務実習指導者</u></p> <p><u>臨地実務実習指導者は、受入側の農林業経営体の社員(職員)で、現場での経験が5年以上ある者とする。</u></p>	

新	旧
<p>⑧実習水準の確保と対策</p> <p><u>臨地実務実習の水準を保つため、先に示した隣地実務実習指導体制、及び臨地実務実習施設との連携体制の構築を行う。また、学生に対しては、実習先の選定から実習前の事前学習までの指導を丁寧に行い、臨地実務実習の目的の周知と学生の不安軽減に努め、実習中も指導できる体制を構築する。</u></p> <p><u>各実習先には、1～4名の少人数の学生を配置し、受入先から細かな指導が受けられるよう体制を整える。教員は、実習前、実習中及び実習後に臨地実務実習先を訪問し、綿密な連携をとる。実習前は、実習の目的・方法・支援体制について実習先に丁寧に説明し、実習に対する共通認識を持つ。実習中は定期的に受入先を訪問し、実習の実施状況について確認を行い、問題点や課題点があれば、受入先と連携しながら解決に努める。実習後は、学生の状況等について情報交換を行い、次の実習に反映させる。</u></p> <p><u>また、臨地実務実習指導者には、豊富な実務経験と高い技能が必要となるため、5年以上の実務経験を必要とする。</u></p> <p>⑨実習指導体制</p> <p><u>実習を円滑に実施できるよう学内に臨地実務実習委員会を設置し、実習計画の策定と実施後の検証を行う。</u></p> <p><u>実習指導教員の指導力を育成するため、学内研修会を開催する。また、学外研修へ積極的に参加させる。</u></p> <p>⑩実習の事前準備</p> <p><u>臨地実務実習が安全に実施できるよう、学内において安全教育を行う。事故</u></p>	

新	旧
<p>が発生した場合に備え、連絡体制や対応方法、任意保険への加入等の管理体制を整える。</p> <p>⑪教員の配置並び臨地実務実習巡回指導計画</p> <p>専任教員を配置し、各臨地実務実習期間中に巡回指導を実施する。その際は、臨地実務実習目標の達成度や顕在化した課題の明確化をはかり、学生、教員、臨地実務実習指導者の相互認識のもとに一貫した指導体制をとる。また、臨地実務実習指導者は臨地実務実習開始前に決定し、学生の状況について把握して円滑な指導ができる体制をとる。</p> <p>⑫臨地実務実習施設における指導者の配置計画</p> <p>臨地実務実習指導者1名につき、学生の配置は1～4名とする。臨地実務実習指導者は、経験年数や専門知識を考慮して受入先代表者に選出してもらう。</p> <p>⑬成績評価体制及び単位認定</p> <p>臨地実務実習評価表は、臨地実務実習の科目別に3種類（企業実習、経営実習Ⅰ、経営実習Ⅱ）に分かれており、それぞれの臨地実務実習において職業人としての適性、実施内容、生産管理、作業管理、販売管理、財務管理の各項目ならびに総合コメント等について記載するようになっている。</p> <p>各実習において、全日程の80%以上の出席で単位認定の資格を得るものとする。</p> <p>a. 態度・適性は、社会人及び専門職業人としての一般的事項の評価である。</p>	

新	旧												
<p>b. <u>臨地実務実習の実施内容について、学内で学んだ専門的な知識と技能を農林業現場で活用・応用できるか評価する。</u></p> <p><u>上記のいずれも、各項目を5段階で評価する。到達度の各段階は、次の通りである。</u></p> <p><評価> _____</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">評価</th> <th style="text-align: center;">内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">A : 優秀</td> <td><u>わずかな助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">B : 良好</td> <td><u>時として助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">C : 普通</td> <td><u>助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">D : やや劣る</td> <td><u>多くの助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">E : 劣る</td> <td><u>常に助言・指導を行うが、当該項目を実施できない。</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>⑭緊急連絡体制</p> <p><u>実習中の事故など不足の事態に備え、緊急連絡先や緊急時の対応を臨地実務実習要綱（資料29）に定め、教員だけでなく実習を受講する学生にも周知の徹底を図る。</u></p> <p>(3) 削除</p>	評価	内容	A : 優秀	<u>わずかな助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>	B : 良好	<u>時として助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>	C : 普通	<u>助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>	D : やや劣る	<u>多くの助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>	E : 劣る	<u>常に助言・指導を行うが、当該項目を実施できない。</u>	<p>(3) 実習指導体制</p> <p><u>実習を円滑に実施できるよう学内に実習委員会を設置し、実習計画の策定と実施後の検証を行う。</u></p>
評価	内容												
A : 優秀	<u>わずかな助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>												
B : 良好	<u>時として助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>												
C : 普通	<u>助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>												
D : やや劣る	<u>多くの助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</u>												
E : 劣る	<u>常に助言・指導を行うが、当該項目を実施できない。</u>												

新	旧
<p>(3) 実習の事前準備</p> <p>①学生保険への加入</p> <p>実習中は、様々な事故の発生が予想される。このため、学生の実習中のケガに備えた保険及び、学生が他人にケガを負わせることや物を壊した場合の備えに賠償責任保険へ加入する。</p> <p>②感染予防対策</p> <p><u>本学を設置する磐田市</u>は破傷風の汚染地帯である。このため、感染防止のためにワクチン接種を行う。また、必要に応じてその他のワクチン接種を行う。</p> <p>(4) 成績評価体制及び単位認定方法</p> <p>成績評価及び単位認定は、学生の報告資料（レポート）や発表資料、学生の取組姿勢を総合的に判断して行う。</p> <p>(5) 緊急連絡体制</p> <p>実習中の事故など不足の事態に備え、緊急連絡先や緊急時の対応について定める対応マニュアルを整備し、教員だけでなく実習を受講する学生にも周知の徹底を図る。</p>	<p><u>実習指導教員の指導力を育成するため、学内研修会を開催する。また、学外研修へ積極的に参加させる。</u></p> <p>(4) 実習の事前準備</p> <p>①学生保険への加入</p> <p>実習中は、様々な事故の発生が予想される。このため、学生の実習中のケガに備えた保険及び、学生が他人にケガを負わせることや物を壊した場合の備えに賠償責任保険へ加入する。</p> <p>②感染予防対策</p> <p><u>本学が設置される磐田市</u>は破傷風の汚染地帯である。このため、感染防止のためにワクチン接種を行う。また、必要に応じてその他のワクチン接種を行う。</p> <p>(5) 成績評価体制及び単位認定方法</p> <p>成績評価及び単位認定は、学生の報告資料（レポート）や発表資料、学生の取組姿勢を総合的に判断して行う。</p> <p>(6) 緊急連絡体制</p> <p>実習中の事故など不足の事態に備え、緊急連絡先や緊急時の対応について定める対応マニュアルを整備し、教員だけでなく実習を受講する学生にも周知の徹底を図る。</p>

13. <臨地実務実習の具体的計画が不明確>

臨地実務実習について、具体的な説明が不足しているため、以下の点も踏まえて具体的な計画を示し、大学教育としてふさわしい実習水準が確保されていることを説明すること。その際、計画している実習要綱等を添付すること。

(2) 臨地実務実習施設の選定の基準や選定理由について明らかにするとともに、科目の目的を実現するために必要な実習先が確保されているかを明確に説明すること。

(対応)

臨地実務実習施設の選定基準について、説明が不十分であったため、具体的に説明する。

(詳細説明)

選定基準や選定理由を下表に示す。

企業実習の臨地実務実習先は、法人経営体を選定した。農業分野及び畜産分野の臨地実務実習先は、株式会社や有限会社といった法人経営体である。また、林業分野の臨地実務実習先は、株式会社や森林組合である。法人経営体は、生産に関する十分な技術力を有していると考えられるため、実践的な生産知識や生産技術を学ぶ目的を達成できる。以上の選定基準を満たす実習先として、24 経営体を確保している。臨地実務実習先が選定基準を満たしているかについては、経営形態を確認して行う。

経営実習Ⅰ及び経営実習Ⅱの臨地実務実習先は、農業及び畜産分野では「ビジネス経営体」、林業分野では「ビジネス林業」に取り組む法人経営体を選定した。静岡県では、販売金額が 5,000 万円以上で、マーケティング戦略等を展開する農業法人を「ビジネス経営体」と位置づけ支援を行っている。また、需要に応じた計画的な生産や、山元への還元を増やす生産性の向上、需要者への直送取引を経営に取り入れる「ビジネス林業」に取り組む林業事業体の支援を行っている。「ビジネス経営体」や「ビジネス林業」に取り組む林業経営体は、学生の目標となる経営体である。目指す学生が、目指すベモデルとなる選定基準を満たす実習先を 8 経営体確保している。臨地実務実習先が選定基準を満たしているかについては、静岡県が調査を行っているため、その調査結果で確認を行う。

<選定基準>

実習名	選定基準	選定理由
企業実習	法人経営体	将来の農林業経営幹部を目指す学生が、生産知識・技術を学ぶために適した実習先として選定。
経営実習Ⅰ 経営実習Ⅱ	ビジネス経営体（法人経営体） 「ビジネス林業」に取り組む法人	将来の農林業経営幹部を目指す学生が、目指すベモデルとなる経営体を実習先として選定した。

13. <臨地実務実習の具体的計画が不明確>

臨地実務実習について、具体的な説明が不足しているため、以下の点も踏まえて具体的な計画を示し、大学教育としてふさわしい実習水準が確保されていることを説明すること。その際、計画している実習要綱等を添付すること。

(3) 実習先の指導者に求める要件について具体的に説明すること。また、指導者の教育の質をどのように確保するのか、取組や方策についても説明すること。

(対応)

臨地実務実習先の指導者について求める要件について説明が不足していたため、具体的に説明する。

(詳細説明)

企業実習では、実践的な生産技術について学ぶ。現在、生産に関する十分な技術力を有していると考えられる法人経営体24箇所を確保している。生産技術について指導するため、十分な技術力を有しているか考えられる5年以上の実務経験を技術者に求める。

また、経営実習Ⅰでは生産現場のマネジメントを、経営実習Ⅱでは経営や経営戦略、加工、流通、販売など将来の経営幹部に必要な能力を学修するための実習である。経営について指導するため、その能力を有すると考えられる法人の代表としての経験若しくは、10年以上の実務経験を求める指導者に求める。

以上の指導者に求める指導者の要件について、臨地実務実習先の代表者に説明し、理解を頂いて、要件を満たす指導者を配置する。

また、実習指導者の質を確保するため、大学の実習指導担当教員が、年1回程度、臨地実務実習先の指導者向けに、実習内容や実習目的、指導方法などについて学ぶの研修会を開催する。

14. <実習の実施体制が不明確>

専任教員の巡回指導計画について、科目に対する専任教員の配置状況を具体的に説明すること。その際、講義と実習を同時期に担当する場合は、教員ごとの科目等担当時間割等を資料として添付するなどして、教員の負担等の観点から無理のない計画であることについても説明すること。

(対応)

巡回指導計画について、説明が不足していたため、臨地実務実習である「企業実習」を担当する4名並びに、「経営実習Ⅰ・Ⅱ」を担当する24名の時間割と巡回指導計画を示し、教員の負担等の観点から、無理のない計画であることを説明する。(別添資料14-1:企業実習巡回指導計画、別添資料14-2:経営実習Ⅰ巡回指導計画、別添資料14-3:経営実習Ⅱ巡回指導計画、別添資料14-4:教員時間割)

(詳細説明)

「企業実習」は3年後期の前半の約2ヶ月(10~11月)に開講し、24名の学生を、教員4名(貞弘恵、杉山恵太郎、小澤朗人、池田潔彦)が担当する。担当する学生は、貞弘恵氏が2名、杉山恵太郎氏8名、小澤朗人氏8名、池田潔彦氏が6名である。巡回指導は、2週間に1回の頻度で実施する。本計画は、4名の教員の時間割を考慮して作成しており、無理のない計画となっている(別添資料14-1:企業実習巡回指導計画、別添資料14-4:教員時間割)。

「経営実習Ⅰ」は4年前期の前半の1ヶ月(4~5月)に開講し、専任教員24名が担当し、担当する学生数は各教員1名である。巡回指導は、2週間に1回の頻度であり、教員の時間割を考慮して作成しており、無理のない計画となっている(14-2:経営実習Ⅰ巡回指導計画、別添資料14-4:教員時間割)。

「経営実習Ⅱ」は4月後期の前半1ヶ月(10月)に開講し、専任教員24名が担当し、担当する学生数は各教員1名である。巡回指導は、2週間に1回の頻度であり、教員の時間割を考慮して作成しており、無理のない計画となっている(14-3:経営実習Ⅱ巡回指導計画、別添資料14-4:教員時間割)。

なお、実習指導体制の強化のため、「生産マネジメント実習Ⅰ(林業)」、「生産マネジメント実習Ⅱ(林業)」、「圃場実習(畜産)」、「生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)」、「生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)」についても、専任教員を追加して配置することとした。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (40 ページ)

新	旧								
<p>11 実習の具体的計画 (略)</p> <p>(3) 臨地実務実習 (資料 29 臨地実務実習指導要綱)</p> <p>①実習の流れ</p> <p>本学の臨地実務実習は、教育課程で示す「企業実習」、「経営実習Ⅰ」、「経営実習Ⅱ」を行う。臨地実務実習の内容は「臨地実務実習要綱」を基本として実施する。</p> <table border="1" data-bbox="240 882 724 943"> <tr> <td>1年次</td> <td>2年次</td> <td>3年次</td> <td>4年次</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>企業実習</td> <td>経営実習Ⅰ → 経営実習Ⅱ</td> </tr> </table> <p><臨地実務実習の流れ></p> <p>②専門職大学としての取り組み</p> <p>専門職大学としての教育成果をあげるための取り組みとして、職業専門科目に多くの実習科目を配置し、生産から販売まで農林業経営に必要な知識や技能を学修した上で、臨地実務実習を実施する履修体系とする。学内実習では、チェック表を作成して学生が学修すべき知識や技能を明確にし、実習を実施する。</p> <p>成績評価は、臨地実務実習の評価基準を本学として統一し、専任教員による認定ではなく、臨地実務実習委員会による認定とする。</p> <p>臨地実務実習の水準を保つため、臨地実務実習終了後に、学生が臨地実務先を評価するためのアンケート調査を実施する。この結果は、臨地実務実習の目標と学修に乖離がないかを確認し、臨地実務実習指導者と専任教員の連携した指導に活用する。</p>	1年次	2年次	3年次	4年次			企業実習	経営実習Ⅰ → 経営実習Ⅱ	<p>11 実習の具体的計画 (略)</p> <p>(2) 臨地実務実習</p> <p>①実習の目的</p> <p>3年次の「企業実習」では、農林業経営体で実習を行うことで、実践的な生産技術を、4年次の「経営実習Ⅰ」および「経営実習Ⅱ」では、実践的な経営について学ぶことを目的とする。</p> <p>②実習の目標</p> <p>実際の農林業現場で学ぶことで、実践的な生産技術や生産現場のオペレーション、経営戦略に基づいた経営手法等を修得することを目標とする。</p>
1年次	2年次	3年次	4年次						
		企業実習	経営実習Ⅰ → 経営実習Ⅱ						

新	旧
<p><u>③臨地実務実習計画の概要</u> <u>本学の養成する人材像である「農林業の生産技術や知識にくわえ、経営体の経営革新を推進する、加工・流通・販売への応用力や経営管理能力、先端技術への対応力を有する」ことを目標に、農林業経営者としての態度や責任、生産の知識と技術、経営管理能力を身につけるとともに、自主的に学習を進める能力と、他者との協調力を養う。</u> <u>臨地実務実習は3年次に「企業実習」(必修10単位)、4年次に「経営実習Ⅰ」(必修5単位)と「経営実習Ⅱ」(必修5単位)を配置する。</u></p> <p><u>④臨地実務実習の実施</u> <u>臨地実務実習指導者の指導を受けながら、農林業の実際について体験し、各実習の目標を達成することで、農林業経営に必要な能力を養う。</u></p> <p><u>⑤臨地実務実習の種類と目的</u> <u>ア 「企業実習」(3年次後期 必修10単位)</u> <u>(ア) 目的</u> <u>先進的な農林業経営体での実習を通じて、学内で学んだ知識・技能をもとに実践的な生産技術を学ぶ。</u> <u>(イ) 目標</u> <u>a. 生産現場での基本的な作業工程について理解することが出来る。</u> <u>b. 各作業工程に必要な基本的な技術を身につける。</u> <u>(ウ) 方法</u></p>	<p><u>③実習の計画</u> <u>ア 3年次</u> <u>実践的な生産技術について学ぶ「企業実習」を配置する。</u></p> <p><u>イ 4年次</u> <u>農林業経営体の生産現場において、農林業経営体の持続と発展に向けた効率的な人員配置、適切な生産資材の利用、生産情報の収集と利用法について学ぶ「経営実習Ⅰ」と、農林業経営体の経営戦略と戦略に基づく経営について学ぶ「経営実習Ⅱ」を配置する。</u></p> <p><u>④実習先の確保状況</u> <u>「企業実習」及び「経営実習Ⅰ」、「経営実習Ⅱ」の実習先である農林業経営体は、32経営体を確保している。</u> <u>なお、実習の実施に当たっては、受入先と大学の間で受入れに関する取り決めを交わす。</u></p> <p><u>⑤実習先との連携体制</u> <u>ア 実習前の連携体制</u> <u>実習前には、学生、担当教員、受入側で事前に実習計画の確認を、大学側と受入側が緊密に連携して事前準備を行う。</u></p> <p><u>イ 実習中の連携体制</u> <u>実習中は、受入側の担当者を決め、学生が相談しやすい体制を作る。</u> <u>また、教員が定期的に訪問し、受入側や学生に実習の実施状況や</u></p>

新	旧
<p><u>実習は、「臨地実務実習要綱」(資料29)に基づいて実施する。</u></p> <p><u>3年次に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約2カ月間実施する。学生数は1施設1名を予定している。</u></p> <p><u>企業実習の受講に当たっては、「圃場実習(栽培)」、「圃場実習(畜産)」、「演習林実習」及び「生産マネジメント実習Ⅰ」において、基本的な生産技術を学んでいることを前提とする。</u></p> <p><u>実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。</u></p> <p><u>実習中は、臨地実務実習指導者のもと、実際の生産現場を体験する。日々の作業は、臨地実務実習指導者の指示に従って行い、毎日、作業内容について記録を行う。実習指導は、臨地実務実習指導者と本学教員が連携し、適宜連絡を取り合い、学生の実習状況について情報を共有し、助言・指導を行う。</u></p> <p><u>実習終了後は、報告書の作成、報告会の実施により、生産現場や生産現場で必要となる技術について理解を深める。</u></p> <p><u>(エ) 評価</u></p> <p><u>単位認定における成績評価の項目は、次の通りである。</u></p> <p><u>a. 臨地実務実習指導者による成績評価</u></p> <p><u>b. 臨地実務実習中の作業記録・自己点検表</u></p> <p><u>c. 臨地実務実習後の報告会での報告内容</u></p> <p><u>d. 事後報告書</u></p> <p><u>イ 経営実習Ⅰ(4年次前期 必修5単位)</u></p> <p><u>(ア) 目的</u></p>	<p>学生の状況を確認する。</p> <p>ウ 実習後の連携体制</p> <p>実施後は、問題点や課題点を大学側と受入側で共有し、次回の実習に反映する体制とする。</p>

新	旧
<p><u>生産現場のマネジメントを行うために必要な知識・技能を学ぶ。</u></p> <p><u>(イ) 目標</u></p> <p><u>a. 生産現場の年間計画が理解できる。</u></p> <p><u>b. 生産現場に必要な要素（資材、労力、資金）について理解し、これらを適切に配置した生産マネジメントについて理解できる。</u></p> <p><u>(ウ) 方法</u></p> <p><u>実習は、「臨地実務実習要綱」（資料29）に基づいて実施する。</u></p> <p><u>4年次に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約1ヶ月間の実習を行う。1施設1～4名を想定している。</u></p> <p><u>実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。</u></p> <p><u>実習中は、臨地実務実習指導者の指示のもとで作業を行いながら、人員配置、機械、生産資材の利用計画など生産現場のマネジメントに必要な知識・技能を学ぶ。</u></p> <p><u>実習終了後は経営分析演習Ⅰにて実習先の分析を行った後、報告会を実施し、生産現場のマネジメントについて理解を深める。</u></p> <p><u>(エ) 評価</u></p> <p><u>単位認定における成績評価の項目は、次の通りである。</u></p> <p><u>a. 臨地実務実習指導者による成績評価</u></p> <p><u>b. 臨地実務実習中の作業記録・自己点検表</u></p> <p><u>c. 臨地実務実習後の報告会での報告内容</u></p> <p><u>d. 事後報告書</u></p>	

新	旧
<p><u>ウ 経営実習Ⅱ（4年次後期 必修5単位）</u></p> <p><u>（ア）目的</u> <u>農林業経営体の経営や経営戦略、加工、流通、販売等について学ぶ。</u></p> <p><u>（イ）目標</u></p> <p><u>a. 農林業経営体の経営戦略について理解する。</u></p> <p><u>b. 戦略に基づいた経営のあり方について理解する。</u></p> <p><u>c. 生産現場以外の加工・流通・販売について理解する。</u></p> <p><u>（ウ）方法</u></p> <p><u>実習は、「臨地実務実習要綱」（資料29）に基づいて実施する。</u></p> <p><u>4年次に配置し、学生が希望する農林業経営体において、約1ヶ月間の実習を行う。1施設1～4名を想定している。</u></p> <p><u>実習実施前には、実習受入れ先の農林業経営体の基本的な経営情報について調査を行う。</u></p> <p><u>実習中は、臨地実務実習指導者の指示のもと作業を行いながら、農林業経営体の経営、生産現場以外の加工・流通・販売等について学ぶ。</u></p> <p><u>実習終了後は、経営分析演習Ⅱにて研修先の分析を行った後、報告会を実施し、農林業経営について理解を深める。</u></p> <p><u>（エ）評価</u></p> <p><u>単位認定における成績評価の項目は、次の通りである。</u></p> <p><u>a. 臨地実務実習指導者による成績評価</u></p> <p><u>b. 臨地実務実習中の作業記録・自己点検表</u></p> <p><u>c. 臨地実務実習後の報告会での報告内容</u></p>	<p>⑥実習水準の確保と対策</p> <p>各実習先には、1～5名の少人数の学生を配置し、受入先から細かな指</p>

新	旧
<p>d. <u>事後報告書</u></p> <p>⑥実習先の確保状況と選定基準</p> <p><u>「企業実習」の臨地実務実習先は、生産に関する技術力を有している株式会社や有限会社、協同組合とし、本選定基準を満たす実習先として、24経営体を確保している。</u></p> <p><u>「経営実習Ⅰ・Ⅱ」の臨地実務実習先は、将来の経営幹部を目指す学生のモデルとなりうる十分な経営規模(年間売上高5千万円以上)を有する法人経営体とし、選定基準を満たす実習先を8経営体確保している。</u></p> <p>⑦実習先との連携体制</p> <p><u>教員と臨地実務実習指導者が連携して臨地実務実習指導を行う。それぞれの役割分担を共通理解し、緊密な連携のもとで学習効果の高い臨地実務実習が可能となる体制を構築する。</u></p> <p><u>実習前には、学生、担当教員、受入側で事前に実習計画を確認し、教員と受入側が緊密に連携して事前準備を行う。</u></p> <p><u>実習中は、受入側の担当者を決め、学生が相談しやすい体制を作る。</u></p> <p><u>また、教員が定期的に訪問し、受入側や学生に実習の実施状況や学生の状況を確認する。</u></p> <p><u>実施後は、問題点や課題点を教員と受入側で共有し、次回の実習に反映する体制とする。</u></p> <p>ア 教員：臨地実務実習担当者</p> <p><u>専任教員が担当し、臨地実務実習の計画・実施・評価、臨地実務実習指導体制の構築、臨地実務実習施設との連絡調整、臨地実務実習指導者と臨地実</u></p>	<p>導が受けられるよう体制を整える。実習中は、専任教員が定期的に受入先を訪問し、実習の実施状況について確認を行い、問題点や課題点があれば、受入先と連携しながら解決に努める。</p>

新	旧
<p><u>務実習内容・方法に関する協議・調整の役割を担う。</u></p> <p><u>イ 農林業経営体：臨地実務実習指導者</u> <u>臨地実務実習指導者は、受入側の農林業経営体の社員（職員）で、現場での経験が5年以上ある者とする。</u></p> <p>⑧実習水準の確保と対策</p> <p><u>臨地実務実習の水準を保つため、先に示した隣地実務実習指導体制、及び臨地実務実習施設との連携体制の構築を行う。また、学生に対しては、実習先の選定から実習前の事前学習までの指導を丁寧に行い、臨地実務実習の目的の周知と学生の不安軽減に努め、実習中も指導できる体制を構築する。</u></p> <p><u>各実習先には、1～4名の少人数の学生を配置し、受入先から細かな指導が受けられるよう体制を整える。教員は、実習前、実習中及び実習後に臨地実務実習先を訪問し、綿密な連携をとる。実習前は、実習の目的・方法・支援体制について実習先に丁寧に説明し、実習に対する共通認識を持つ。実習中は定期的に受入先を訪問し、実習の実施状況について確認を行い、問題点や課題点があれば、受入先と連携しながら解決に努める。実習後は、学生の状況等について情報交換を行い、次の実習に反映させる。</u></p> <p><u>また、臨地実務実習指導者には、豊富な実務経験と高い技能が必要となるため、5年以上の実務経験を必要とする。</u></p> <p>⑨実習指導体制</p> <p><u>実習を円滑に実施できるよう学内に臨地実務実習委員会を設置し、実習計画の策定と実施後の検証を行う。</u></p>	

新	旧
<p><u>実習指導教員の指導力を育成するため、学内研修会を開催する。また、学外研修へ積極的に参加させる。</u></p> <p>⑩実習の事前準備</p> <p><u>臨地実務実習が安全に実施できるように、学内において安全教育を行う。事故が発生した場合に備え、連絡体制や対応方法、任意保険への加入等の管理体制を整える。</u></p> <p>⑪教員の配置並びに臨地実務実習巡回指導計画</p> <p><u>専任教員を配置し、各臨地実務実習期間中に巡回指導を実施する。その際は、臨地実務実習目標の達成度や顕在化した課題の明確化をはかり、学生、教員、臨地実務実習指導者の相互認識のもとに一貫した指導体制をとる。また、臨地実務実習指導者は臨地実務実習開始前に決定し、学生の状況について把握して円滑な指導ができる体制をとる。</u></p> <p>⑫臨地実務実習施設における指導者の配置計画</p> <p><u>臨地実務実習指導者1名につき、学生の配置は1～4名とする。臨地実務実習指導者は、経験年数や専門知識を考慮して受入先代表者に選出してもらう。</u></p> <p>⑬成績評価体制及び単位認定</p> <p><u>臨地実務実習評価表は、臨地実務実習の科目別に3種類（企業実習、経営実習Ⅰ、経営実習Ⅱ）に分かれており、それぞれの臨地実務実習において職業人としての適性、実施内容、生産管理、作業管理、販売管理、財務管理の各項目ならびに総合コメント等について記載するよう</u></p>	

新	旧												
<p>になっている。</p> <p>各実習において、全日程の80%以上の出席で単位認定の資格を得るものとする。</p> <p>a. 態度・適性は、社会人及び専門職業人としての一般的事項の評価である。</p> <p>b. 臨地実務実習の実施内容について、学内で学んだ専門的な知識と技能を農林業現場で活用・応用できるか評価する。</p> <p>上記のいずれも、各項目を5段階で評価する。到達度の各段階は、次の通りである。</p> <p><評価></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">評価</th> <th style="text-align: center;">内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">A : 優秀</td> <td>わずかな助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">B : 良好</td> <td>時として助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">C : 普通</td> <td>助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">D : やや劣る</td> <td>多くの助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">E : 劣る</td> <td>常に助言・指導を行うが、当該項目を実施できない。</td> </tr> </tbody> </table> <p>⑭緊急連絡体制</p> <p>実習中の事故など不足の事態に備え、緊急連絡先や緊急時の対応を臨地実務実習要綱（資料29）に定め、教員だけでな</p>	評価	内容	A : 優秀	わずかな助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。	B : 良好	時として助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。	C : 普通	助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。	D : やや劣る	多くの助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。	E : 劣る	常に助言・指導を行うが、当該項目を実施できない。	
評価	内容												
A : 優秀	わずかな助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。												
B : 良好	時として助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。												
C : 普通	助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。												
D : やや劣る	多くの助言・指導を必要とするが、当該項目を実施できる。												
E : 劣る	常に助言・指導を行うが、当該項目を実施できない。												

新	旧
<p><u>く実習を受講する学生にも周知の徹底を図る。</u></p> <p>(3) 削除</p> <p>(3) 実習の事前準備</p> <p>①学生保険への加入</p> <p>実習中は、様々な事故の発生が予想される。このため、学生の実習中のケガに備えた保険及び、学生が他人にケガを負わせることや物を壊した場合の備えに賠償責任保険へ加入する。</p> <p>②感染予防対策</p> <p><u>本学を設置する磐田市は破傷風の汚染地帯である。</u>このため、感染防止のためにワクチン接種を行う。また、必要に応じてその他のワクチン接種を行う。</p> <p><u>(4) 成績評価体制及び単位認定方法</u></p> <p>成績評価及び単位認定は、学生の報告資料（レポート）や発表資料、学生の取組姿勢を総合的に判断して行う。</p> <p><u>(5) 緊急連絡体制</u></p> <p>実習中の事故など不足の事態に備え、緊急連絡先や緊急時の対応について定める対応マニュアルを整備し、教員だけでなく実習を受講する学生にも周知の徹底を図る。</p>	<p>(3) 実習指導体制</p> <p><u>実習を円滑に実施できるよう学内に実習委員会を設置し、実習計画の策定と実施後の検証を行う。</u></p> <p><u>実習指導教員の指導力を育成するため、学内研修会を開催する。また、学外研修へ積極的に参加させる。</u></p> <p>(4) 実習の事前準備</p> <p>①学生保険への加入</p> <p>実習中は、様々な事故の発生が予想される。このため、学生の実習中のケガに備えた保険及び、学生が他人にケガを負わせることや物を壊した場合の備えに賠償責任保険へ加入する。</p> <p>②感染予防対策</p> <p><u>本学が設置される磐田市は破傷風の汚染地帯である。</u>このため、感染防止のためにワクチン接種を行う。また、必要に応じてその他のワクチン接種を行う。</p> <p><u>(5) 成績評価体制及び単位認定方法</u></p> <p>成績評価及び単位認定は、学生の報告資料（レポート）や発表資料、学生の取組姿勢を総合的に判断して行う。</p> <p><u>(6) 緊急連絡体制</u></p> <p>実習中の事故など不足の事態に備え、緊急連絡先や緊急時の対応について定める対応マニュアルを整備し、教員だけでなく実習を受講する学生にも周知の徹底を図る。</p>

15. <入学者選抜方法が不明確>

入学者の選抜方法として、「一般選抜」「推薦型選抜」「特別選抜」の3つの方法を計画しているが、「特別選抜」の募集定員が若干名となっており、入学定員の総数に対して適切な募集定員を設定しているか疑義がある。入学定員に対して具体的な募集定員に改めるか、選抜方法を修正すること。

(対応)

入学定員の総数と特別選抜の募集定員の関係が不明確となっていたため、特別選抜の募集人員関係が不明確になっていたため、特別選抜の募集人員が入学定員の総数に含まれるものであることが明確になるよう「設置の趣旨を記載した書類」に追記する。

また、一般選抜の時期については記載する必要は無いため、募集人員の表の一般選抜に関する記載を改める。

(新旧対照表) 設置の趣旨を記載した書類 (37 ページ)

新	旧
<p>(3) 選抜方法 (略)</p> <p>①一般選抜 (略)</p> <p>②推薦型選抜 (略)</p> <p>③特別選抜 特別選抜（社会人選抜、留学生選抜）は、多様な背景を持った学生を受け入れるため、出願書類審査、小論文、面接を組み合わせで行う。なお、社会人選抜については、23 歳以上、かつ、勤務経験 3 年以上のものを対象として実施する。また、留学生選抜については基本的に日本語のできる外国人を想定することとし、「日本語能力試験で N2 以上の成績を修めたもの、若しくは相当と認められる日本語能力を有するものを対象として実施する。</p>	<p>(3) 選抜方法 (略)</p> <p>①一般選抜 (略)</p> <p>②推薦型選抜 (略)</p> <p>③特別選抜 特別選抜（社会人選抜、留学生選抜）は、多様な背景を持った学生を受け入れるため、出願書類審査、小論文、面接を組み合わせで行う。なお、社会人選抜については、23 歳以上、かつ、勤務経験 3 年以上のものを対象として実施する。また、留学生選抜については基本的に日本語のできる外国人を想定することとし、「日本語能力試験で N2 以上の成績を修めたもの、若しくは相当と認められる日本語能力を有するものを対象として実施する。</p>

新							旧						
<p>なお、特別選抜（社会人選抜、留学生選抜）の募集人員は、推薦型選抜の募集人員に含まれるものとする。</p>													
<p>④募集人員</p> <p>一般選抜、推薦型選抜、特別選抜（社会人選抜、留学生選抜）の募集人員は、次の表のとおりとする。</p> <p style="text-align: right;">(単位：人)</p>							<p>④募集定員</p> <p>一般選抜、推薦型選抜、特別選抜（社会人選抜、留学生選抜）の募集定員は、次の表のとおりとする。</p> <p style="text-align: right;">(単位：人)</p>						
学部	学科	入学定員	募集人員				学部	学科	入学定員	募集人員			
			一般選抜	推薦型選抜 (公募)	特別選抜					一般選抜 前期	推薦型選抜 (公募)	特別選抜	
		社会人			留学生			社会人	留学生				
生産環境経営学部	生産環境経営学科	24	12	12 ※	若干名	若干名	生産環境経営学部	生産環境経営学科	24	12	12	若干名	若干名
<p>※推薦型選抜（公募）の募集人員は、特別選抜（社会人、留学生）の募集人員を含む。</p>													